

香川県埋蔵文化財センター年報

平成 27 年度

2017. 2

香川県埋蔵文化財センター

は じ め に

香川県埋蔵文化財センターは、埋蔵文化財の調査及び研究を行うとともに、その保存と活用を図り、県民の文化的向上に資するため、昭和 62 年 11 月 1 日に設置されました。

平成 27 年度は県立学校再編整備事業、国道 11 号大内白鳥バイパス建設、病院施設改修、国道 438 号道路改築、県道改築工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査及び過年度発掘の整理、報告書刊行をはじめ、出土品の保管・整理、普及啓発、讃岐国府跡探索事業などを実施し、これらの調査によって得られた多くの成果等をもとに、展示や、広報誌の刊行、学校での出前授業や考古学体験講座を行い、埋蔵文化財の保護意識の普及・啓発に努めました。

本書は、これらの平成 27 年度に実施した事業の内容をまとめたものです。本書が地域の歴史や文化への理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、ご指導、ご協力をいただいた関係各位にお礼を申し上げますとともに、今後とも当センターの活動に皆様の一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成 29 年 2 月

香川県埋蔵文化財センター

所 長 増田 宏

目 次

はじめに

I	組織・施設	1
1.	香川県埋蔵文化財センターの組織	1
2.	施設の概要	2
3.	決算の状況	3
II	事業概要	4
1.	埋蔵文化財調査事業	4
	内間遺跡	6
	旧練兵場遺跡	10
	六条下所遺跡	11
	太田原高州遺跡	13
	中又北遺跡	16
	岸の上遺跡	20
	蒲生遺跡	24
2.	普及・啓発事業	28
(1)	展示	28
(2)	現地説明会・地元説明会	29
(3)	講師の派遣	29
(4)	夏休みこどもミュージアム	30
(5)	発掘体験講座	30
(6)	考古学講座	30
(7)	文化ボランティア活動	30
(8)	新聞記事掲載	30
(9)	資料の貸出・利用	31
(10)	職場体験学習・インターンシップ	31
(11)	刊行物	31
(12)	ホームページ	31
3.	讃岐国府跡探索事業	32
III	讃岐国府跡第33次調査成果の概要	34
IV	調査研究 四国における前半期古墳出土埴輪の基礎的研究 －香川県今岡古墳出土埴輪を中心として－	42

挿 図 目 次

第 1 図 発掘調査遺跡位置図…………… 5	第 20 図 33-1 区遺構平面図 …………… 39
内間遺跡	第 21 図 33-2 区遺構平面図 …………… 40
第 2 図 遺跡位置図 (1/25,000) …… 6	四国における前半期古墳出土埴輪の
第 3 図 遺構平面図…………… 9	基礎的研究
旧練兵場遺跡	第 22 図 古墳分布図…………… 42
第 4 図 遺跡位置図 (1/25,000) …… 10	第 23 図 今岡古墳出土土器・円筒埴輪 1
六条下所遺跡	…………… 43
第 5 図 遺跡位置図 (1/25,000) …… 11	第 24 図 今岡古墳出土円筒埴輪 2 …… 44
第 6 図 遺構平面図 (1/4,000) …… 12	第 25 図 今岡古墳出土円筒埴輪 3 …… 45
太田原高州遺跡	第 26 図 今岡古墳出土円筒埴輪 4 …… 46
第 7 図 遺跡位置図 (1/25,000) …… 13	第 27 図 今岡古墳出土円筒埴輪 5 …… 47
第 8 図 遺構平面図 (1/100) …………… 15	第 28 図 今岡古墳出土円筒埴輪 6 …… 48
中又北遺跡	第 29 図 今岡古墳出土円筒埴輪 7 …… 49
第 9 図 遺跡位置図 (1/25,000) …… 16	第 30 図 今岡古墳出土円筒埴輪 8 …… 50
第 10 図 遺構平面図…………… 19	第 31 図 今岡古墳出土朝顔形埴輪 …… 51
岸の上遺跡	第 32 図 今岡古墳出土盾形埴輪 1 …… 52
第 11 図 遺跡位置図 (1/25,000) …… 20	第 33 図 今岡古墳出土盾形埴輪 2 …… 53
第 12 図 第 1 面 遺構平面図…………… 22	第 34 図 今岡古墳出土蓋形埴輪 1 …… 54
第 13 図 第 2 面 遺構平面図…………… 22	第 35 図 今岡古墳出土蓋形埴輪 2 …… 55
第 14 図 第 3 面 遺構平面図…………… 23	第 36 図 今岡古墳出土蓋形埴輪 3 ・
蒲生遺跡	甲冑形埴輪…………… 56
第 15 図 遺跡位置図 (1/25,000) …… 24	第 37 図 今岡古墳出土家形埴輪 1 …… 57
第 16 図 遺構平面図 (1/400) …………… 27	第 38 図 今岡古墳出土家形埴輪 2 ・
讃岐国府跡第 33 次調査成果の概要	半裁器台形埴輪・鳥形埴輪・
第 17 図 讃岐国府跡における既往の	不明形象埴輪…………… 58
調査地と地形…………… 36	第 39 図 出土地不明の
第 18 図 遺構配置	円筒埴輪・朝顔形埴輪 …… 59
(飛鳥時代末葉～奈良時代初頭) …… 37	
第 19 図 遺構配置	
(奈良時代～平安時代) …………… 38	

※遺跡位置図は国土地理院地形図 (1/25,000) に遺跡位置を追記して掲載した

写真目次

内間遺跡

- 写真1 6区土坑出土弥生土器…… 7
- 写真2 SD096と掘立柱建物 …… 7
- 写真3 SD096 しがらみ …… 7
- 写真4 出水 (SD084) …… 7
- 写真5 池状遺構 …… 8

旧練兵場遺跡

- 写真6 7区流路① (西から) …… 10
- 写真7 7区流路② (西から) …… 10

六条下所遺跡

- 写真8 1区江戸時代の掘立柱建物跡
(東から) …… 11
- 写真9 3区全景 (南から) …… 11

太田原高州遺跡

- 写真10 SK801全景 (南より) …… 13
- 写真11 楕円形のまとまり検出状況
(北より) …… 14
- 写真12 楕円形のまとまり拡大 (北より)
…………… 14
- 写真13 楕円形のまとまり重複状況
(北西より) …… 15
- 写真14 炭化米拡大 (南西より) …… 15

中又北遺跡

- 写真15 調査区全景と灌漑水路 …… 16

写真16 SD1002上層

- 弥生土器出土状況 …… 17

写真17 SD1002断面 …… 17

写真18 SB1002 …… 17

写真19 SB1001 …… 18

写真20 SB1001柱穴黒色土器出土状況 …………… 18

岸の上遺跡

写真21 5区第1面 …… 20

写真22 6区 古代大溝 (SD4028) 断面 …… 21

写真23 6区 古代大溝 (SD4028) 出土木製品 …… 21

写真24 5区2面 水田畦畔 …… 21

写真25 6区3面掘立柱建物 …… 21

蒲生遺跡

写真26 第1面北端鹹水槽群 …… 24

写真27 鹹水槽 SX1010完掘 …… 24

写真28 I区第2面全景 …… 25

讃岐国府跡

写真29 大型建物1～3 西から …… 41

表 目 次

I 組織・施設

1. 香川県埋蔵文化財センターの組織

第1表 職員一覧…………… 1・2

3. 決算の状況

第2表 発掘調査決算…………… 3

第3表 整理・報告決算…………… 3

第4表 管理運営費等決算…………… 3

II 事業概要

1. 埋蔵文化財調査事業

第5表 発掘調査遺跡一覧…………… 4

第6表 遺跡の概要一覧…………… 4

第7表 整理・報告遺跡一覧…………… 5

第8表 刊行報告書一覧…………… 5

2. 普及・啓発事業

(1) 展示

第9表 展示一覧…………… 28

第10表 入館者数一覧…………… 28

第11表 センター外展示一覧
…………… 28・29

第12表 現地説明会・地元説明会一覧
…………… 29

(3) 講師の派遣

第13表 体験講座への講師派遣一覧
…………… 29

第14表 学校への講師派遣一覧 …… 29

第15表 講演等への講師派遣一覧

…………… 29・30

(4) 夏休みこどもミュージアム

第16表 夏休みこどもミュージアム
実施事業一覧…………… 30

(5) 考古学講座

第17表 考古学講座一覧…………… 30

(8) 資料の貸出・利用

第18表 資料貸出・利用一覧 …… 31

(9) 職場体験学習・インターンシップ

第19表 職場体験学習・インターン
シップ一覧…………… 31

IV 調査研究

第20表 土器・壺形埴輪観察表… 68

第21表 円筒埴輪観察表1…………… 68

第22表 円筒埴輪観察表2…………… 69

第23表 円筒埴輪観察表3…………… 70

第24表 円筒埴輪観察表4…………… 71

第25表 円筒埴輪観察表5・朝顔形
埴輪観察表1…………… 72

第26表 円筒埴輪観察表6・朝顔形
埴輪観察表2…………… 73

第27表 形象埴輪観察表1…………… 73

第28表 形象埴輪観察表2…………… 74

第29表 形象埴輪観察表3…………… 75

(注)

1 本書で用いる座標系は世界測地系（国土座標第Ⅳ系）である。

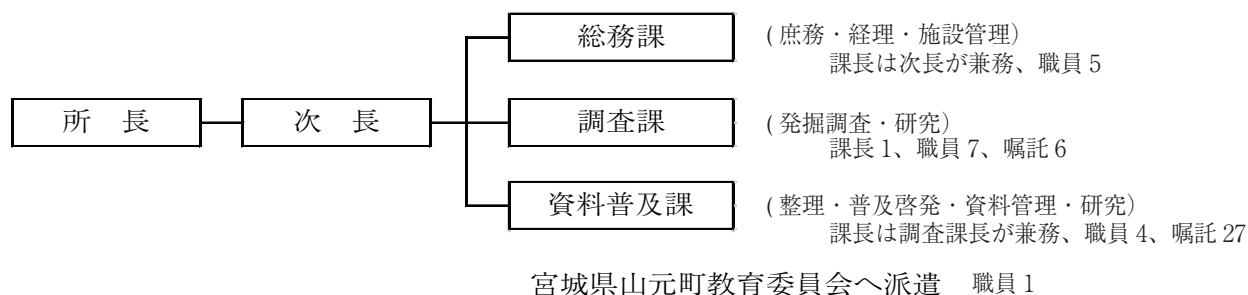
2 遺構は次の略号により表示した。

SH	竪穴建物	SB	掘立柱建物	SP	柱穴・小穴	SK	土坑	SD	溝
SR	自然河川	SX	性格不明遺構						

I 組織・施設

1. 香川県埋蔵文化財センターの組織

(1) 組 織



(2) 職 員

所 属	職 名	氏 名
所 長		真 鍋 昌 宏
次 長		前 田 和 也
総 務 課	課 長 (兼 務)	前 田 和 也
	主 任	寺 岡 仁 美
	主 任	高 木 秀 哉
	主 任	中 川 美 江
	主 任	丸 尾 麻 知 子
	主 任	岩 崎 昌 平
調 査 課	課 長	森 格 也
	主任文化財専門員	森 下 英 治
	主任文化財専門員	佐 藤 竜 馬
	主任文化財専門員	信 里 芳 紀
	主任文化財専門員	松 本 和 彦
	技 師	真 鍋 貴 匡
	技 師	竹 内 裕 貴
	主 任	西 谷 敬 司
	嘱 託	藤 井 菜 穂 子
	嘱 託	今 井 由 佳
	嘱 託	井 上 加 奈 子
	嘱 託	名 倉 美 保
	嘱 託	徳 永 貴 美
	嘱 託	脇 恵

資 料 普 及 課	課 長（兼 務）	森 格 也
	主任文化財専門員	西 村 尋 文
	主任文化財専門員	蔵 本 晋 司
	文 化 財 専 門 員	森 下 友 子
	文 化 財 専 門 員	小 野 秀 幸
	嘱 託	中 野 優 美
	嘱 託	佐 々 木 博 子
	嘱 託	加 藤 恵 子
	嘱 託	香 西 栄 理
	嘱 託	西 山 佳 代 子
	嘱 託	市 川 孝 子
	嘱 託	山 地 眞 理 子
	嘱 託	猪 木 原 美 恵 子
	嘱 託	葛 西 薫
	嘱 託	高 橋 千 恵
	嘱 託	甲 斐 美 智 子
	嘱 託	牧 野 香 織
	嘱 託	土 居 乃 里 子
	嘱 託	森 后 代
	嘱 託	大 林 眞 沙 代
	嘱 託	原 節 子
	嘱 託	合 田 和 子
	嘱 託	西 本 智 子
	嘱 託	竹 村 恵 子
	嘱 託	田 中 沙 千 子
	嘱 託	川 井 佐 織
	嘱 託	森 國 愛 子
	嘱 託	正 本 由 希 子
	嘱 託	岡 本 光 代
	嘱 託	青 屋 眞 理
	嘱 託	伊 藤 眞 紀
	嘱 託	竹 内 悦 子
宮城県山元町教育委員会派遣	主任文化財専門員	木 下 晴 一

第 1 表 職員一覧

2. 施設の概要

- (1) 所 在 地 香川県坂出市府中町字南谷 5001-4
- (2) 敷地面積 11,049.23㎡

(3) 建物構造・延床面積

①本館	鉄筋コンクリート造・2階建 (一部鉄骨造・平屋建)	1,362.23㎡
②分館	鉄骨造・2階建	337.35㎡
③第1収蔵庫	鉄骨造・2階建	1,525.32㎡
④第2収蔵庫	鉄骨造・3階建	2,040.33㎡
⑤車庫	鉄骨造・平屋建	29.97㎡
⑥自転車置場	鉄骨造・平屋建	25.00㎡

3. 決算の状況

(単位：千円)

原因者	遺跡名	決算
国土交通省	内間遺跡	70,645
道路課	太田原高州遺跡	1,079
	六条下所遺跡	22,124
	中又北遺跡	9,700
	岸の上遺跡	20,851
高校教育課	蒲生遺跡	26,367

なお、四国こどもとおとなの医療センターを原因者とする旧練兵場遺跡の発掘調査経費は、整理費に含まれている。

第2表 発掘調査決算

(単位：千円)

原因者	遺跡名	決算
国土交通省	誉水中筋遺跡	9,349
	田中遺跡	5,801
	仲戸遺跡・仲戸東遺跡	2,186
四国こどもとおとなの医療センター	旧練兵場遺跡	27,703
土木監理課	多肥松林遺跡	8,337
道路課	太田原高州遺跡	6,268
	須田・中尾瀬遺跡	5,458
	住屋遺跡	5,762
	旧練兵場遺跡	1,655
	北岸南遺跡	5,723
	十川東・平田遺跡	696
	東坂元北岡遺跡・飯山北土居遺跡	543
水道局	丸山窯跡	4,869
保健体育課	平池南遺跡	18,386

第3表 整理・報告決算

(単位：千円)

事 業 名		決 算
管理運営費等	管 理 運 営 費	4,538
	職 員 給 与 費	146,468
	讃岐国府跡探索事業	10,223
合 計		161,229

第4表 管理運営費等決算

Ⅱ 事業概要

1. 埋蔵文化財調査事業

調査課は、2 班体制で国道バイパス建設、病院施設改修、県道整備、県所管国道整備、県立高校整備に伴う 7 遺跡の発掘調査を行うとともに、讃岐国府跡探索事業に係る発掘調査を 1 班が担当した。資料普及課は、4 班体制で国道バイパス建設、病院統合、県土木事務所建設、県道整備、県所管国道整備、水道局投棄場整備、陸上競技場整備に伴う 16 遺跡の整理及び 8 冊の報告書の刊行を行った。

原因者	事業名	遺跡名	所在地	調査面積 (㎡)	調査期間
国土交通省	国道 11 号大内白鳥バイパス建設	内間遺跡	東かがわ市町田	5,173	7 月～1 月
四国こどもとおとなの医療センター	病院施設改修	旧練兵場遺跡	善通寺市仙遊町	52	8 月
道路課	太田上町志度線	六条下所遺跡	高松市六条町	1,934	11 月～3 月
		太田原高州遺跡	高松市太田上町	113	6 月
	多度津丸亀線	中又北遺跡	仲多度郡多度津町	757	2 月～3 月
	国道 438 号	岸の上遺跡	丸亀市飯山町	1,629	4 月～6 月
高校教育課	小豆地区県立学校再編整備	蒲生遺跡	小豆郡小豆島町	794	4 月～7 月
合 計				10,452	

第 5 表 発掘調査遺跡一覧

遺跡名	遺跡の概要	主な遺構・遺物
内間遺跡	弥生時代～中世の集落跡	弥生時代の溝状遺構 古代の掘立柱建物跡、溝状遺構 中世の溝状遺構、出水、井戸 弥生土器、須恵器、土師器、曲物
旧練兵場遺跡	弥生時代～古代の集落跡 弥生時代と古代の河川跡	弥生時代と古代の河川跡 弥生土器、須恵器、土師器
六条下所遺跡	縄文時代～近世の灌漑水路群 近世の集落跡	縄文時代の溝状遺構 古代の溝状遺構 近世の掘立柱建物跡 縄文土器、弥生土器、土師器、石器
太田原高州遺跡	弥生時代～古墳時代の集落跡	弥生時代の竪穴建物跡 弥生時代の土坑 古墳時代の竪穴建物跡 弥生土器、須恵器、土師器、炭化米
中又北遺跡	弥生時代～中世の集落跡	弥生時代の溝状遺構 古代の掘立柱建物跡 弥生土器、須恵器、土師器
岸の上遺跡	古墳時代の集落跡 古代の生産遺構	古墳時代の掘立柱建物跡 古代の水田跡、溝状遺構 須恵器、土師器、斎串
蒲生遺跡	近世の製塩跡 弥生時代～中世の集落跡	近世の鹹水槽 中世の掘立柱建物跡 弥生時代の土坑 弥生土器、須恵器、土師器、製塩土器、瓦器、陶磁器、土錘、鉄釘

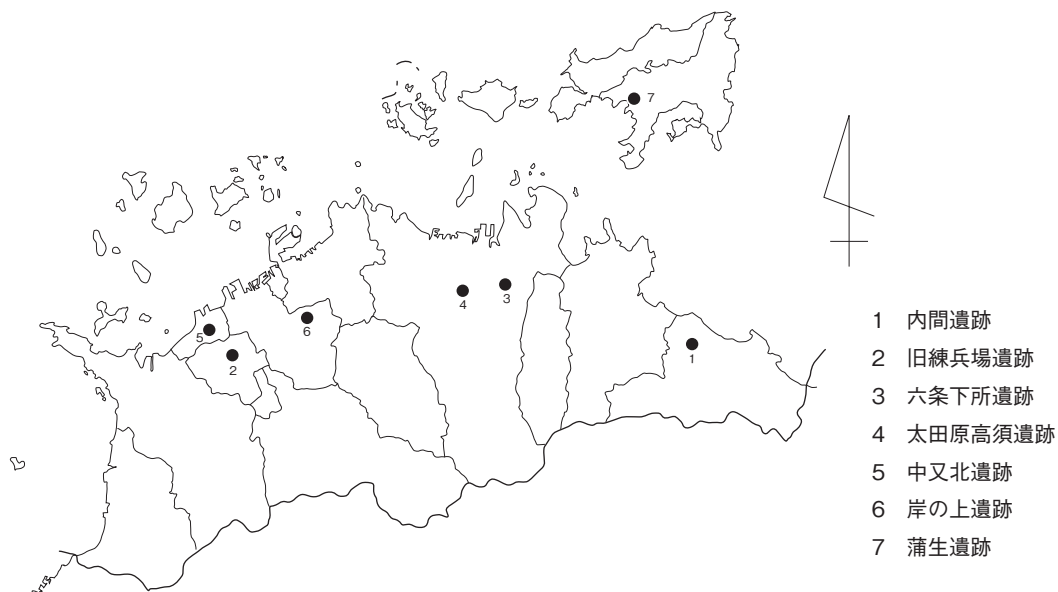
第 6 表 遺跡の概要一覧

原因者	遺跡名	所在地	整理期間
国土交通省	菅水中筋遺跡	東かがわ市中筋	7月～10月
	田中遺跡	東かがわ市白鳥	11月～1月
	仲戸遺跡・仲戸東遺跡	東かがわ市川東	平成26年度
四国こどもとおとなの医療センター	旧練兵場遺跡	善通寺市仙遊町	4月～8月
土木監理課	多肥松林遺跡	高松市多肥上町	4月～8月
道路課	太田原高州遺跡	高松市太田上町	10月～12月
	須田・中尾瀬遺跡	三豊市詫間町	2月～3月
	住屋遺跡	東かがわ市川東	1月～3月
	旧練兵場遺跡	善通寺市仙遊町	9月
	北岸南遺跡	丸亀市飯山町	4月～6月
	十川東・平田遺跡	高松市十川東町	平成26年度
	東坂元北岡遺跡	丸亀市飯山町	平成26年度
	飯山北土居遺跡	丸亀市飯山町	平成26年度
水道局	丸山窯跡	綾歌郡綾川町	9月～10月
保健体育課	平池南遺跡	丸亀市金倉町	9月～3月

第7表 整理・報告遺跡一覧

書 名
国道11号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 仲戸遺跡・仲戸東遺跡
独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 旧練兵場遺跡Ⅵ
独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第7冊 旧練兵場遺跡Ⅶ
高松土木事務所新設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 多肥松林遺跡
県道善通寺詫間線道路改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 旧練兵場遺跡
県道高松長尾大内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 十川東・平田遺跡
国道438号改築事業（飯山工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 東坂元北岡遺跡・飯山北土居遺跡
水道局第3投棄場整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 丸山窯跡
讃岐国府跡1

第8表 刊行報告書一覧



第1図 発掘調査遺跡位置図

うちまいせき 内間遺跡

内間遺跡は、国道 11 号大内白鳥バイパスの建設に伴い、平成 27 年 7 月～平成 28 年 1 月にかけて調査を行った東かがわ市町田に所在する遺跡である。平成 26 年度の調査区の西側の部分の 5,173㎡を対象とし、3 区から 11 区まで調査区を設定し調査を行った。

遺跡は、大内平野の南西部に位置し、那智山から北へ延びる丘陵の縁辺部に立地する。内間遺跡の周辺には、道路状遺構や多数の建物が検出された坪井遺跡、8 世紀の掘立柱建物や刻書土師器が出土した王子の谷遺跡がある。



第 2 図 遺跡位置図 (1/25,000)

(国土地理院 1/25,000 地形図「三本松」の一部を加工して利用)

遺構面は、近代以降の耕作地としての利用によって、削平を受けている部分が多く、複数の遺構面を確認できる部分もあったが、おおむね遺構面は 1 面である。弥生時代～近世までの遺構を検出し、それらの遺構面の下層からは縄文時代晩期の遺物が出土した地点もある。

耕作土の下は、近世の遺物を含む包含層が確認できる。さらに下層には、南側の丘陵に由来する粗砂を含む堆積層が確認でき、3・4 区など丘陵の中の谷筋に位置している地点では、中世以降の遺構が形成される面と、さらに下位に弥生時代後期～古代にかけての遺構面が確認できる。

調査の成果として、遺跡周辺の土地利用の形態と、それに伴う開発行為の変遷が、一つの遺跡内で確認できたことがあげられる。

縄文時代

発掘調査で確認できた最古の段階では、遺跡周辺は現在よりさらに起伏の大きな地点であった。3 区では、遺構面の形成土のうち、丘陵由来の粗砂を多く含む層が谷状地形に合わせて落ち込んでおり、それらを部分的に掘削すると、自然木や縄文時代晩期の土器が見つかった。ただし遺物量は僅少であり、現在よりも起伏の大きいこの地の利用は想定しがたい。

弥生時代

弥生時代については、丘陵の縁辺部に遺構がみられ、そのほかの地点では散見される程度である。6 区で確認されている土坑は、長軸約 1 m 程であるが、完形の土器を多く含む。6 区では、後世の遺構の埋土中にも弥生土器がみられる。6 区は、10 区で確認できる流路の延長があり、そこか

ら多量に弥生土器が出土していることから、流路からの混入遺物は多いと考えられる。また、9区では2基の土器棺が検出され、丘陵の縁辺部を利用した墓域の形成がなされていたものと考えられるが、その規模や範囲は不明である。



写真1 6区土坑出土弥生土器



写真2 SD096 と掘立柱建物

古代

弥生時代の後、次に遺構が認められるのは、飛鳥時代（7世紀末）である。この時期の遺構としては、平成26年度調査区も合わせ、総延長220mを測る灌漑用水路と、それに近接する掘立柱建物が4棟ある。灌漑用水路については、最大幅7.5m、深さ2mを測り、堆積状況から、埋土は機能時と水路廃絶後の段階に分別できる。水路の中でも、旧地形の傾斜が急な地点については、平面形態が蛇行する傾向がある。このほか、埋土の最下層である砂質土の堆積が厚いことから、この地点では、水路の流速がほかの地点に比べ速く、蛇行する平面形態は、それらを緩和するために採られた可能性が想定される。また、6区では、溝の底面でしがらみ状に自然木を組み合わせしており、流速や水量調整の機能を想定したい。



写真3 SD096 しがらみ



写真4 出水 (SD084)

掘立柱建物については、4区で3棟、10区で1棟が検出された。建物の規模はすべて2×3間で、そのうち4区の3棟が束柱の痕跡を残す。4区の建物は、柱穴の重複は確認できず、遺物は確認できるが明確に時期差を示すものではない。しかし、それぞれがかなり近接することや、方位にずれが生じることから、水路に最も近く、柱穴に隅丸方形の掘方を持つS B 4001を最古とし、南

側へと建物が建て替えられていったものと考えられる。

中世

古代ほどの大規模な開発の痕跡は確認できないが、12～13 世紀前半、14～15 世紀の遺構が検出された。

3・4 区では、12～13 世紀の灌漑用水路と、それに近接する鋤溝群が確認された。灌漑水路には、平成 26 年度に検出されていた



写真 5 池状遺構

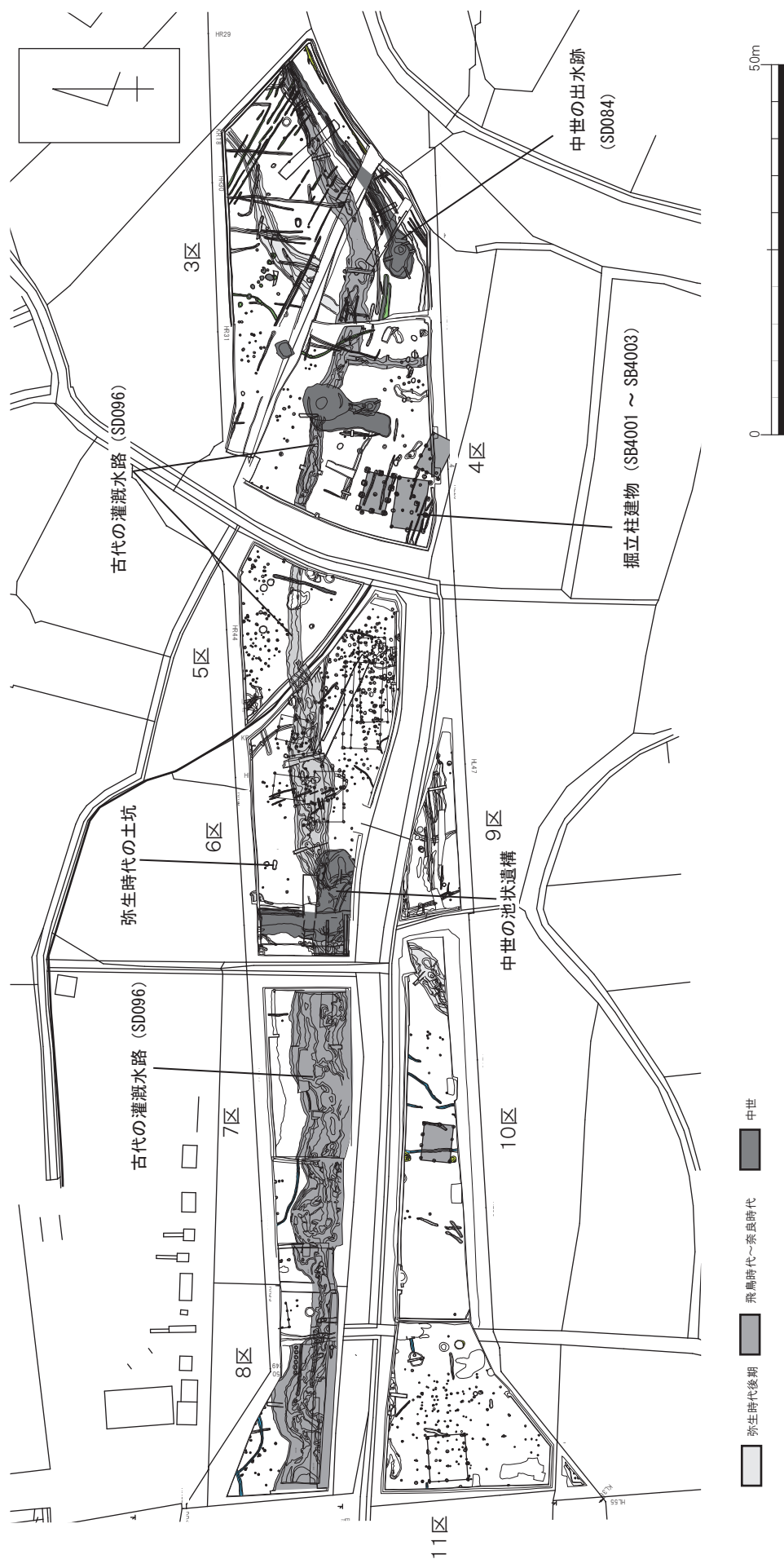
SD096 と接続し、調査地の南側の丘陵部の形状に合わせる形で掘られている。遺跡の北を流れる番屋川に水源を求めるものでなく、地下からの湧水を直接溝に流す出水である。水源部分は、なだらかな傾斜で掘られた土坑状のもので、湧水点には曲げ物が据え置かれて、その周辺には、部分的に加工を施した丸太を組み、土砂の流入による湧水点の埋没を防いでいる。かつての谷跡という湧水を獲得しやすい環境を利用している点や、水路掘削を最小限にとどめる水路の平面形態からは、古代にみられるような、地形をある程度度外視した水路の開削よりも、地形に合わせた小規模な開発の様相が想定できる。周辺に井戸や遺物を一定量含む土坑も確認されていることから、周辺に居住域が形成されていたことが想定される。

6 区西端には、14～15 世紀の池状遺構が確認される。遺構は緩やかな円形を描き、杭と横木を組み合わせたものや、石組みによって作られた護岸を確認することができる。遺構の掘り込みが透水層まで至っていないことから、先述の出水とは異なり、水をためておく池状の遺構としての機能を想定したい。

近世

近世については、主に調査範囲の西側、丘陵の縁辺部において多く遺構が検出された。特に 6 区、11 区などにおいては、5 棟の建物が復元され、伴出遺物の年代観から、17 世紀が主となると考えられる。また、18 世紀の石組み井戸が 10 区において確認されている。

なお、調査中盤の平成 27 年 10 月 3 日には、現地説明会を開催した。



第3図 遺構平面図

きゅうれんぺいじょういせき
旧練兵場遺跡

善通寺市仙遊町に所在する集落遺跡で、既往の調査で縄文時代晩期から中世までの遺構・遺物が確認されているが、中心となるのは弥生時代中期から古墳時代後期にかけての時期である。

今年度の調査は、四国こどもとおとなの医療センターの小規模な病院施設の改修に伴い建物の基礎により遺跡が影響を受ける部分である。調査地は旧練兵場遺跡内の病院の敷地の東端の中央からやや北寄りの部分で、平成 25 年度に病院建設に伴う東西道路設置等の附帯工事に伴い発掘調査を実施した箇所との 6 m ほど北側に隣接した箇所である。

発掘調査の結果、平成 25 年度の隣接する調査区の流路跡の続きを検出した。流路は下部のものが埋没した後に上部の流路が形成されている。流路①としたものは下部の流路で、平成 25 年度の調査で幅約 15 m、深さ 0.6 m の規模で、今回はその東側の一部を検出した。断面形は皿状で埋土は 3 層に大別され、上層は砂層、中層と下層は黒褐色系の粘質土となっている。弥生時代中期後半から終末期にかけての土器が出土した。流路②は平成 25 年度調査の幅約 7 m、深さ 0.2 m の規模とはほぼ同様の規模を検出した。断面形は浅い皿状で、埋土は上下 2 層に大別され、暗褐色と灰白色の混在した粘質土であるが下層ほど粘性が強い。8 世紀から 12 世紀までの土器が出土している。須恵器が主体となっているが、緑釉陶器や黒色土器も含まれている。

今回の調査地は竪穴建物をはじめ遺構が密集する微高地群の北東側の低地部分であり、検出した流路や出土遺物、旧地形について既往の調査の成果を追認するものとなった。



第 4 図 遺跡位置図 (1/25,000)

(国土地理院 1/25,000 地形図「善通寺」の一部を加工して利用)



写真 6 7 区流路① (西から)



写真 7 7 区流路② (西から)

ろくじょうげしよいせき
六条下所遺跡

六条下所遺跡は高松市六条町に所在する。県道太田上町志度線整備に伴い、平成 27 年 11 月から平成 28 年 3 月まで発掘調査を行った。西から 1～3 区と 3 調査区に分けて調査を行った。1 区の市道を挟んで西側は空港跡地整備事業に伴って発掘調査を行った空港跡地遺跡である。

最も西側に位置する 1 区では 2 面の遺構面を確認した。第 1 面では掘立柱建物跡 2 棟、柱穴跡 60 個、溝状遺構 9 条、土坑 6 基が検出された。いずれの遺構も遺物がほとんど出土しなかったため、詳細な時期は不明であるが、埋土が白色シルトであることから江戸時代の屋敷地と考えられる。

屋敷地は、約 25 m 四方の広さを有し、東西棟の掘立柱建物 2 棟が配される。うち、掘立柱建物 1 は、梁間 2 間、桁行 6 間、床面積約 50.6㎡の大型建物で、建物東面と、南北面の一部に柵列を伴う。建物規模より、有力農民層の屋敷地と考えられる。

第 2 面では、自然流路 1 条と溝 3 条が検出された。自然流路は南西から北西に向かって蛇行して走る。空港跡地遺跡 I 区で検出された SRi02 に連続する自然流路であると考えられる。遺物は風化したサヌカイトが出土しただけで、詳細な時期は不明であるが、縄文時代のものと考えられる。

最も東に位置する 3 区では古代末から近世の溝 7 条が検出された。うち 3 条は周辺に残る条里地割に並行する。

11 月 28 日には発掘体験講座を行い、11 名の小・中学生が参加した。



第 5 図 遺跡位置図 (1/25,000)

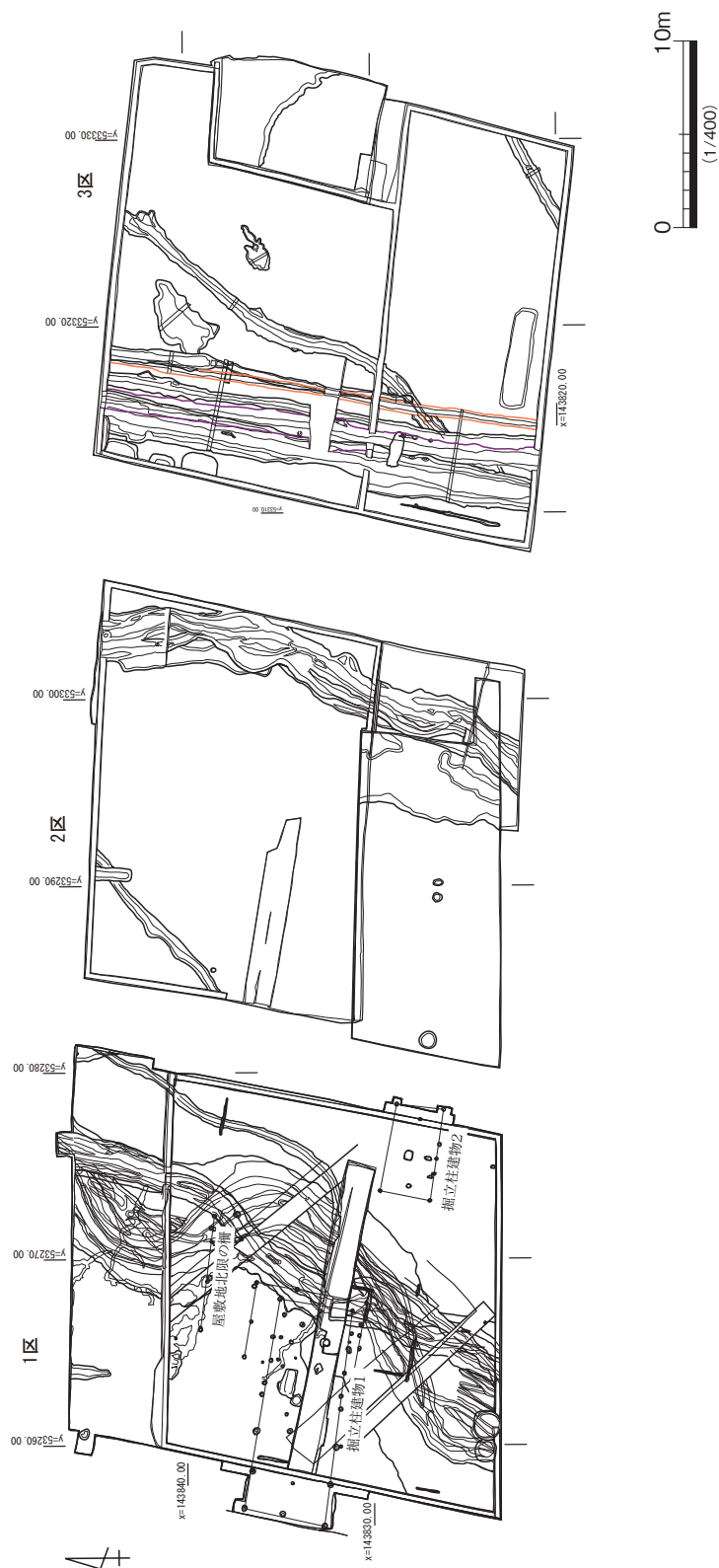
(国土地理院 1/25,000 地形図「高松南部」の一部を加工して利用)



写真 8 1 区江戸時代の掘立柱建物跡 (東から)



写真 9 3 区全景 (南から)



第6図 遺構平面図

おおたはらたかすいせき
太田原高州遺跡

県道太田上町志度線道路改築工事に伴う発掘調査は、平成 22・23・25・26 年度に実施し、その一部は発掘調査報告書の刊行を終えている。今年度は本工事に伴う太田原高州遺跡の最後の発掘調査を実施した。調査地点は路線内の官民境界際のわずかな未調査箇所となり、調査面積は 113㎡に留まる。調査期間は平成 27 年 6 月 2～15 日、実働 9 日間で実施した。

調査の結果、弥生時代後期末～終末期の堅穴建物 1 (SH903)、古墳時代末期の堅穴建物 1 (SH902)、弥生時代後期末～終末期の大型土坑 1 (SK801)、ピット十数基等を確認した。

SH903 はベッド状遺構を備え、径 8 m 前後の円形の平面プランに復元可能である。床面には炭化物を多量に包含する浅い土坑を認める。SH902 は断面で壁溝を確認し、南接する調査区に認める不整形な落ちを考慮すると、東西幅 6 m の方形の平面プランに復元できる。

SK801 は最下層に炭化米を多量に包含する土坑である。平成 26 年度調査時に南半部の調査を実施し、今年度は残存する北半部の調査を行った。平面形は隅丸方形を呈し、東西幅 2.2 m を測る。北辺部と東辺分は後世の開発に伴って消失していたが、南北長は 2.6 m 前後に復元できる（写真 10）。断面形状は底面に起伏を認めるがおおむね逆台形を呈し、深度は 0.5 m 前後を測る。埋土最下層は炭化米集中層、下層は炭化米・焼土・わずかな炭化材の混在層（3 cm 前後の層厚）、中層は灰黄褐色粘質シルト（炭化米・炭化材を少量包含）、上層は拳大からその 2 倍程度の礫と土器の充填層となり、上層下面の中央部は下位に沈み込む。帰属時期は、上層が弥生時代終末期、中層が弥生時代後期末の埋没で、最下層・下層は後期末の可能性が高い。

写真 10 は最下層の炭化米検出状況である。一見、炭化米が充填された層位に見えるが、その広がりをも面的に細かく検出すると、わずかに起伏を認め、かつ 30 × 40cm 程度の楕円形のまとまりが複数重複した状態であることが判明した（写真 11・12）。まとまりの周囲には単体の炭化米が散乱



第 7 図 遺跡位置図 (1/25,000)

(国土地理院 1/25,000 地形図「高松南部」の一部を加工して利用)



写真 10 SK801 全景（南より）

したように分布する。大部分の炭化米には粃殻が付着しており、かつ楕円形のまとまり内の個々の粃殻の並びが不揃いであるため、穎稲は想定できない。さらに、楕円形のまとまりの重複関係を断面で確認すると、灰褐色系シルトが介在しており（写真 13）、元来楕円形のまとまりは立体的な形状を呈していたと想定できる。こうした状況から、楕円形のまとまりは脱穀前の脱粒米を袋に入れた粃袋の痕跡の蓋然性が高いと判断した。なお、炭化米として遺存した状況から強い火力による燃焼ではなく、弱火で蒸し焼きされた状態が想定できるが、SK801 の底面や側面に被熱痕跡は認められず、焼けた粃袋が他所からもたらされたものと考えられる。

調査時の所見として、以下のような本遺構の埋没状況や性格を提示しておきたい。① SK801 の本来の機能は不明だが、最下層に炭化した脱穀前の脱粒米を入れた粃袋が複数個体「廃棄」される。②炭化材や焼土も共伴することから、高床倉庫等で保管していた粃袋が焼失し、壁や屋根材の崩落等の要因により蒸し焼き状態となり、③何らかの意図を持って、粃袋形状を保持した状態で焼失箇所から抽出し、土坑底面に「廃棄」されたと考えられる。④中層は粃袋「廃棄」直後に焼失した高床倉庫の部材等を「廃棄」した可能性が高い。⑤その後、弥生時代終末期に土坑上位に土器や礫が廃棄される。上層下面の窪みは粃袋や高床倉庫の部材の腐朽による間隙が沈み込むことで生じたものと考えられる。⑥路線内では焼失した掘立柱建物は確認できないが、近接した箇所に所在する可能性が高い（SH903 の帰属時期は SK801 とほぼ同時期）。

一方、こうした想定は他所で焼失した粃袋をその形状を保持した状態で「廃棄」する行為を前提としており、容易に是認できるものではないという指摘もある。ここでは、かっこ付きの廃棄という表記で本行為を表現したが（埋納に近い概念）、検出した楕円形のまとまりを最大限評価し、弥生人の米に対する観念が表出された炭化した粃殻等の「廃棄」土坑と考えたい。なお、本遺構出土の炭化米については、樹種同定、C T スキャンによる科学的分析を実施し、同時に取り上げた炭化米塊の保存処理も行った。



写真 11 楕円形のまとまり検出状況（北より）



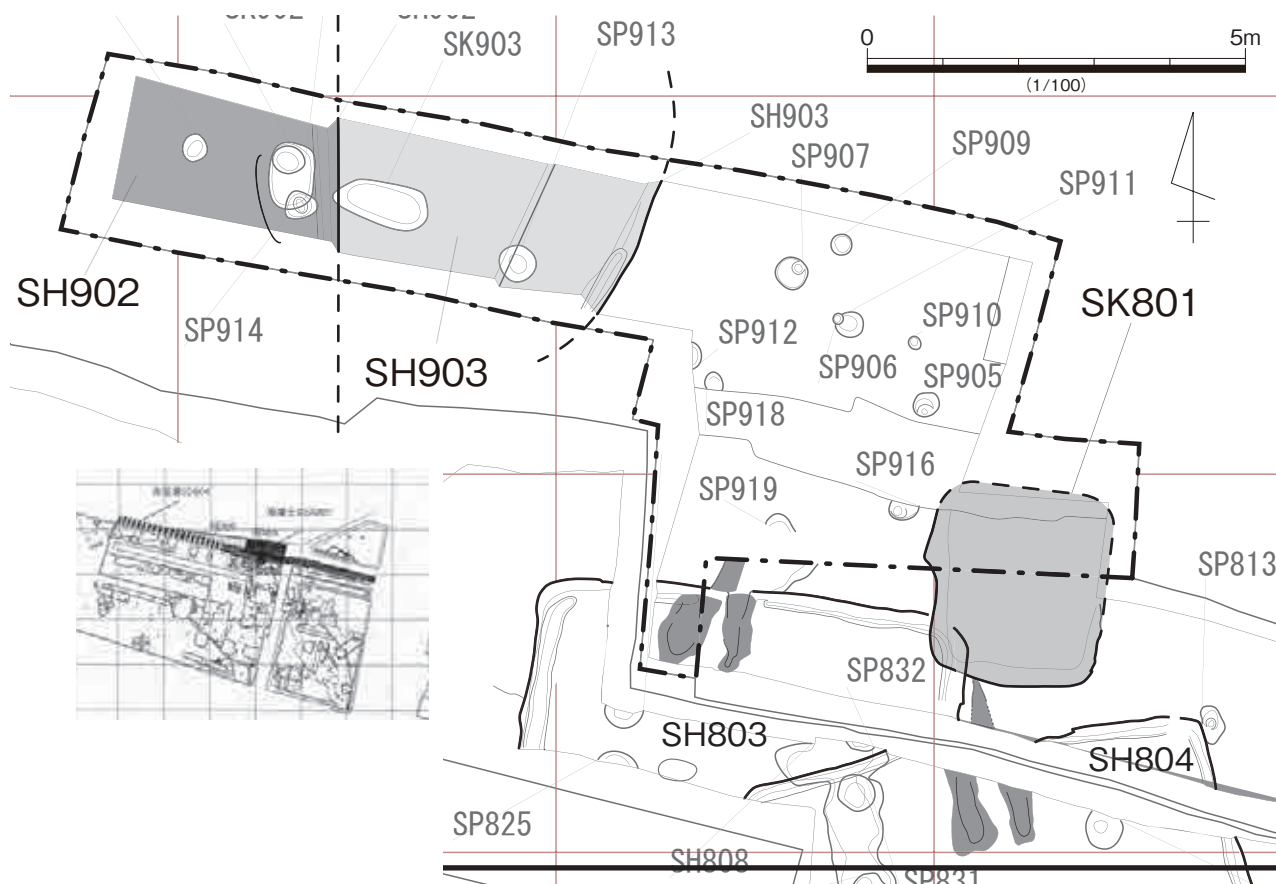
写真 12 楕円形のまとまり拡大（北より）



写真 13 楕円形のまとり重複状況（北西より）



写真 14 炭化米拡大（南西より）



第 8 図 遺構平面図（S = 1 / 100, 一点破線が今年度調査区）

なかまたきたいせき
中又北遺跡

中又北遺跡は、県道多度津丸亀線建設に伴い、平成 27 年度から調査を行っている多度津町道福寺中又に所在する遺跡である。遺跡の立地としては、丸亀平野の西端、金倉川が形成する扇状地の扇端付近に位置する。

中又北遺跡の周辺の遺跡として、西側には、弥生時代～近世までの集落遺跡である庄八尺遺跡が隣接しているほか、遺跡の東には、弥生時代中期の土器がみつかった中又遺跡がある。

平成 27 年度の調査区は、現在の町道を挟んで 1 - a、1 - b 区とし、調査を行った。

遺構面は現代の耕作土直下に、黄色シルト層が確認される。遺構面は 1 面しか認められず、それらを掘り込むように弥生時代～古代末の遺構が確認された。なお、弥生時代の遺構については断言できないが、少なくとも古代以降の遺構については、遺構の深度から考えても残存状況が悪く、当時の地表面は大きく削平を受けていると考えられる。

今回の調査では、弥生時代全般にわたって使用されていた大型灌漑水路とその周辺の遺構の検出、平安時代後期の建物を検出したことが成果としてあげられる。

以下、各時期の遺構について説明する。

弥生時代

弥生時代の遺構としては、溝 2 条、掘立柱建物 1 棟、土坑 1 基が検出されている。

溝については、基幹水路と考えられる SD1002 と、後出して開削されたと考えられる SD1001 がある。

SD1002 は、北東方向に向かい、緩やかに曲がりながら流れる平面形態をもつ。弥生時代前期から古墳時代前期までの遺物が出土し、その期間に機能していたと考えられる。弥生時代前期の段階で行われたと考えられる当初の開削の後、溝が埋没していく中で、小規模な溝も含め最低二回以上の再掘削が行われている。個別の溝の存続期間や並行の有無などは、今後検討すべきであるが、最終の埋没に伴うと考えられる黒色粘質土中からは、弥生時代後期後半～古墳時代前期を中心とした遺物が多くみられる。最終的にはす



第 9 図 遺跡位置図 (1/25,000)

(国土地理院 1/25,000 地形図「丸亀」の一部を加工して利用)



写真 15 調査区全景と灌漑水路

すべての溝の範囲は 10 m 程の幅となる。

SD1001 は、幅 3.2 m 程で SD1002 に比べ小規模であり、調査区を横断するようにほぼ直線的に伸びる溝である。出土遺物からは弥生時代後期後半以降に開削された可能性が考えられ、SD1002 の機能時に、新たに開削された溝であると考えられる。

なお、1b 区においては、2 条の延長が確認され、2 条の溝は合流するように近接する。

それ以外の遺構については、掘立柱建物 1 棟と、土坑が 1 基検出されているのみである。



写真 16 SD1002 上層 弥生土器出土状況



写真 17 SD1002 断面



写真 18 SB1002

古代末（平安時代後期）

古代末（平安時代後期）の遺構としては、1a 区において掘立柱建物が 1 棟検出された。SB1001 とした建物は、一部調査区北側に展開する可能性もあるが、現在確認されている範囲では、柱間 4 × 5 間で、側柱のほか、ほぼ同じ規模の床束の柱を持つ総柱建物である。東側に柱間が狭い柱穴列が存在し、廂の可能性が想定される。廂の部分を除いた床面積は 72m²を測り、県内の古代末の建物としても大きな部類に入る。

柱穴の深度は深いものでも 20cm ほどしかなく、上部は大半が後世の開発により削平されていたものと考えられる。柱穴出土遺物については、弥生時代の遺物の混入もあるが、建物を構成す

る柱穴から出土した黒色土器からは 11 世紀末から 12 世紀前半の年代が考えられるため、建物の時期もこの段階にあたるものと考えられる。

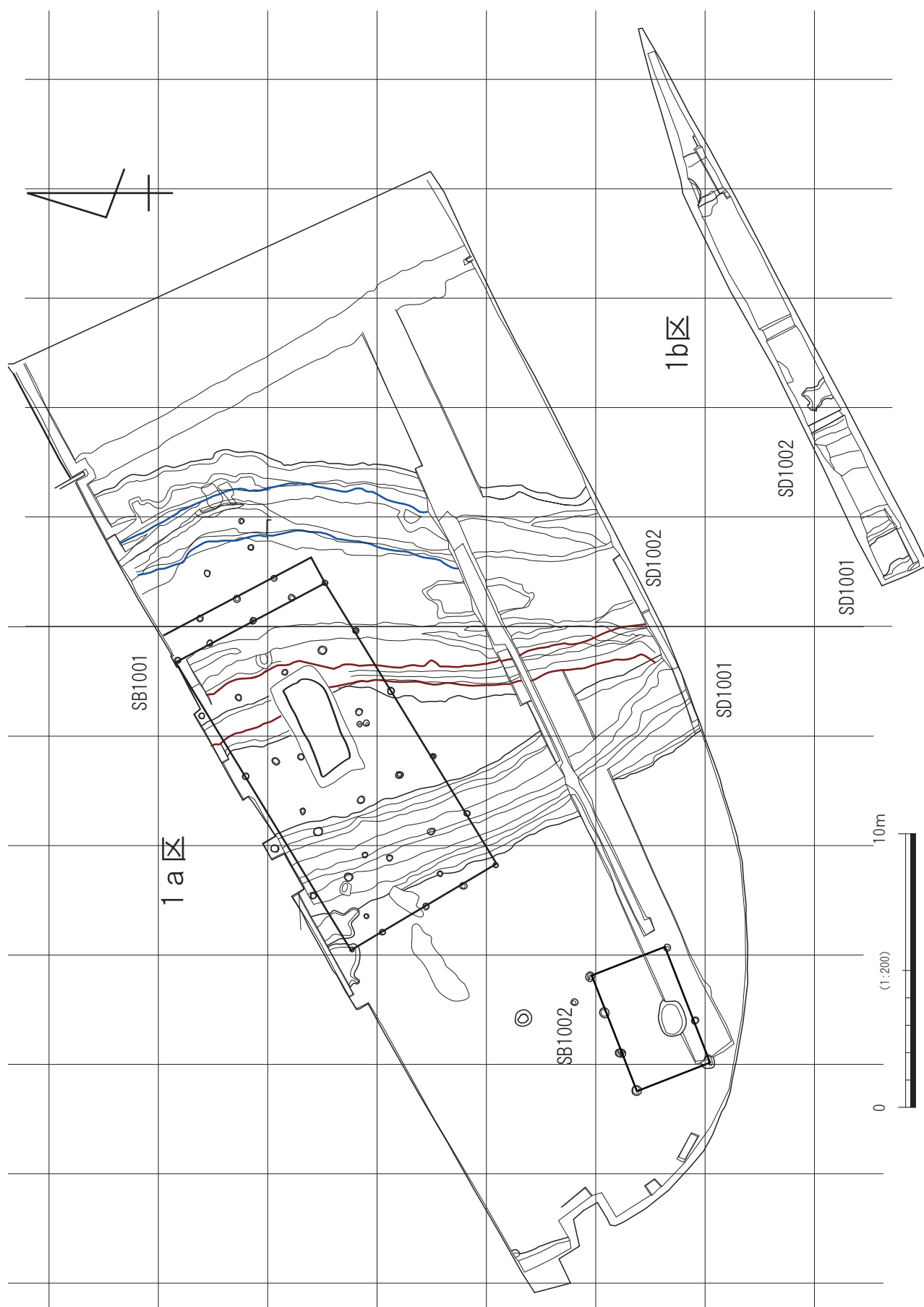
当該期には、中又北遺跡周辺では、多度庄・葛原庄などの荘園が盛んに作られる。中又北遺跡はそれらの範囲の中に含まれるものではないが、大型建物の存在は荘園が形成されるような、一定程度生産力のある地域の基盤を、この建物を含む集落が担っていた可能性は高いといえる。



写真 19 SB1001



写真 20 SB1001 柱穴黒色土器出土状況



第10図 遺構平面図

岸の上遺跡

岸の上遺跡は、丸亀市飯山町川原に所在し、平成 25 年度より国道 438 号の建設に伴う発掘調査が行われている遺跡である。

遺跡の周辺は、条里型地割の乱れからうかがえるように、旧河道が多く流れ、飯山高校北側を東西に走る市道周辺に形成されていた微高地を中心に集落域が展開していることが、これまでの調査でも明らかとなっている。

平成 27 年度は、平成 26 年度調査範囲より、さらに北側の区域の調査を行った。

調査区を 5, 6 区に分けて調査を行い、5 区は 3 面、6 区は 2 面の遺構面が確認できた。

主な調査成果として、中世以降の遺構の検出、飛鳥時代の水田域の検出、古墳時代後期の集落の延長の確認があげられる。以下、1～3 面とした遺構面ごとの成果について説明する。



第 11 図 遺跡位置図 (1/25,000)

(国土地理院 1/25,000 地形図「丸亀」の一部を加工して利用)

1 面 (古代～近世)

中・近世の遺構が中心であるが、部分的に 8 世紀以降の古代の遺跡も確認できる。

遺構は、旧河川の氾濫によって堆積した細砂と礫がまじる層をベースとして掘り込まれている。中世・近世の主要な遺構として、集石土坑と大溝が挙げられる。調査区の各所に、楕円形の集石土坑が多く検出された。深さはさまざまであるが、その埋土には礫を多く含むことが共通している。

出土遺物から、近世段階に周囲の耕作地化が進められる過程で、不要な礫などを投棄した土坑であったと考えられる。

中世の遺構は 5・6 区を南北に縦断する大溝 (SD5008) が挙げられる。溝の特徴としては、5 区においてのみであるが、底面が一定の間隔で高くなる形状をもつ。埋土の断面から、底面付近では流水痕跡が確認できるため、底面の構造は水路の管理を行うためのものであると考えられる。

古代の遺構は平成 26 年度調査で検出されていた大溝 (SD4028) の続きが検出された。掘方は 1 面を構成する礫層まで上がっており、断面形状は V 字状となる。埋土は大きく分けて 3 段階に分層できる。



写真 21 5 区第 1 面

上層では9世紀前半の須恵器杯を確認しており、最終埋没はその時期と考えることができる。中層段階では、溝内部に細い流路があり、木樋の据え付けられていた痕跡も確認された。下層からは、8世紀を中心とした須恵器のほか、斎串や曲物、菰槌などの木製品が多く出土した。



写真 22 6区 古代大溝（SD4028）断面



写真 23 6区 古代大溝（SD4028）出土木製品

2面（古墳時代終末期）

洪水堆積によって形成された面である。遺構の密度は希薄で、この面の存続期間もさほど長くないものと考えられる。また、6区ではこれに相当する遺構面は確認できないため、5区のみ2面の調査を行った。

遺構としては、水田の痕跡が確認できた。区画の形状は不定であるが、東西、南北方向に近い方向の畦畔が確認できた。



写真 24 5区2面 水田畦畔

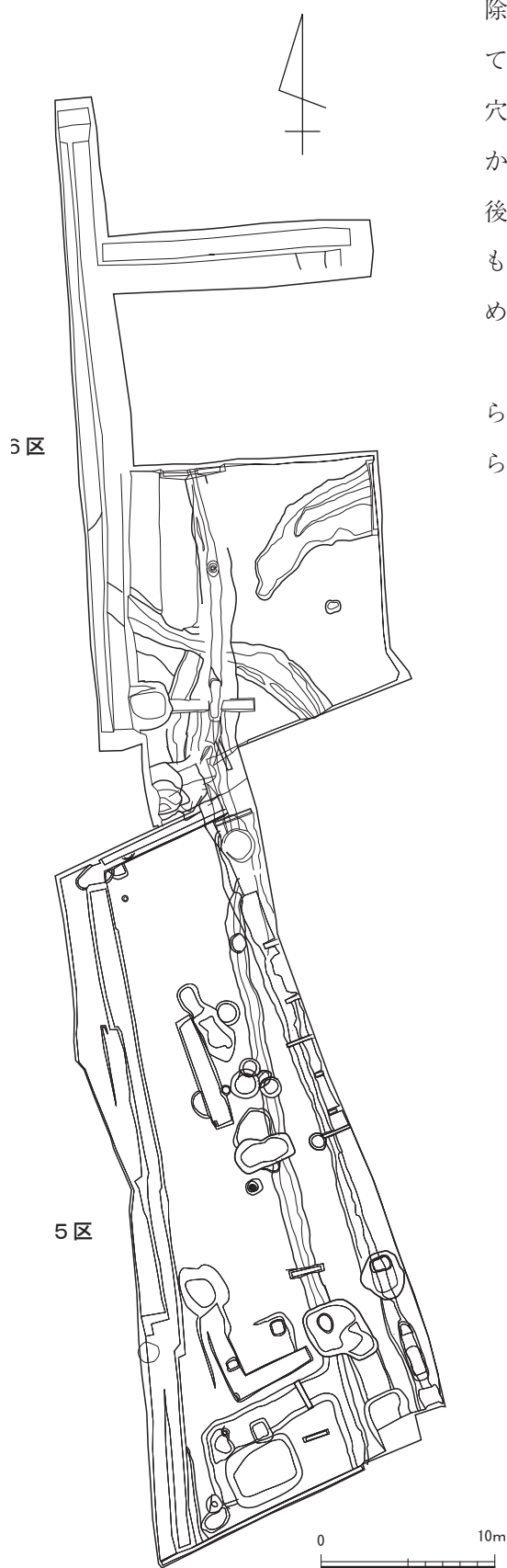
2面での遺物のごくわずかであるが、畦畔の盛土中より、須恵器杯・蓋が出土している。形態から7世紀前葉に比定され、このことから水田の形成は7世紀前葉以降と考えられる。この年代は後続する1面、先行する3面とも整合する。

3面（古墳時代後期）

過年度調査において、古墳時代後期の集落が確認されていた面である。全体的に遺構の密度は希薄であるが、5区と6区の境界付近で、平成26年度に検出された総柱建物の延長を確認した。建物はやや方位が異なる2棟が並列しており、2棟の建物の周囲を同時期の溝が北辺を



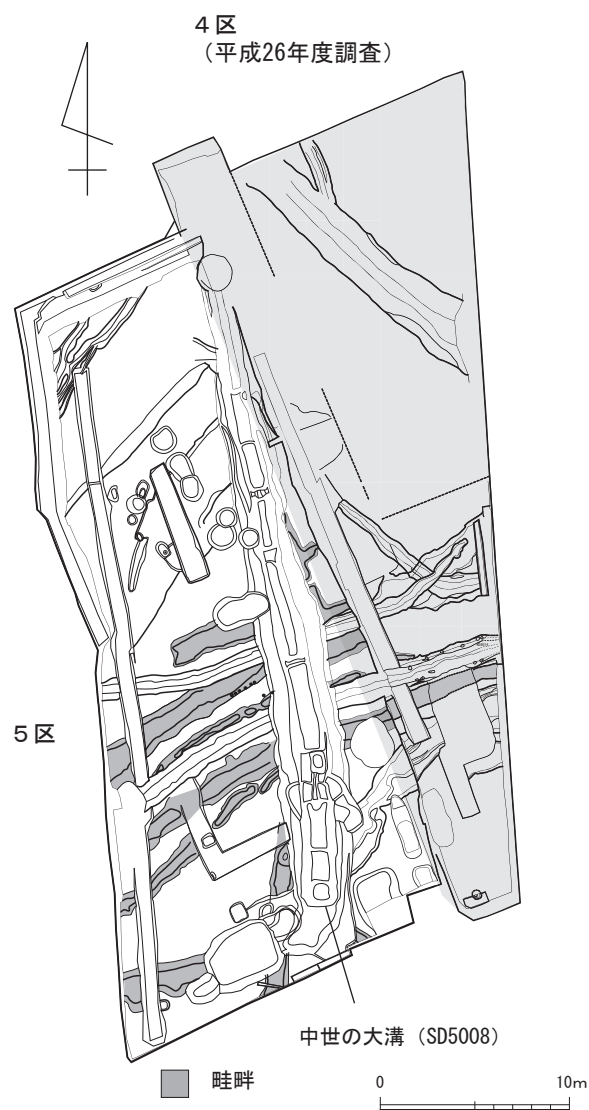
写真 25 6区 3面掘立柱建物



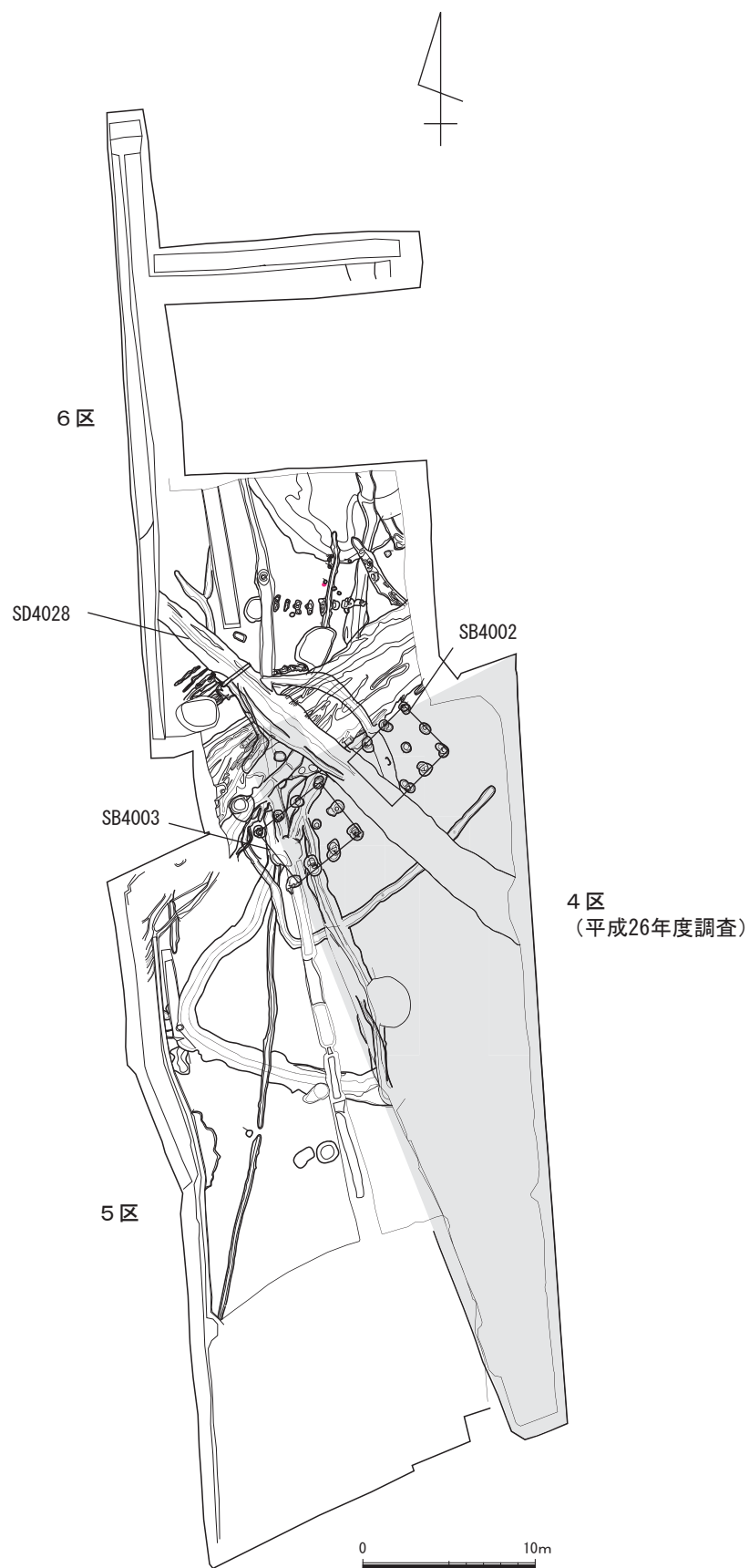
第 12 図 第 1 面 遺構平面図

除く 3 辺に廻る。東側の建物については、SD4028 によって一部削平されているが、 2×3 間とした場合、西端の柱穴列が他の側柱と規模が異なることや、西の建物との関係から、2 棟とも 3×4 間の建物と考えられる。古墳時代後期の総柱建物としては、同時期の県下の集落遺跡の例でも、比較的規模は大きく、遺跡全体の中での位置づけも含め、今後の検討課題となる。

そのほかの遺構としては小規模な溝やピットが少数認められるのみであり、6 区の北側部分では、遺構の密度はさらに希薄となる。



第 13 図 第 2 面 遺構平面図



第14図 第3面 遺構平面図

かもういせき
蒲生遺跡

本遺跡は小豆郡小豆島町蒲生に所在する弥生時代から近世にかけての遺跡である。遺跡の南側は池田湾に面し、北側には標高 427.2 m を測る太麻山がある。太麻山の南西斜面からは尾根と谷が派生し、ここから供給される土砂と海からの潮流により浜堤が形成され、遺跡はその上に立地する。大きな河川はなく、角田川・奥の谷川といった小河川が近接する。また、西側及び東側は共に太麻山から派生する尾根が海の方へ張り出して形成されたあさぎ岬、飛岬によって囲まれる。周辺にはあさぎ岬の反対側に位置



第 15 図 遺跡位置図 (1/25,000)

(国土地理院 1/25,000 地形図「土庄」の一部を加工して利用)

する弥生時代の遺物を伴う入部遺跡、飛岬の反対側に位置する西風呂遺跡などが知られるが、詳細は不明である。遺跡が形成された基盤層や遺構の埋土は、遺跡が砂堆上に立地することもあり、全体的にやや粘質を伴う細砂質土からなる。堆積状況から大きく 2 面に分けて調査を行った。調査区は地割に従い、北半をⅠ区、南半をⅡ区として設定した。

第 1 面 (中世末～近世)

ほぼ平坦な地形であるが、Ⅰ区北側が若干高い。遺構はこの高い北側に集中し、Ⅰ区南半以南では希薄である。特にⅡ区は後世の造成などに伴い、著しく改変されている。この面では、柱穴 6 基、土坑 1 基、溝状遺構 6 条、性格不明遺構 18 基を検出した。注目されるのは、Ⅰ区北側で検出した性格不明遺構 17 基である。平面形は楕円形を呈し、大きく分けて長軸 4 m 程度、短軸 3 m 程度の大型のものと、長軸 2 m 程度、短軸 1.5 m 程度の小型のものに分類できる。断面形状は逆台形で、深さは共に 1 m 弱である。底面と壁面に約 0.1 m の厚さで粘土を貼ったものが認められ、水を溜める目的で構築されたと考えられる。粘土直上に堆積する土が泥質であり、その上には粘土ブ



写真 26 第 1 面北端鹹水槽群



写真 27 鹹水槽 SX1010 完掘

ロックなどを含む締まりの悪い砂質土が堆積する。また、粘土を貼ったものについては底部中央付近に平坦な礫が据え置かれるものがあり、礎石として機能したと考えられる。このような構造の遺構は、小豆島町に伝わる延享3年の文献に認められる塩田関連の施設で鹹水を貯蔵する「汐壺」と称される構造物に類似しており、鹹水槽である可能性が高い。17基は全て同時に構築されたのではなく、最大4基の重複関係が認められることから、少なくとも4時期に細分が可能である。ただし、先述した通り、形状からはその差異は認められない。また、出土遺物は中世前半期以前のもものが主体となり、遺構の時期を明確に示すものはない。下位にある包含層起源と考えられるものが、埋め戻し土に混じったと考えられる。一部で15世紀代と考えられる遺物を含むことから、それ以降の構築であるとしておく。

第2面（弥生時代～中世前半）

南半が削平されているが、堆積状況を確認すると南北両端がやや緩やかに高くなり、中央付近が若干窪む地形である。南半を除くほぼ全面で、柱穴を主体とした遺構が確認できた。この面では柱穴256基、溝状遺構8条、土坑14基、性格不明遺構9基を確認した。柱穴は、出土遺物からその大半が14世紀前半頃のものと考えられるが、一部12世紀代のものと考えられるものも含まれる。これらの柱



写真 28 I区第2面全景

穴の一部は掘立柱建物の一部を成しており、不完全な形状のものを含め13棟を復元した。建物の時期は明確にしがたく、出土遺物には12世紀代のものと14世紀代のものが含まれる。出土遺物の状況は、建物を構成しない他の柱穴と同じである。溝状遺構は中世以降のものが主体となるが、一部古墳時代後期頃のものを含む。土坑はやはり中世のものが主体となるが、弥生時代後期のものや古墳時代後期のものが混じる。特筆する点として、中世前半の遺物を伴うもので底面が著しく被熱・固結しており、底面直上に炭化物の堆積が認められるうえ、その中から鉄滓が多数出土するものがあり、その状況から鍛冶炉であったと考えられる土坑を確認している。周辺からも椀形滓や破損した鉄製品などが出土することから、小規模な鍛冶作業が行われていたことが窺える。

性格不明遺構はI区南半に集中する。比較的大型であるが浅い不整形な落ち込みとして捉えられ、埋土中からは古墳時代後期後半頃の須恵器が主体的に出土している。ほぼ同時期のものと考えられる製塩土器（備讃Ⅵ式・Ⅶ式）の小片が伴う。また、これらは8世紀～10世紀代の遺物を含む層に覆われており、最終埋没がそのころであると考えられる。

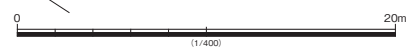
全体的に見て出土遺物は中世前半期のものが主体を占めており、瓦器椀、小皿、吉備系のものを多く含む土師質土器椀・小皿、輸入陶磁椀などが認められる他、土錘が若干目立つ。鉄製品も若干出土しており、その中には釣針も認められる。また小片化しているものの古墳時代後期後半の製塩土器が多く伴う。これを主体とする遺構があるほか、各遺構に混入して出土する。また、

若干量弥生時代から古墳時代前期の遺物を伴う。内容は製塩土器を主体とするが、甕などの小片もわずかに伴う。

まとめ

蒲生遺跡は第 1 面の状況から対象地を含む近辺で塩田が営まれていた可能性が高い。検出した鹹水槽について、構築された明確な時期は明らかにしえなかったが、文献によると少なくとも 15 世紀以降、小豆島内で塩生産が行われ、蒲生遺跡の所在する蒲生においても塩田の存在が記録されていることから、これに関連する遺構であった可能性は十分指摘できる。今後、同様な立地をする塩田遺跡において同様の遺構が検出されることが期待される。

第 2 面では、複数時期の遺構を同一面で捉えていることから詳細な変遷などを押さえることが困難であるが、少なくとも中世前半段階には掘立柱建物を伴う集落が形成されたことが分かる。出土遺物の中に土錘・鉄製釣針などが含まれていることから、遺跡の立地から見ても漁撈がその生業の一部であったと考えられる。それとともに輸入陶磁や瓦器、吉備系土師質土器碗など島外に産地を求めるべきものが一定量出土することから、海運に伴う物資の集積地であった可能性も考えられる。島内において同時期の遺跡について、特に立地を同じくするものの調査事例が無いことから比較は困難であるが、今後の事例増加による比較検討が望まれる。更に、前代の古墳時代後期後半を主体とする製塩土器についても、製塩関連の遺構が認められないことから主たる生産域からは外れていると考えられるが、周辺での製塩土器表採が記録されているなど、近接した位置での生産域の存在が想定できる。周辺を含めた今後の調査が求められる。



2. 普及・啓発事業

(1) 展示

①香川県埋蔵文化財センターでの展示

タイトル	場所	会期
遺跡・遺物からみた香川の歴史	第1展示室	4月1日～9月18日、1月6日～3月31日
発掘調査速報展	第2展示室	4月23日～7月14日
第1回四国地区埋蔵文化財センター発掘へんろ展 四国の黎明	第1展示室	9月30日～12月24日
讃岐国府跡を語る 6	第2展示室	4月1日～5月11日
発掘された綾川町の遺跡 西末則遺跡展	第2展示室	5月14日～7月14日
夏休み子どもミュージアム むかしのひとの図画工作	第2展示室	7月21日～8月31日
仲戸東遺跡と香川の埴輪	第2展示室	9月4日～12月21日
讃岐国府跡を語る 7	第2展示室	1月8日～3月31日

第9表 展示一覧

単位：人

一般			団体										合計
大人	子ども	計	団体数					構成員数					
			一般	高校生	小・中学生	幼稚園	計	一般	高校生	小・中学生	幼稚園	計	
1,406	185	1,591	16		7		23	435		227		662	2,253

第10表 入館者数一覧

②香川県埋蔵文化財センター以外の施設での展示

タイトル	場所	会期	観覧者数（人）
讃岐国府跡を語る 6	高松市讃岐国分寺跡資料館	5月12日～6月28日	759
讃岐国府跡を語る 6	三豊市宗吉かわらの里展示館	7月4日～7月26日	712
讃岐国府跡を語る 6	まんのう町琴南ふるさと資料館	7月28日～8月30日	167
讃岐国府跡探索事業展示	水のフェスティバル in 府中湖	10月4日	10,000
鹿伏中所遺跡写真展	三木町池戸公民館	9月9日～9月30日	207
多肥地区文化祭 「埋蔵文化財展」	高松市多肥コミュニティセンター	10月25日～10月30日	70
川添文化祭 「高松市茶臼山古墳」発掘写真展	高松市立川添小学校	11月7日～11月8日	600
町田地区の埋蔵文化財展	東かがわ市丹生コミュニティセンター	11月22日	110
讃岐国府跡を語る 6	坂出市郷土資料館	11月1日～11月29日	153
讃岐国府跡を語る 6	観音寺市立中央図書館	12月23日～1月10日	202
讃岐国府跡を語る 6	綾川町立生涯学習センター	1月19日～2月14日	274
発掘された綾川町の遺跡 西末則遺跡展			

讃岐国府跡を語る 6	東かがわ市歴史民俗資料館	2月20日～5月15日	173
第1回四国地区埋蔵文化財センター発掘へんろ展 四国の黎明	松山市考古館	4月25日～7月12日	3,789
	高知県埋蔵文化財センター	7月18日～9月18日	1,645
	徳島県立埋蔵文化財総合センター	1月12日～3月13日	1,513
合 計			20,374

第11表 センター外展示一覧

(2) 現地説明会・地元説明会

内容		実施日	対象	見学者数（人）
1	蒲生遺跡現地説明会	5月10日	一般	240
2	内間遺跡現地説明会	10月3日	一般	80
3	讃岐国府跡現地説明会（地元・県職員対象）	2月13日	地元ほか	70
4	讃岐国府跡現地説明会（一般対象）	2月14日	一般	130
5	讃岐国府跡第33次調査地発掘調査報告会	3月6日	一般	140
合 計				660

第12表 現地説明会・地元説明会一覧

(3) 講師の派遣

①体験講座など

依頼者	実施日	場所	内容	対象	人数（人）
1 むきばんだまつり	9月23日	鳥取県立むきばんだ史跡公園	アングン編み	一般	38
合 計					38

第13表 体験講座への講師派遣一覧

②学校

学校名	実施日	内容	対象	人数（人）
1 まんのう町立琴南小学校	11月27日	土器炊飯	6年生	10
合 計				10

第14表 学校への講師派遣一覧

③その他

依頼者	実施日	内容
1 高松市讃岐国分寺跡資料館友の会	5月23日	講演
2 宇多津町教育委員会	5月14日	講演
3 宇多津町教育委員会	6月10日	講演
4 宇多津町教育委員会	7月9日	講演
5 宇多津町教育委員会	9月3日	講演
6 宇多津町教育委員会	10月14日	講演
7 明倫市民教養講座	7月16日	講演
8 清水園と地域を結ぶ会	7月22日	講演
9 高野山真言宗香川青年教師会	8月19日	展示解説・体験講座

10	さぬき市文化財保護協会寒川支部	8 月 23 日	講演
11	三木町文化財保護協会	9 月 12 日	講演
12	蓬萊歴史研究会	9 月 15 日	講演
13	府中湖水のフェスティバル実行委員会	10 月 3 日	遺跡案内
14	府中老人クラブ連合会	11 月 12 日	講演
15	高松大学	12 月 12 日	国府案内
16	蓬萊歴史研究会	1 月 19 日	講演
17	公益財団法人 徳島県埋蔵文化財センター	1 月 31 日	講演
18	坂出市生涯学習課	2 月 6 日	国府案内
19	高松市老人クラブ連合会	2 月 16 日	講演

第 15 表 講演等への講師派遣一覧

(4) 夏休みこどもミュージアム

7 月 21 日～8 月 31 日に夏休みこどもミュージアムを行った。

実施日	タイトル	内容	人数（人）
7 月 21 日～8 月 31 日	むかしのひとの図画工作	展示	378
7 月 21 日～8 月 21 日	遺跡の自由研究サポートデスク	自由研究のアドバイス	3
7 月 25 日、8 月 5 日	古代をたいけんしてみよう。	土器作り、ガラス玉作り、アンギン編みでポシェット作り	34
7 月 29 日	古墳見学 石清尾山古墳群	古墳見学	8
合 計			423

第 16 表 夏休みこどもミュージアム実施事業一覧

(5) 発掘体験講座

11 月 27 日に六条下所遺跡で発掘体験講座「発掘してみよう」を行なった。小・中学生 11 名が参加した。

(6) 考古学講座

専門職員が講師を務める考古学講座を 4 回開催した。

回	実施日	タイトル	講師	人数（人）
1	8 月 8 日	墳墓からみた讃岐の古代から中世	蔵本晋司	31
2	10 月 10 日	香川県の横穴式石室～導入から展開～	松本和彦	30
3	12 月 12 日	建物から見た古墳時代から古代の讃岐	竹内裕貴	30
4	2 月 13 日	古墳の話～古墳時代が始まった頃を中心に～	真鍋貴匡	31
合 計				122

第 17 表 考古学講座一覧

(7) 文化ボランティア活動

文化ボランティアは、事業の記録撮影や普及事業の補助などを行った。7 名が登録し、9 回、延べ 22 名が活動に参加した。

(8) 新聞記事掲載

四国新聞に「古からのメッセージ⑬ さぬき考古学タカラ箱」として、計 47 回の連載を行った。讃岐国府跡探索事業に関連した内容「讃岐国府を考える」(12 回)、香川県内の著名な遺跡をあいいうえお順に紹介する「讃岐考古学あいいうえお」(25 回)、「第 1 回四国地区埋蔵文化財センター発掘へんろ展」の内容を紹介する「発掘へんろ展から」(10 回)で構成した。

(9) 資料の貸出・利用

区分	学校・大学	研究会・同好会	教育委員会・博物館・その他公共団体	出版社・新聞社・その他民間企業	個人・他	合計
遺物	6		17		11	34
写真・パネル	1		10	5	2	18
レプリカ・模型						
合 計	7		27	5	13	52

第 18 表 資料貸出・利用一覧（数字は件数）

(10) 職場体験学習・インターンシップ

	学校名	期間	内容	人数（人）
1	香川県庁インターンシップ	8 月 24 日	職場体験	3
2	高松市立香東中学校	9 月 7 日～9 月 11 日	職場体験	3
3	坂出市立白峰中学校	11 月 10 日～12 日	職場体験	3
合 計				9

第 19 表 職場体験学習・インターンシップ一覧

(11) 刊行物

- (1) 『香川県埋蔵文化財センター年報 平成 26 年度』
- (2) 『いにしへの讃岐』86 号～89 号

(12) ホームページ

ホームページ (<http://www.pref.kagawa.lg.jp/maibun/>) の更新を随時行った。

トップページビュー数 24,779

3. 讃岐国府跡探索事業

「香川県文化芸術文化振興計画」に基づき平成 21 年度から開始した讃岐国府跡探索事業は、平成 27 年度で 7 年目を迎える。主な調査事業としては讃岐国府跡の遺構内容の確認を目的とした発掘調査を実施した。讃岐国府跡を活用した情報発信による主な広報活動事業は、まち歩きや事業成果報告会を開催した。

讃岐国府跡の発掘調査は開法寺跡東側で見つかった大型建物の全体像を明らかにすることなどに主眼を置いた。調査の結果、大型建物が 3 棟見つかった。これらは廂をもつかなりの格式をもった建物で、奈良時代終わり頃から平安時代後半までの約 200 年間、同じ場所で建て替えられたことがわかった。また、建物西側の開法寺伽藍との間の部分では南北方向の柵列や溝が数条見つかри、この場所に繰り返し境界を設け続けたことがわかった。

(1) ボランティア活動

- ・登録人数 24 人
- ・延べ人数 371 人

(2) 地域との交流

内容	実施日	参加人数
「第 17 回 水のフェスティバル in 府中湖」国府ゆかりの史跡を歩く	10 月 3 日	80 人
「第 17 回 水のフェスティバル in 府中湖」展示	10 月 4 日	10,000 人
讃岐国府跡現地説明会	2 月 13 日	70 人

(3) 情報発信

内容	回数
ホームページへの記事掲載	5 回
情報誌「いにしへの讃岐」への記事掲載	2 回
新聞への連載記事掲載	12 回
地元ケーブルテレビガイドブックへの記事掲載	2 回
庁内掲示板への掲載	1 回
N H K 出演	1 回
K S B 出演	1 回
K B N 出演	1 回

(4) 関連行事

行事名	会場	実施日	参加人数
まち歩き「国府の里を歩く」	坂出市府中町	11 月 21 日	17 人
展示「讃岐国府跡を探索 6」	香川県埋蔵文化財センター	4 月 1 日～5 月 11 日	193 人
展示「讃岐国府跡を探索 7」	香川県埋蔵文化財センター	1 月 8 日～3 月 31 日	448 人
出張展示「讃岐国府跡を探索 6」	高松市讃岐国分寺跡資料館	5 月 12 日～6 月 28 日	759 人
出張展示「讃岐国府跡を探索 6」	三豊市宗吉かわらの里展示館	7 月 4 日～7 月 26 日	712 人
出張展示「讃岐国府跡を探索 6」	まんのう町琴南ふるさと資料館	7 月 28 日～8 月 30 日	167 人
出張展示「讃岐国府跡を探索 6」	坂出市郷土資料館	11 月 1 日～11 月 29 日	153 人
出張展示「讃岐国府跡を探索 6」	観音寺市立中央図書館	12 月 23 日～1 月 10 日	202 人
出張展示「讃岐国府跡を探索 6」	綾川町生涯学習センター	1 月 19 日～2 月 14 日	274 人
出張展示「讃岐国府跡を探索 6」	東かがわ市歴史民俗資料館	2 月 20 日～5 月 15 日	173 人

出張講座 高松市讃岐国分寺跡資料館友の会「讃岐国府の最新発掘調査成果」	高松市讃岐国分寺跡資料館	5月23日	30人
出張講座 清水園と地域を結ぶ会「讃岐国府跡の発掘調査について」	救護施設清水園	7月22日	20人
出張講座 さぬき市文化財保護協会寒川支部「ほぼ確定した古代の讃岐国府について」	さぬき市寒川公民館	8月23日	65人
出張講座 府中老人クラブ連合会「讃岐国府と坂出の海岸線」	府中老人いこいの家	11月12日	76人
発掘調査現地説明会(地元・県職員対象)	讃岐国府跡発掘調査地	2月13日	70人
発掘調査現地説明会(県民対象)	讃岐国府跡発掘調査地	2月14日	130人
現地見学 高松大学	讃岐国府跡発掘調査地	12月12日	20人
現地見学 坂出市教育委員会生涯学習課「讃岐国府跡発掘現地見学」	讃岐国府跡発掘調査地	2月6日	25人
シンポジウム「讃岐国府跡第33次調査地発掘調査報告会」	坂出市民ふれあい会館	3月6日	140人

Ⅲ 讃岐国府跡第 33 次調査成果の概要

遺跡名 讃岐国府跡

所在地 坂出市府中町本村

調査主体 香川県教育委員会

調査担当 香川県埋蔵文化財センター

調査期間 平成 27 年 10 月 1 日～平成 28 年 3 月 18 日

調査面積 680㎡

出土遺物 土器・瓦・金属器等 整理箱 120 箱

1. 調査成果の概要

調査の結果、飛鳥時代から鎌倉時代の遺構を確認した。この中で、飛鳥時代の竪穴建物（住居）群を除くと、全て讃岐国府跡に関係する建物等の遺構となり、大きな成果があった。中でも注目されるのは 33-2 区の大型建物 1～3 である。大型建物 1～3 は、奈良時代の終わり頃（8 世紀末葉）から平安時代（11 世紀前葉）にかけての建物であり、廂を備えて同一地点で複数回建て替えられている。現時点で具体的な性格を明らかにするためには、今後の調査・検討が必要であるが、今後の調査における定点となる大型建物を全面的に検出しえた点は大きい。

大型建物の他にも調査区のほぼ全域で奈良時代から平安時代にかけての大型建物を含む建物群が連綿と営まれており、現在調査を進めている国府域南部のエリアが讃岐国府における中枢部であることを示していると言えよう。

2. 各時代の調査成果

・飛鳥時代 7 世紀中葉の竪穴建物（住居）群が多く検出されている。竪穴建物（住居）群は一定エリアの中で盛んに建て替えられており、かなり重複した状態で検出されている。また、作り付けの竈（かまど）をもたないものが多く、同時代の県内の他の遺跡の事例と比べて相違がある。突如として営まれる竪穴建物（住居）群の時期が隣接する古代山城の城山城の築城推定年代に合致することもあり、両者の関連性が注目される。

・飛鳥時代末葉～奈良時代初頭

真北を基準とした建物群や溝が検出されている。これらの建物群はこれまでの調査でも確認されていたが、今年度調査の 33-1 区においても 3 棟の建物を検出した。これらの建物群は規格的に配置されている可能性が高く、所謂「官衙的」と言える条件を備えている。建物 1200 と建物 1201 は北側の梁行を揃えて並列するように建てられており、柱穴の大きさや柱間からみて建物 1200 は中心的な建物の一つと考えられる。また、建物 1201 と建物 1202 は直列して配置されていると考えられ、柵列等で連結されている可能性もある。

これらの真北を基準とした建物群の性格や後に設置される讃岐国府との関係については、現時点で建物群の広がり不明なことと、造営時期が飛鳥時代末葉から奈良時代初頭と考えられることもあり、今後の調査の進捗を待って検討していく必要がある。

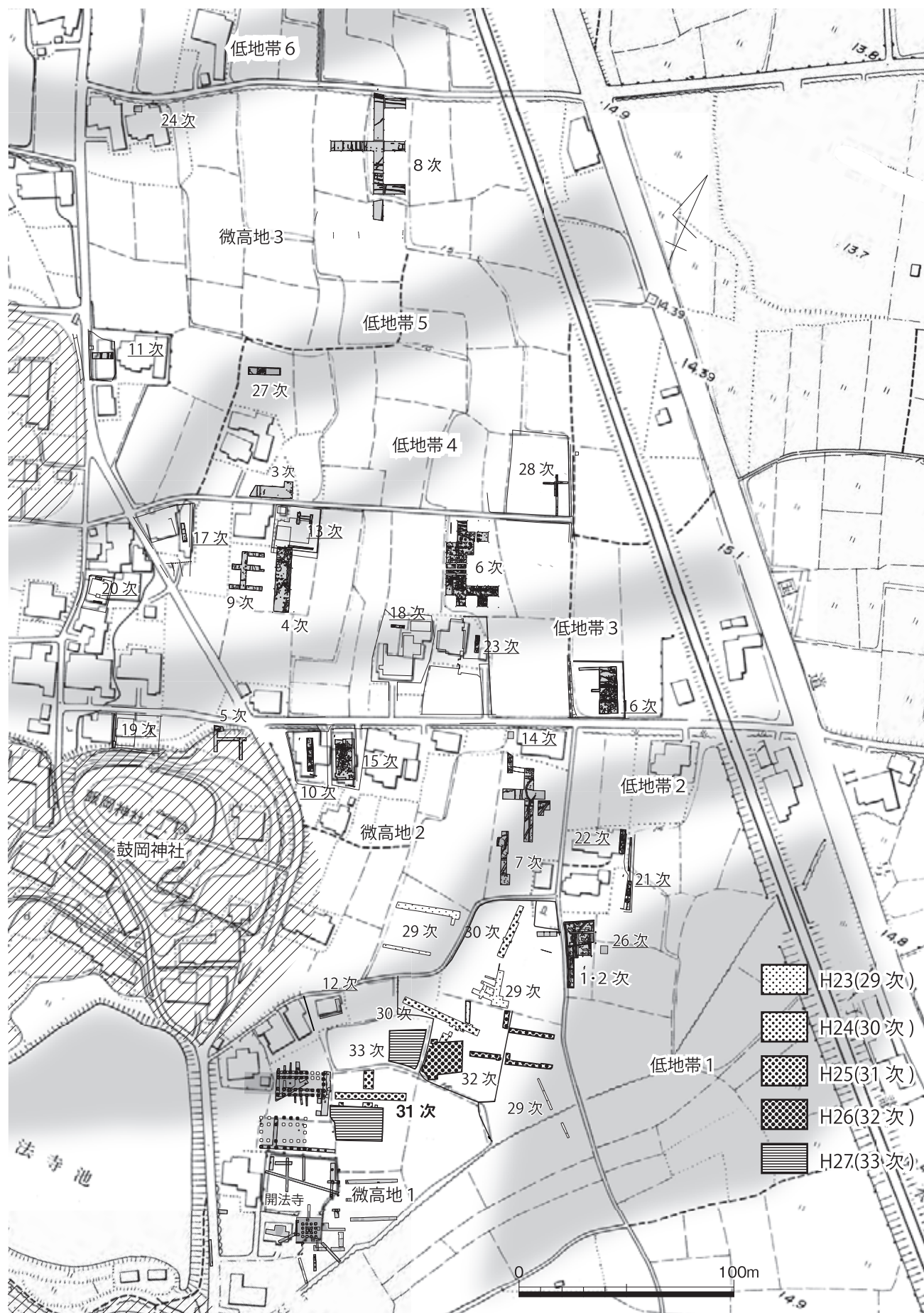
・奈良時代から平安時代

今年度調査では33-1・33-2区のほぼ全域で建物を確認した。昨年度の32次調査で確認した大型柱穴列は梁間3間、桁行3間の南北棟の大型建物となることが明らかになり、東西棟の大型建物となる当初の想定と異なった結果になったものの、奈良時代から平安時代にかけて継続して造営された建物を多く検出し、継続して営まれた官衙建物群の様相を明らかにすることができた。奈良時代から平安時代におけるこれらの建物群の細かな年代については、今後とも検討していく必要があるが、今回の調査では33-2区の大型建物1～3が注目される。大型建物1～3は、いずれも東西棟であり建物主軸線・位置を踏襲して連続して造営される。平面的な検出状態から大型建物1→大型建物2→大型建物3へ2回の建て替えが行われ、出土した土器資料から大型建物2は平安時代9世紀末葉から10世紀初頭、大型建物3が平安時代11世紀前葉に柱が抜き取られたことは推定できる。しかし、大型建物1・2の柱穴には数回柱を据えなおした痕跡が認められており、大型建物1・2の造営年代については不明な点が多い。大型建物2の最終的に柱が抜き取られた年代が9世紀末葉から10世紀初頭であることや、大型建物1・2に複数回柱が据え直されている状況からみて、暫定的に大型建物1は奈良時代末葉である8世紀末葉に、大型建物2は9世紀代を中心に機能したと考えておきたい。

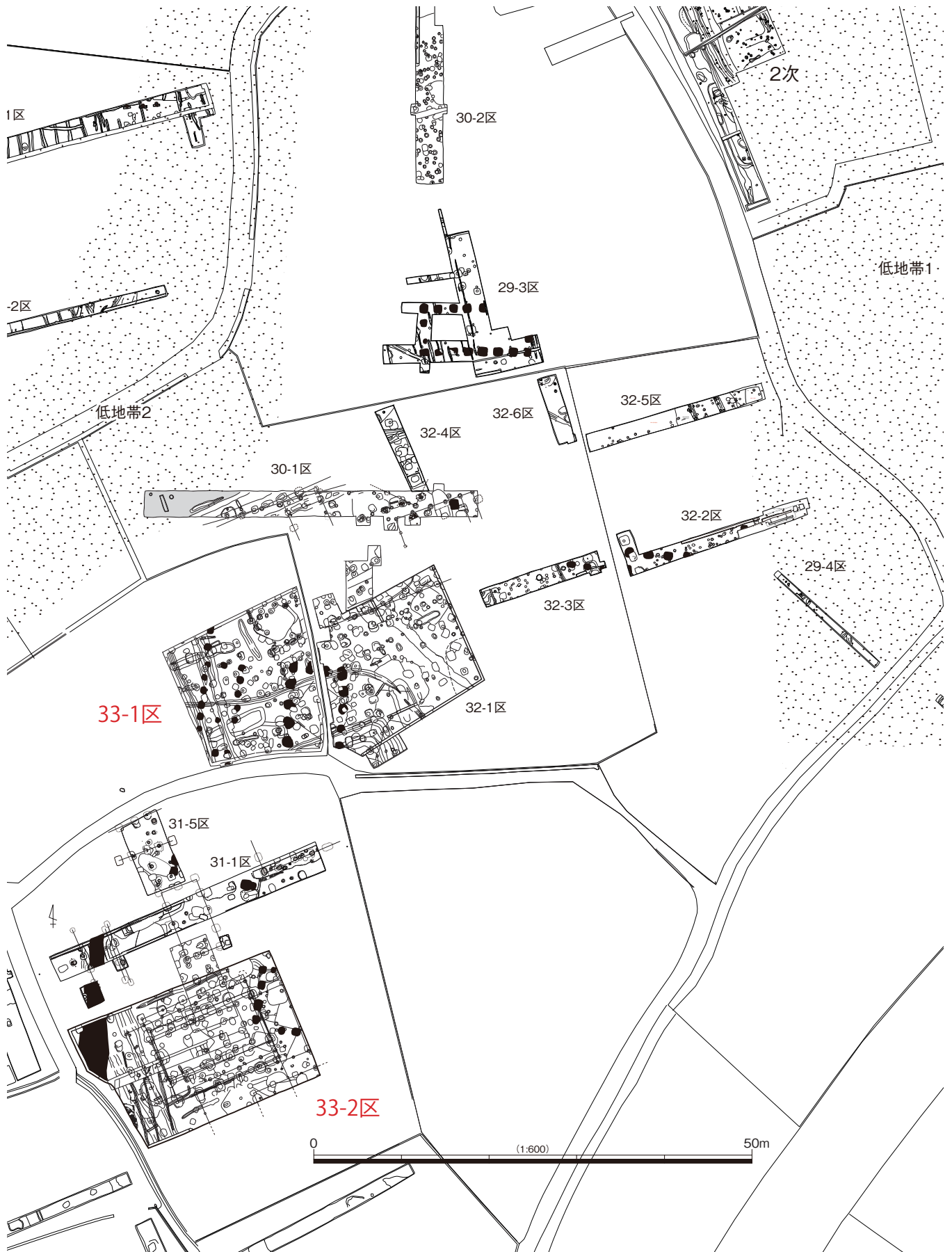
大型建物1は梁行2間、桁行5間で南側に廂をもつ「片廂」と呼ばれる構造をもち、廂を含めた建物総面積は約100㎡であり、柱穴の規模も最も大きい。大型建物2は梁行2間、桁行5間で南北に廂をもつ「二面廂」の構造をもち、総面積は約140㎡を測る。大型建物3は梁行2間、桁行5間で東西南北に廂をもつ「四面廂」の構造をもち、総面積は約120㎡である。

総面積が100㎡を超えた大型建物が約200年間に涉って同一地点で建て替えられたことになる。各段階の廂の面数は異なるが、この時代の同規模の廂付建物は讃岐国分寺などを中心に数例知られているのみであり、かなりの格式をもった建物と推定することができるが、讃岐国府におけるこの建物の具体的な性格やこれまでの調査で確認している周辺の建物群との関係については今後の調査・検討が必要である。

また、大型建物1～3の西側の開法寺伽藍との境界には柵列や溝が連続して営まれており、これらの点が大型建物の性格を考える際に重要な手掛かりとなる。



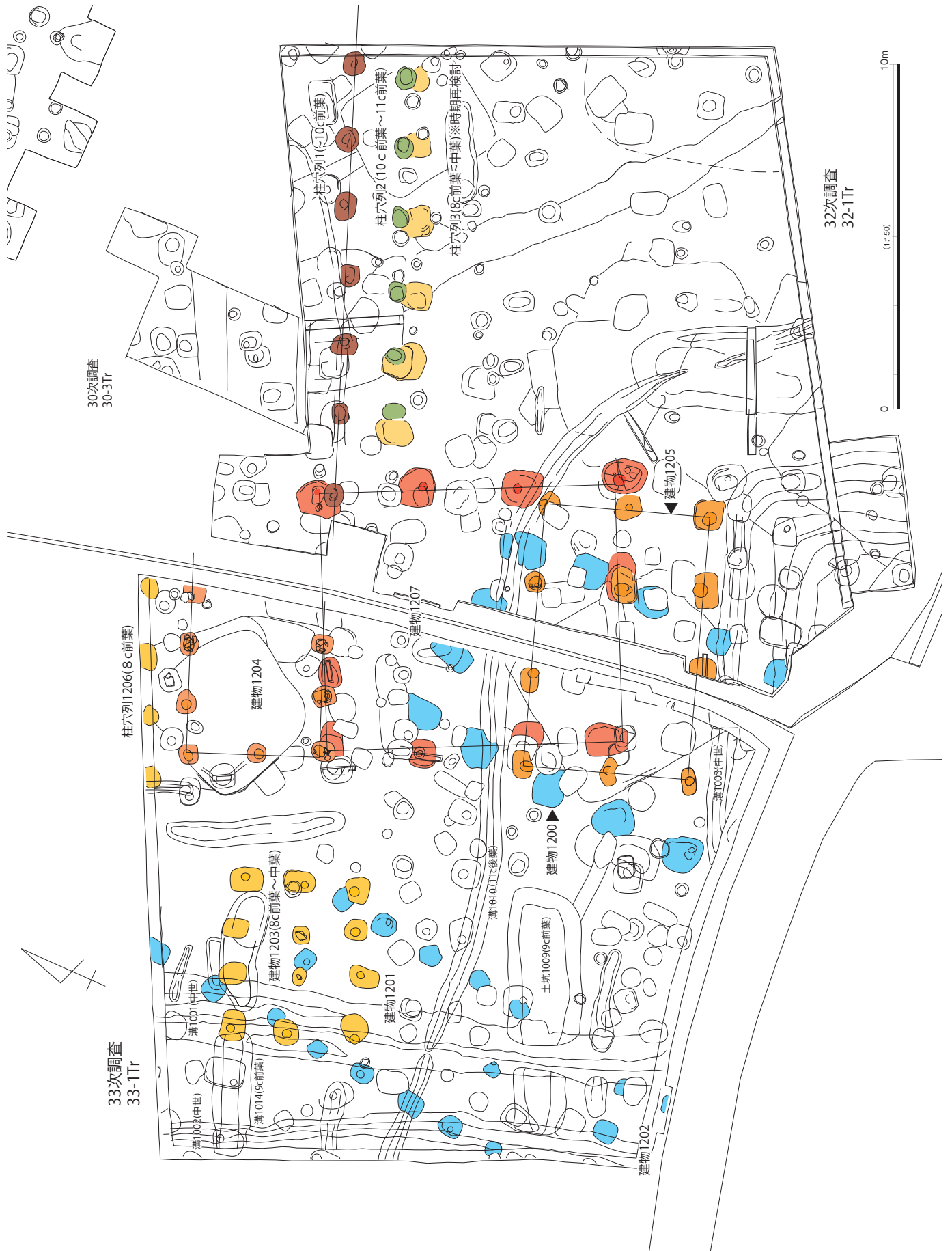
第 17 図 讃岐国府跡における既往の調査地と地形



第 18 図 遺構配置（飛鳥時代末葉～奈良時代初頭）



第19図 遺構配置（奈良時代～平安時代）



第20図 33-1区遺構平面図



第 21 図 33-2 区遺構平面図



写真 29 大型建物 1 ～ 3 西から（奈良～平安時代 約 1,300 ～ 1,000 年前）

Ⅳ 調査研究

四国における前半期古墳出土埴輪の基礎的研究

ー香川県今岡古墳出土埴輪を中心としてー

蔵本 晋司

1 はじめに

筆者はかつて、香川県東かがわ市仲戸東遺跡の調査報告書において、古墳時代後期の埴輪資料を整理する機会に恵まれた。同遺跡出土埴輪を評価するにあたり、当該期を含めた本地域の円筒埴輪の編年の研究のため、未公表資料を含めた埴輪資料の図化作業を実施した。その成果の一部は同報告書に掲載した(蔵本 2016) が、諸般の都合で掲載を見送った資料も少なくない。

小稿は、その際実測作業を実施した、当センター所蔵の今岡古墳を中心とした前半期古墳出土の埴輪資料を公表するとともに、埴輪編年Ⅰ～Ⅲ期(埴輪検討会 2003)の様相について、若干の考察を加えるものである。同古墳出土の埴輪については、一部が渡部明夫や大久保徹也により既に公表されている(渡部 1976・大久保 1996)。今回、両氏が報告された資料を含めて、再度、

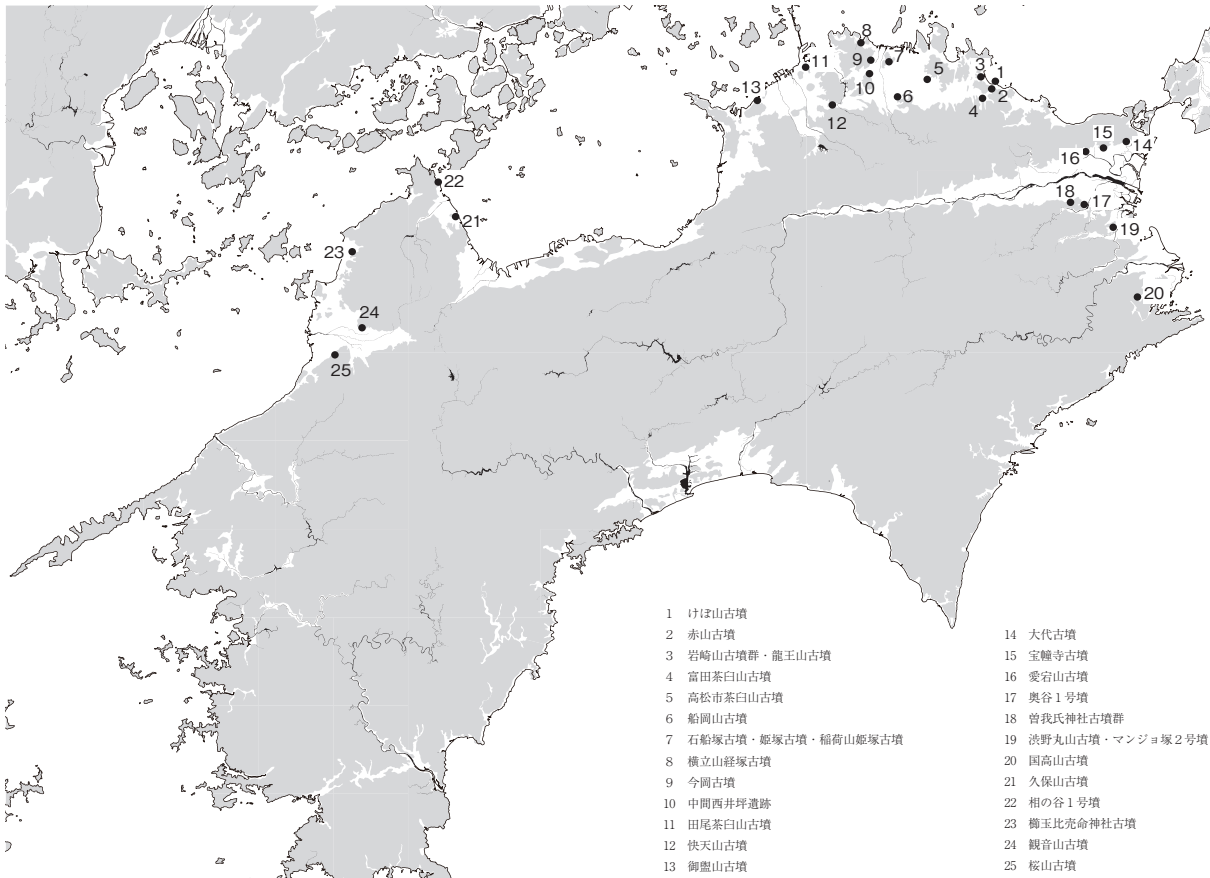
実測・掲載する。これは、収蔵資料のなかから既報告資料を特定することができなかったことと、図の表現を統一するためであり、非礼があれば深くお詫びしたい。

当センター保管資料は、昭和 39 (1964) 年度に実施した調査時出土資料のほか、その後の採集資料を中心とした資料群である。同古墳出土資料は、そのほか高松市教育委員会保管資料や公益財団法人鎌田共済会郷土博物館収蔵資料等があり、それらについての図化は今回見送った。また、土製棺資料についても、今回は掲載を見送った。いずれ機会を改めて、報告することとしたい。

2 今岡古墳出土の埴輪

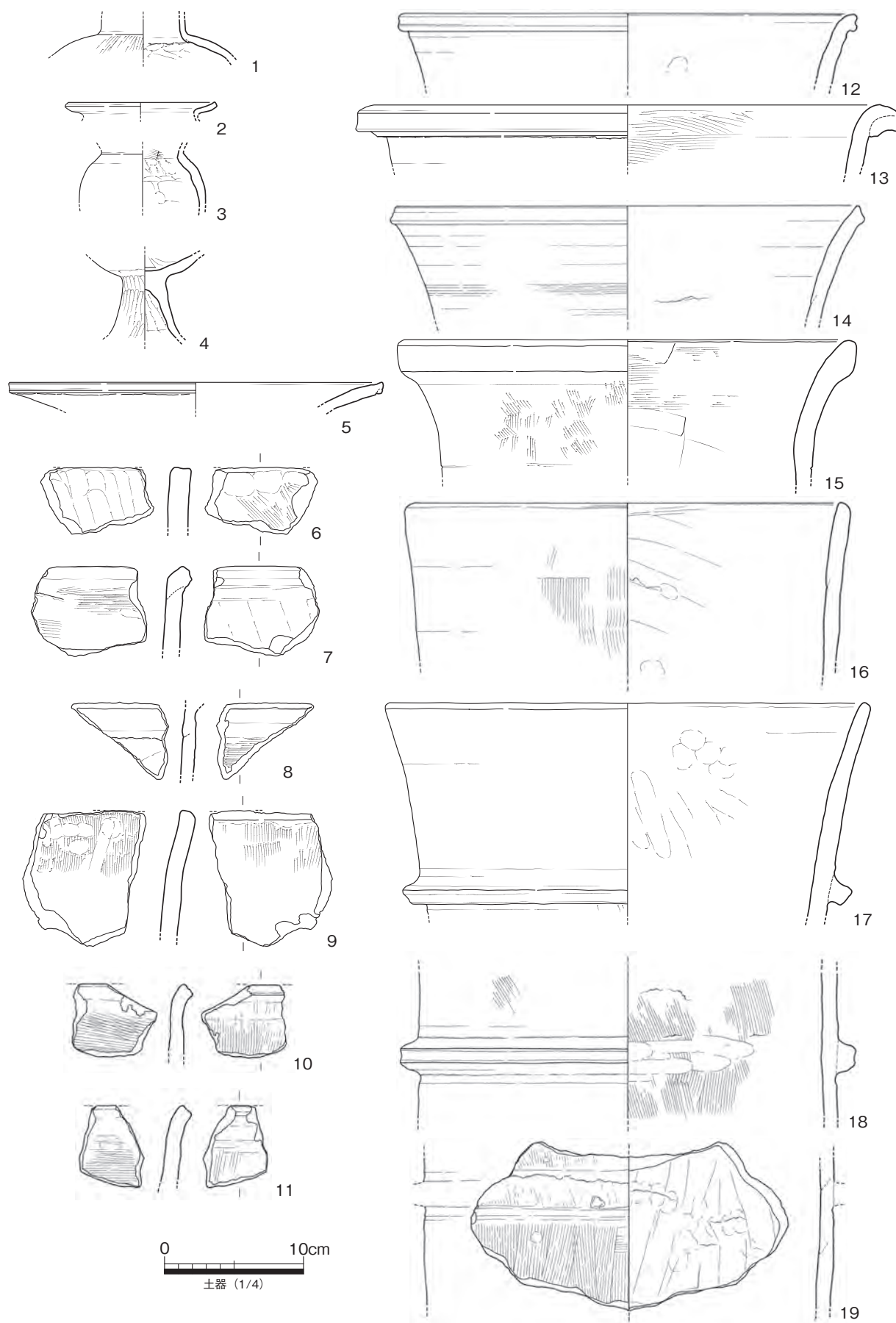
今岡古墳は、高松市鬼無町に所在する全長約 60 m の前方後円墳である。高松平野北西部の標高約 364 m の勝賀山より東に派生する、標高約 64 m (比高約 40 m) の舌状丘陵頂部に立地する。前方部や後円部周辺は果樹園として開墾され、昭和 39 年前方部より土製棺が出土したことから、調査が実施され、現在県史跡として保護されている。さらに平成 9 年度に、高松市教育委員会により、前方部端部より出土した古式土師器甕等の取り上げ調査が実施(香川県教育委員会 1999)された以降、本格的な調査は実施されていない。後円部に竪穴式石室と刳拔式石棺が、前方部に複数基の土製棺の追葬が想定されているが、詳細は不明である。

以下、報告する土器、埴輪は主に採集資料であり、出土位置が不明なものが多い。古くに出土した一部は、高橋邦彦が元所



第 22 図 古墳分布図

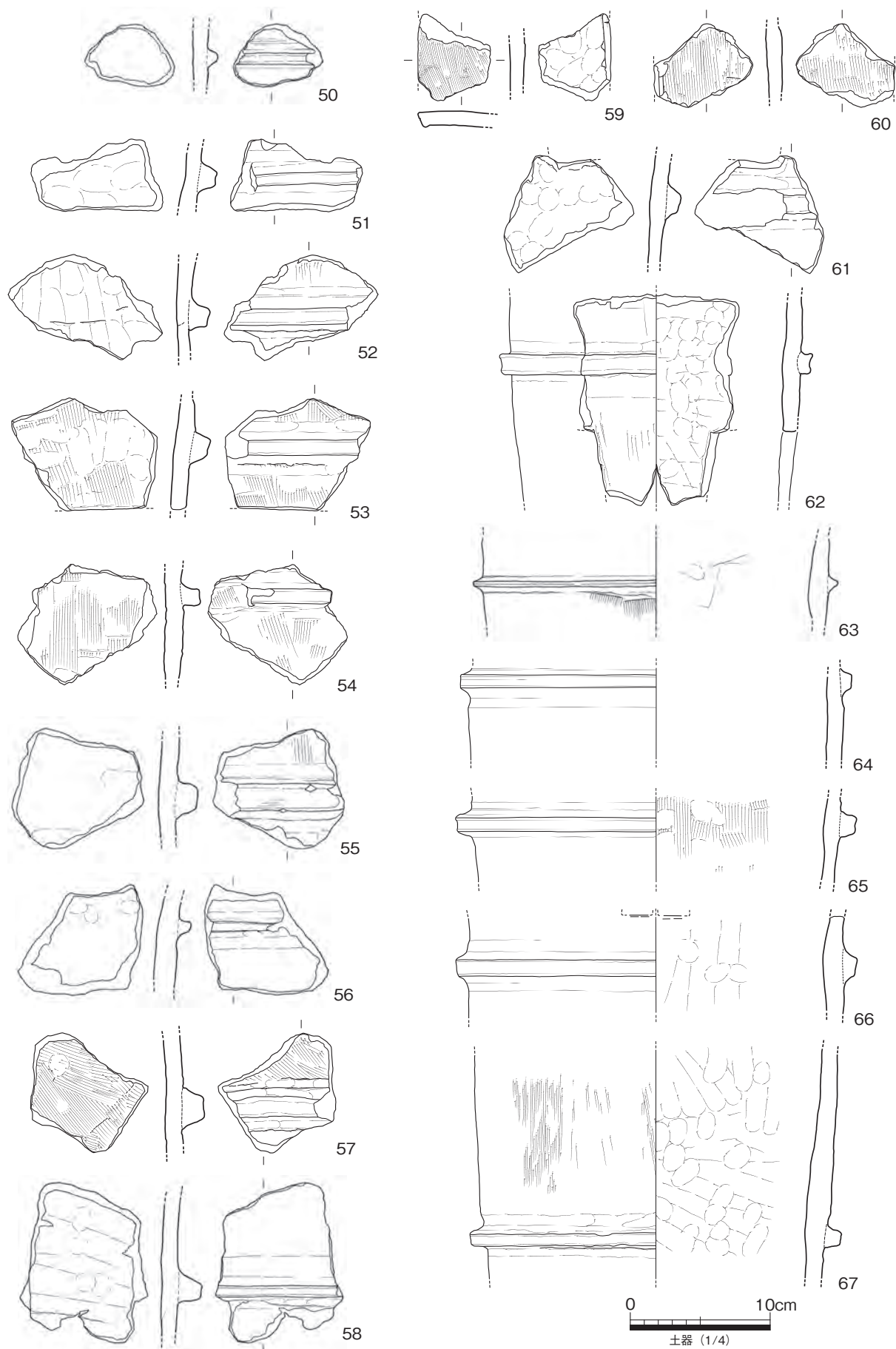
(国土地理院 20 万分 1 地勢図「徳島」・「剣山」・「岡山及丸亀」・「高知」・「窪川」・「広島」・「松山」・「宇和島」を 12.5% 縮小し、一部加工して使用)



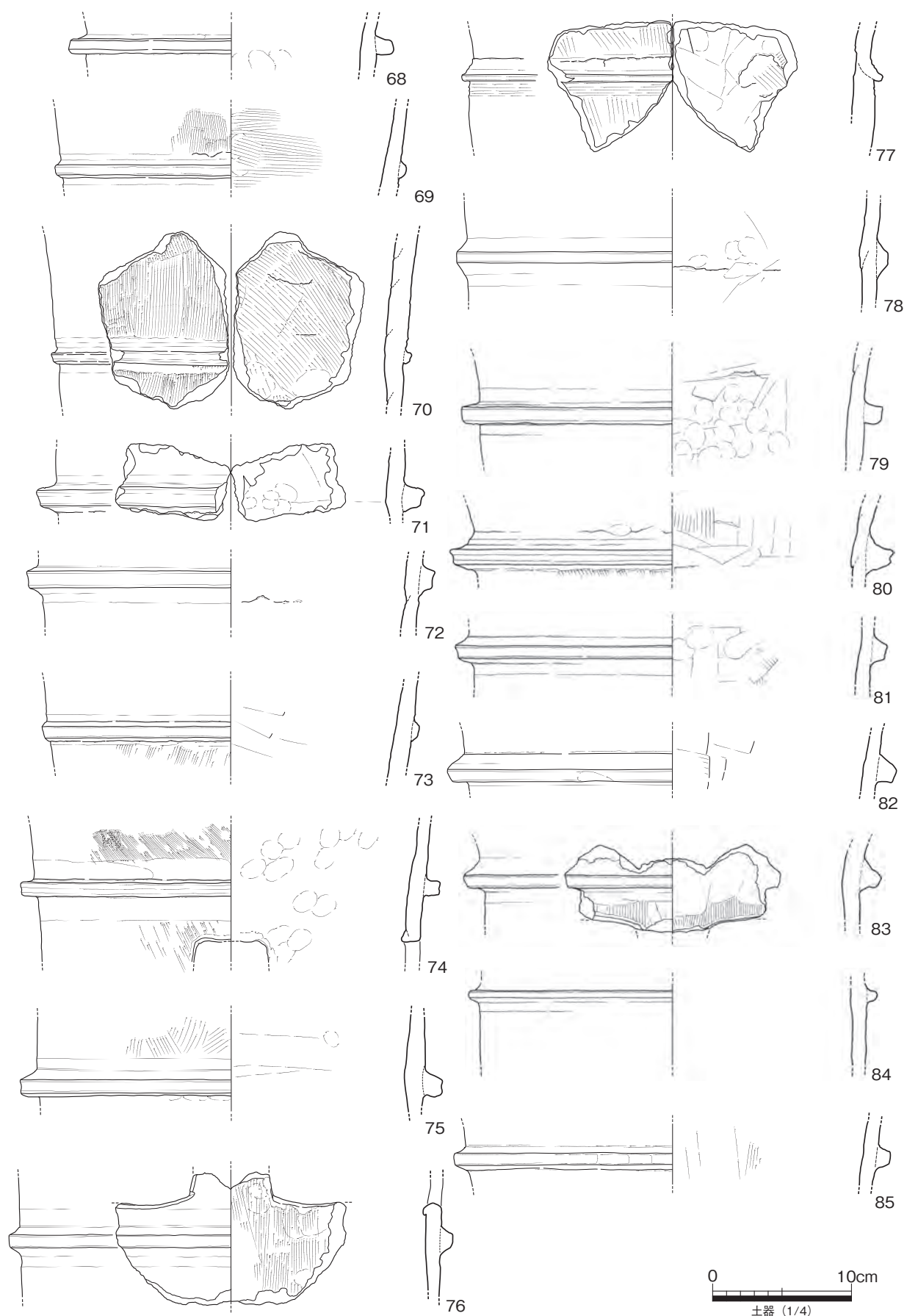
第 23 図 今岡古墳出土土器・円筒埴輪 1



第 24 図 今岡古墳出土円筒埴輪 2



第 25 図 今岡古墳出土円筒埴輪 3



第 26 図 今岡古墳出土円筒埴輪 4

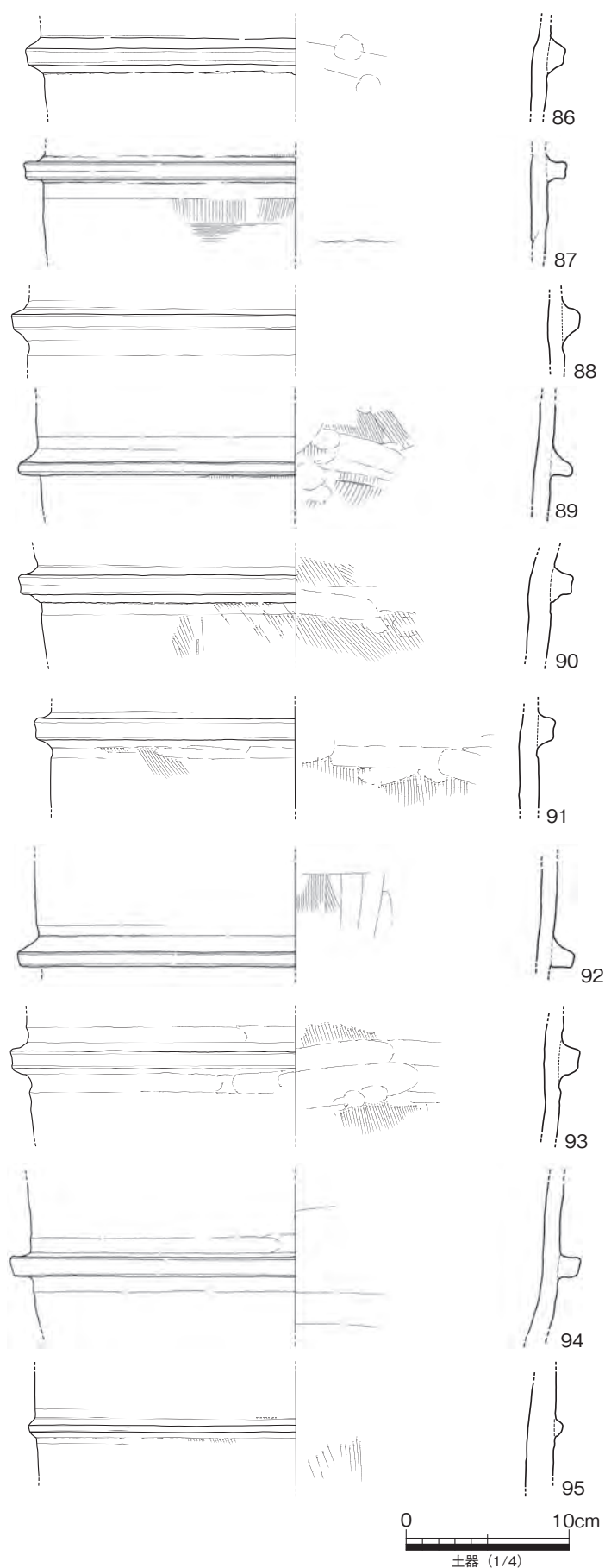
蔵者の高木憲了より伝聞した内容をまとめ公表している（高橋 1958）。高橋報告文に実測図や写真の掲載がなく、今回掲載した遺物が同一のものは確認がとれないが、参考までに以下示しておこう。

中央よりの後円部東部より出土したものに、土師器高杯、形象埴輪（家・盾・甲冑）がある。家には、鯉木 4 点と寄棟の屋根部分が出土していたようである。鯉木は、本報告掲載の 196～199 と考えてよいだろう。屋根の破片は、形状より 201 の可能性があるが、断定はできない。蓋形埴輪は 2 点の記載があり、1 点は後円部の東南、もう 1 点は前方部のくびれ部の中央やや下より採集されている。後円部出土の 1 点は、「上部の十字部先端が地表上に露出」とあることから、180 か 181 のどちらかである可能性が高い。また、鳥形埴輪は、昭和六年五月出土として、土製棺とともに写真が掲載されているが、出土位置は不明である。このほか、軀形埴輪の記載があるが、現在確認できない。不明な部分は多いが、主要な形象埴輪は、後円部頂部より出土していることが確認できる。

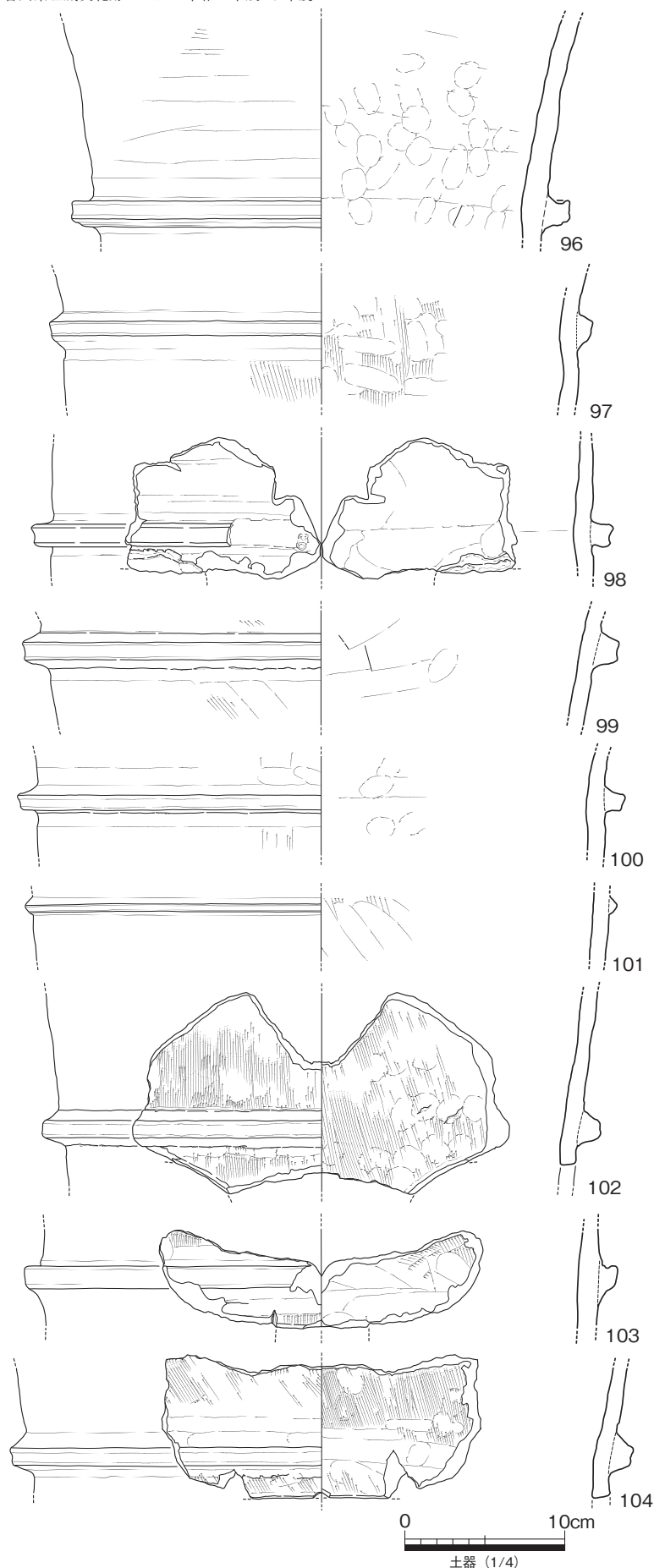
今回、御盥山古墳出土資料等を含め、第 2～18 図に示すように、227 点の土器、埴輪を掲載した。1～4 は、小型供献土器で、1 は精製の広口壺、2・3 は甕で、2 は在地東四国系（蔵本 1999）の甕口縁部小片、4 は高杯である。5 は東四国系壺形埴輪（讃岐系広口壺 b、蔵本 2004）の口縁部小片である。口縁端部の拡張は乏しく、新しい様相を示す。

埴輪には、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪（盾・蓋・甲冑・家・鶏・半裁器台形）がある。色調は明赤褐色を呈し、胎土中に中～粗粒の石英・長石粒を一定量含むものが大半を占める。雲母粒の有無により相違を認めるが、色調やその他鉱物等に大差は認められず、円筒・形象を含め、ほぼ同一の素地粘土を使用して製作された埴輪群である可能性が高い。

6～17 は円筒埴輪口縁部、18～104 は胴部、105～128 は同底部の破片である。全形が判明する資料はない。口径 30.6～39.0cm、底径 21.3～30.6cm を測り、小片からの復元値であるため断定は困難だが、S 型と M 型^{（註 1）}の 2 規格があった可能性が高い。口縁部高 13.6cm 1 点（17）が確認されたのみで、突帯間隔や底部高は不明。口縁部は、I b・I c・II a・II b・III 類がある。点数が乏しく、主体となる形態は特定できないが、III 類が含まれる点は留意しておきたい。突帯は、1・2 a・2 b・3 a・3 b・4 c 類があり、2 b・3 b 類が主体を占めるようだ。1 類とした 31・63、やや特異な形状の 77 は、円筒以外の埴輪の可能性が考えられる。突帯設定には、方形刺突技法（19・44・98）が用いられる。透孔は、長方形もしくは三角形（22・26・53・59～62・66・74・76・83・98・102～104）、円形（42）



第 27 図 今岡古墳出土円筒埴輪 5



第 28 図 今岡古墳出土土円筒埴輪 6

が認められ、長方形が主体を占める可能性が高い。また、底部透孔も 3 点 (111・115・127) 確認される。外面調整は、1 次調整のタテハケと、2 次調整として連続的なヨコハケ、ヨコ方向のナデ・板ナデが施され、ヨコハケの出現頻度は高いものではない。内面調整は、ハケ・ナデ・板ナデ調整が施され、ケズリ調整は認めない。

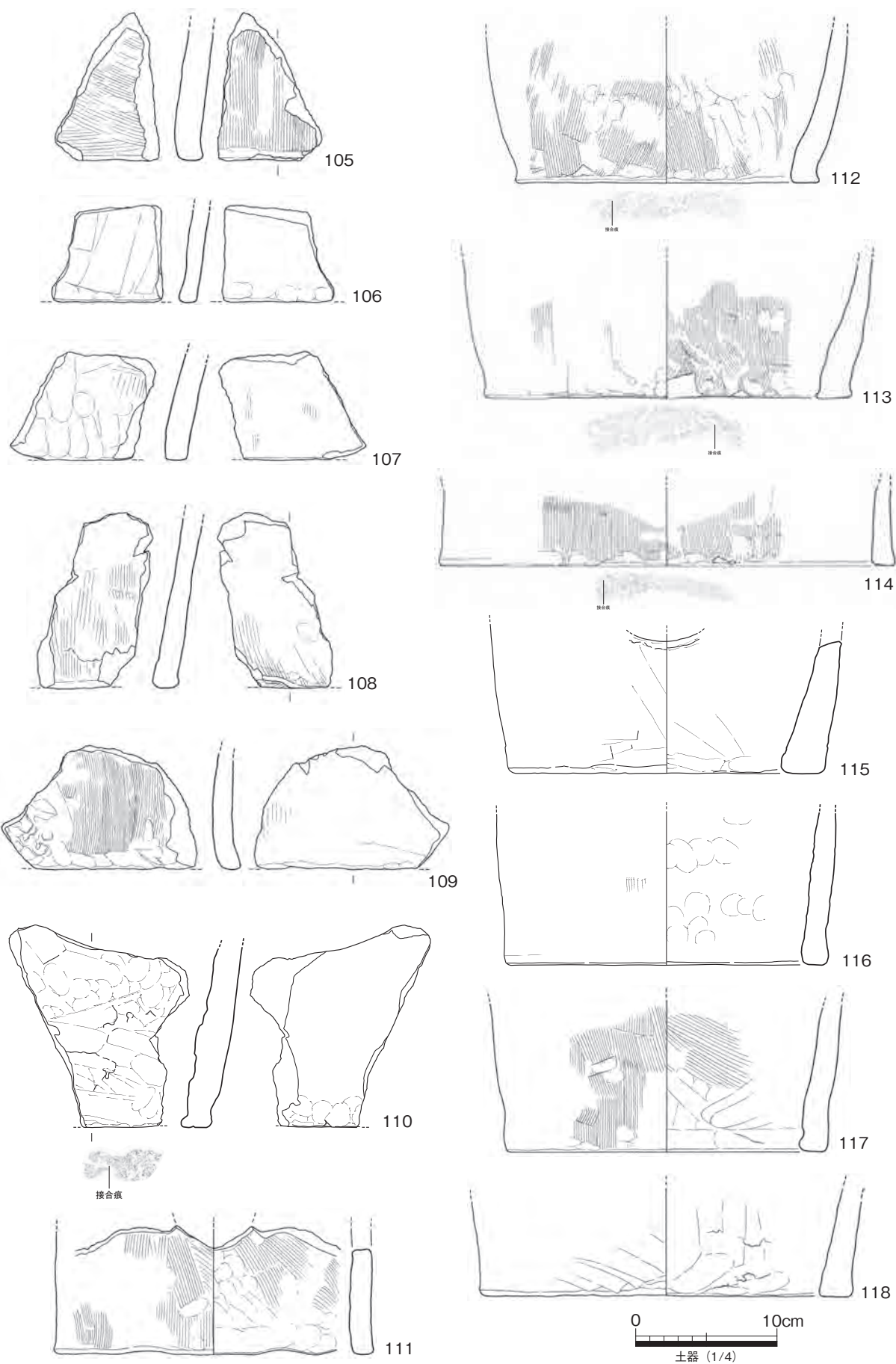
129～137 は朝顔形埴輪片である。口縁部はやや外反して、大きく開き、端部は矩形に収める。口頸部の成形は、頸部上端（突帯位置）まで成形した後、一度端面を形成し、その上面に粘土紐を接合して口縁部を成形、最後に突帯の粘土を貼付する。頸基部には、突帯を貼付する 135 と、それを欠く 136 の 2 者がある。

138～154 は、盾形埴輪とした。形象部表面を、ハケやナデ調整により平滑に整えた後線刻を施し、横断面が曲線を描き、端部が矩形となるものを盾形埴輪として報告する。しかし、小片の資料には、円筒埴輪や後述する家形埴輪が含まれる可能性は否定できない。

盾面は、綾杉文の外側に鋸歯文による外区を有する可能性のある 150 と、内・外区の区別のないものの 2 者がある。前者は中間西井坪遺跡に類例が見出せ、おそらく岡山県金蔵山古墳に近似する、1 類と 2 類の両者の特徴を共有する（高橋 1988）盾形埴輪の可能性がある。後者は、138・147・148・149・152・154 のように、周縁に綾杉文を配するものと、139・143・144 のように、単線もしくは複線による圏線を巡らせるのものの 2 者を認める。綾杉文や圏線内部は、破片資料のみであるため詳細は不明だが、単線の直線により内部を数区画に区分し、それぞれの区画内部には、斜線文を充填した角状の区画文 (152・154) や、直線と弧線を交互に配した直弧文状の文様 (151・153) が、それぞれランダムに配されていたようだ。

内区文様が鋸歯文や菱形文、格子文といった幾何学的な文様を使用しない点で、複線による S 字状の文様を連ねる徳島県大代古墳例^(註 2) や、スイズ貝を表現したとされる金蔵山古墳例、鋸歯状の区画内部を綾杉状の斜線で埋めた奈良県大阪里中遺跡第 4 次調査出土の資料（田原本町教育委員会 2007）等に通ずる意匠は認めるが、相違する点も多く、類似資料は管見では捕捉していない。

155～193 は、蓋形埴輪である。小栗氏



第 29 図 今岡古墳出土円筒埴輪 7



第 30 図 今岡古墳出土円筒埴輪 8

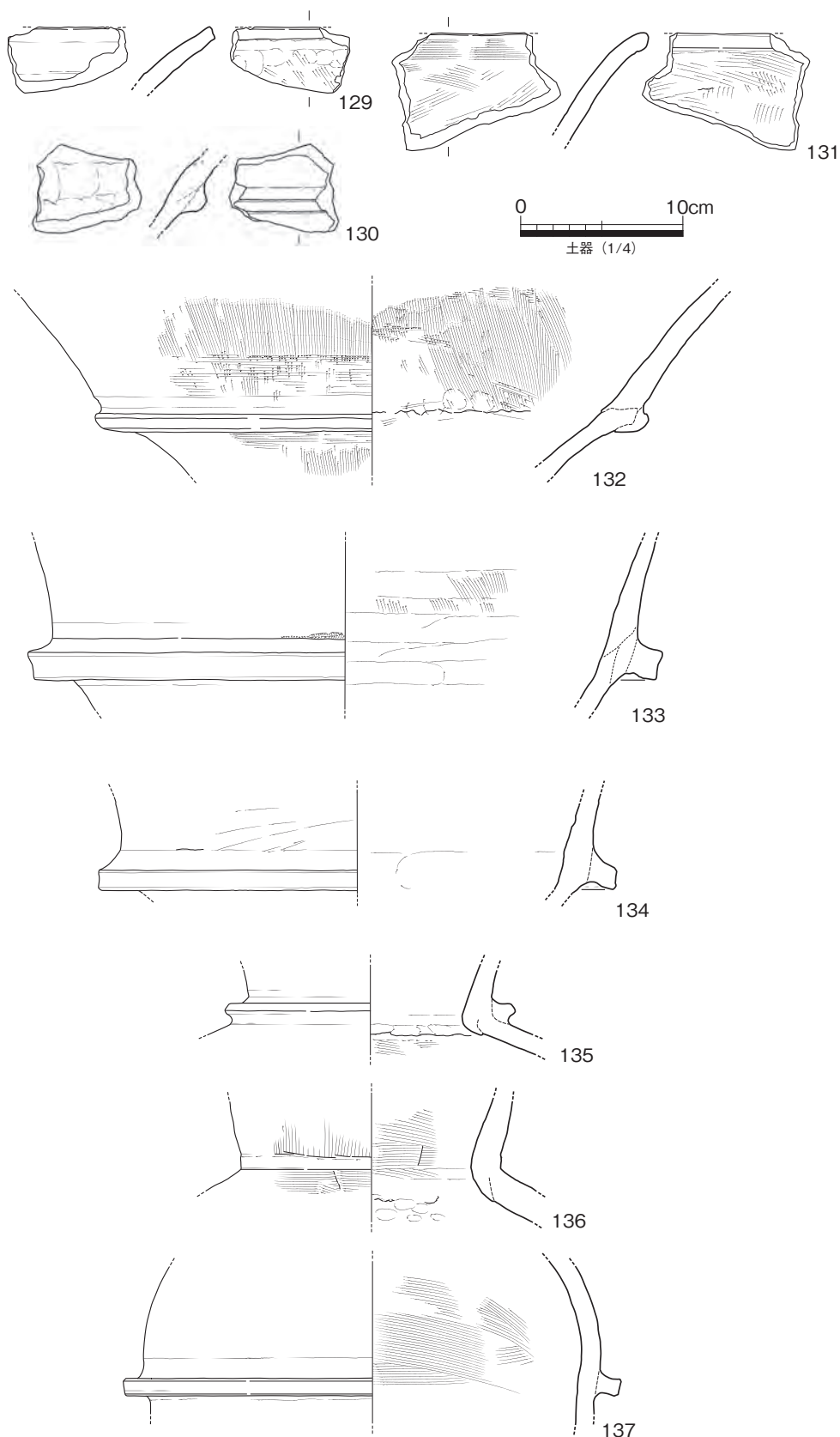
の有立飾無肋木式（小栗 2007、以下、蓋形埴輪各部の分類は小栗氏の分類案を用いる。）に分類され、後述する特徴より、同氏編年の 2 段階に位置付けるのが妥当であろう。155～179 は立ち飾り部の飾り板の小片である。飾り板頂部は直線的で、外

側縁は縦に短く、中央部には 172～175 等より矩形の透孔が穿たれるようだ。また透孔と外縁部の位置関係より、上下に 2 個の縁が付されていた可能性が考えられる。飾り板は、単線で輪郭を縁取る 155・157・169 等と、複線で縁取る 173～175 等

の2者があり、また鰭部には線刻を認めない。小片のため、断定はできないが、「用形文」 a 4 文様を基調とし、それに透孔を付加したものとする。以上の特徴より、立ち飾り部Ⅱ b 型式に分類される。

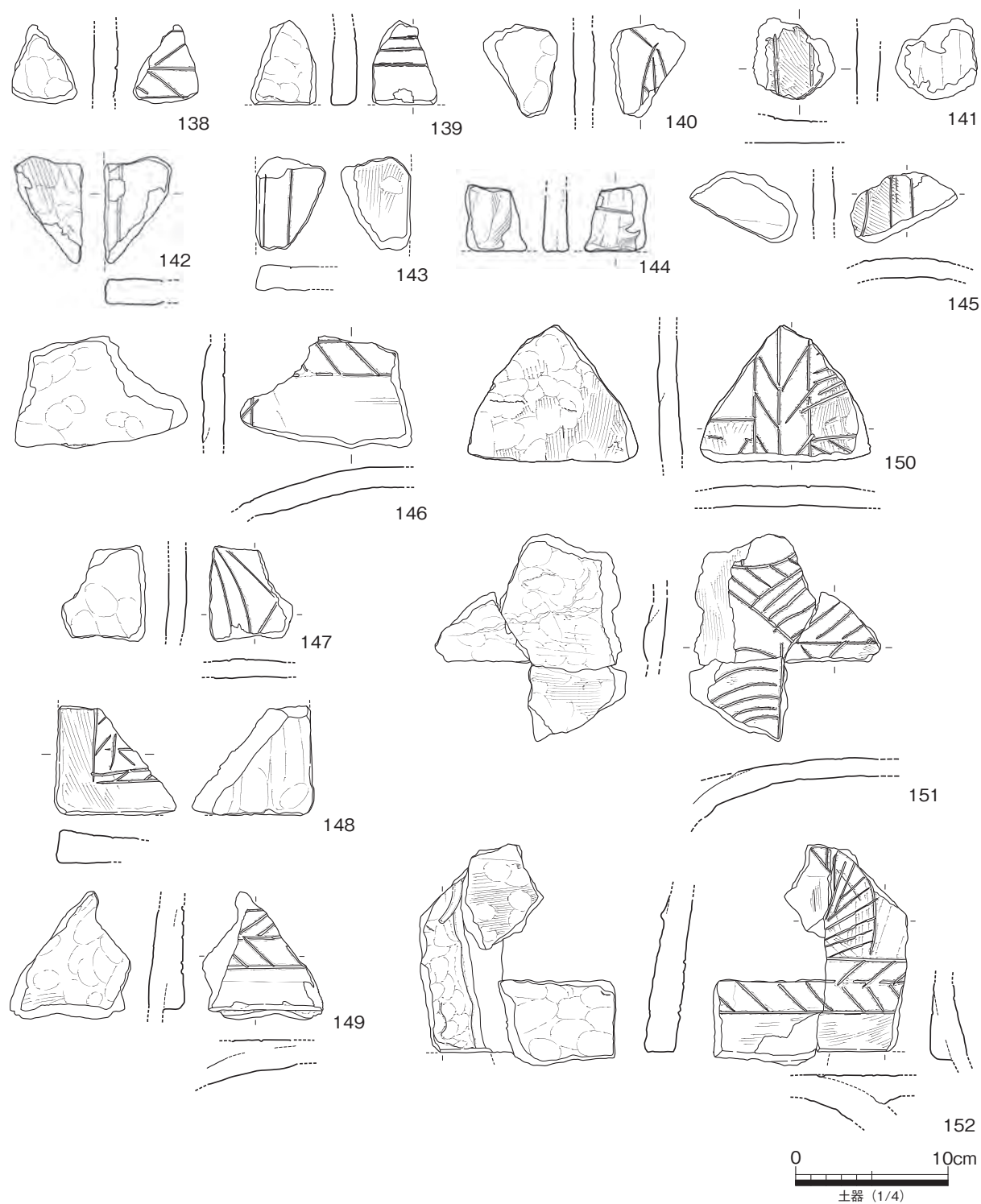
180・181 は、立ち飾り部の飾り板上半部を欠く破片である。ほぼ同形、同意匠の破片で、飾り板には、いずれも複線による線刻を認める。円筒形の軸部は粘土紐を巻き上げて成形し、上端に円環状の飾り板受け部粘土を接合する。飾り板受け部は、板状を呈し、受け口状とならない点に特徴を認める。その上面に飾り板を接合するのだが、その接合痕より、4枚の板材をそれぞれ十字形に貼り合わせたのではなく、1枚の大きな板状粘土をまず接合し、それに直交するように2枚の粘土板を接合して成形している。飾り板、同受部、軸部に、荷重による歪みはほとんど認められないことから、各部接合後に一定の乾燥を経て、次の工程をおこなった可能性が考えられる。また、鰭の成形や透孔の穿孔、線刻も、乾燥後に施されたと考えられる。

182～194 は、軸受部～笠部の小片である。軸受部上端は突帯を貼付して肥厚し、古い様相を有する。軸受部下端突帯は、主に笠部に幅広の突帯を貼付する。笠部は中位に突帯を有し、下半部に単線による布張り表現を施す 191 と、無文の 192～194 がある。



第 31 図 今岡古墳出土朝顔形埴輪

笠部端は矩形に収める、単純端部である。笠部はB類に分類されるが、小片のため細別は困難である。



第 32 図 今岡古墳出土盾形埴輪 1

195 は、甲冑形埴輪草摺の小片と考える。緩やかに外反して開き、端部は矩形に収める。外面は、3 条 1 組の沈線を縦に一定の間隔で配して区分し、その間を 6 条以上の横方向の平行沈線で充填する。草製草摺の刺繍を表現したとされる鋸歯文等の装飾を認めず、鉄製草摺を模した可能性も考えられる。施文は単純化しており、1 類 2 式か 2 類（高橋 1988）に分類されよう。

196 ～ 212 は、家形埴輪である。202 ・ 204 ・ 205 は、小片

のため他の器種となる可能性も残る。196 ～ 199 は堅魚木である。いずれも中央部がやや細く、両端部が緩やかに肥厚する鼓状を呈しており、端面中央には径 2 ～ 4 mm の円形の刺突を施す。199 のみ他より若干大きく、規模の異なる 2 棟の建物の棟を飾っていた可能性も考えられる。200 ・ 201 は壁体上部と屋根部の破片である。200 は軒の出が乏しく、屋根が急傾斜で、妻部とみられる左端図の形状より切妻造であった可能性が、201 は逆

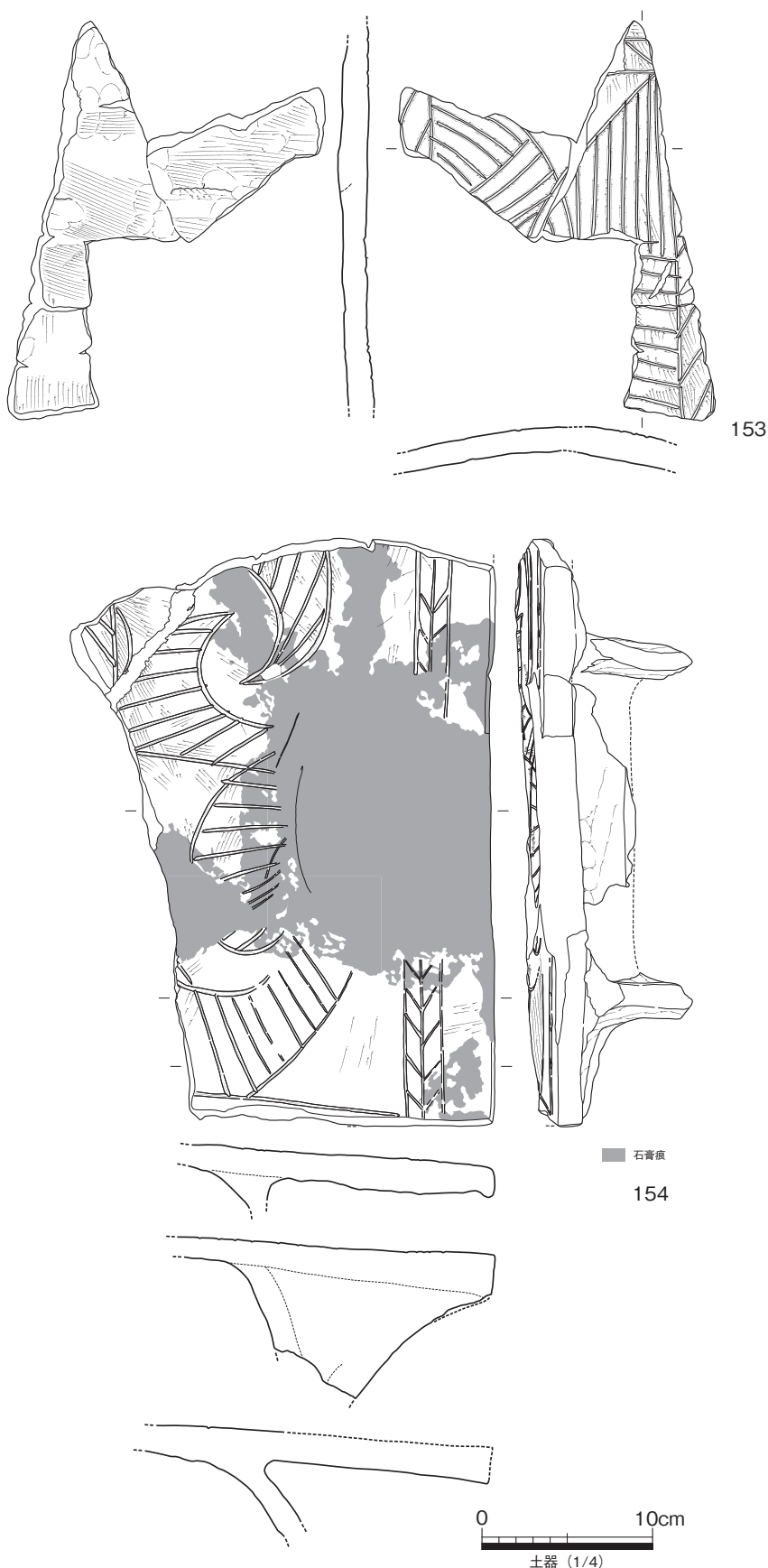
に屋根の傾斜が緩やかで、寄棟か入母屋造の可能性がそれぞれ考えられ、屋根形状の異なる複数の建物が用意されていた可能性が考えられる。いずれも屋根と壁体との接合は、青柳氏の分類の①の手法による（青柳 1995）。

柱の表現は 200・201・206・211 で確認され、いずれも壁体に厚さ約 5mm の粘土を貼付した角柱形である。しかし、窓か入口とみられる端部に梯子状の線刻を有する 202 が家形埴輪だとすると、刻線形が含まれる可能性がある。

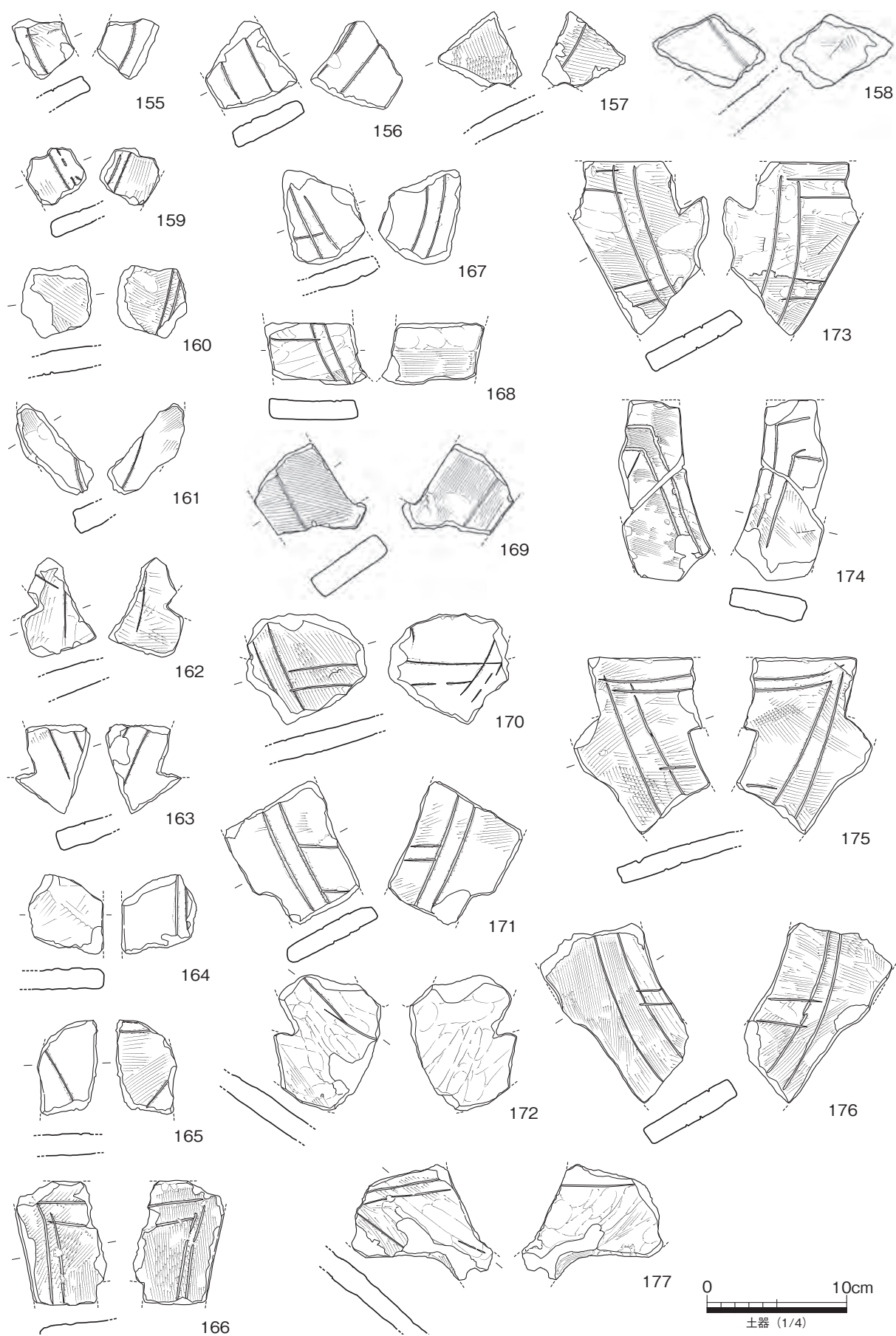
窓は 200・202・204・207・211 で確認され、いずれも矩形である。211 では、窓の上端と下端にそれぞれ柱を貫いて平行線が引かれ、柱部では複線となっている。おそらく長押を表現したものと思われる。

205～212 は、基部及び裾廻り突帯の破片の可能性を考え図化した。205・212 の外面、裾廻り突帯の剥離部には、凹線技法が観察される。裾廻り突帯には、断面形が I 型となるもの（206・207）と、L 字形となるもの（208～211）の 2 者を認める。212 の基部は、他の 3 例（205・206・211）と比べてやや高く、下端部に矩形の切り込みを認める。

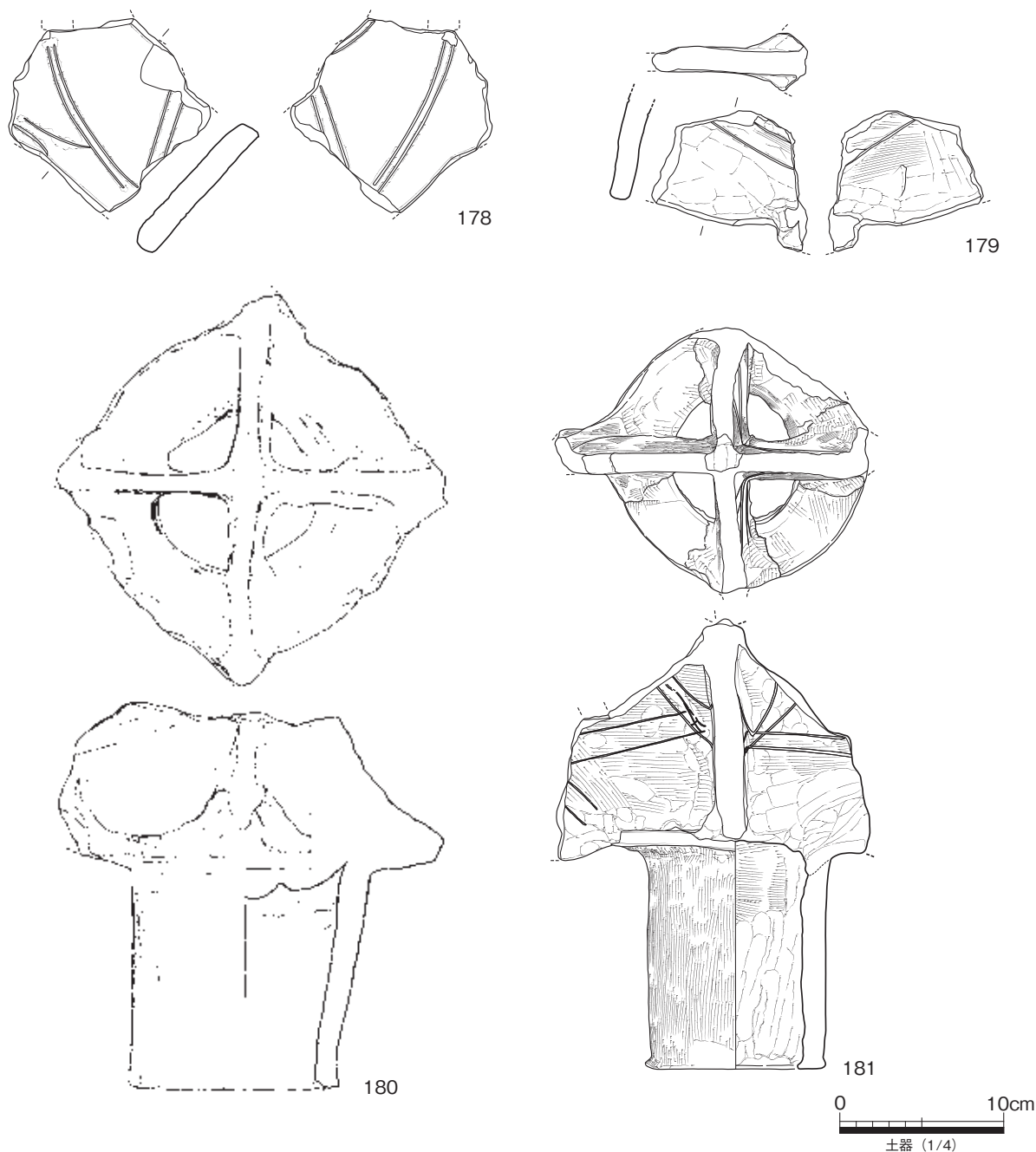
213～216 は、半裁器台形埴輪と考え図示した。本地域では、本埴以外には中間西井坪遺跡（香川県教育委員会 1996）以外で出土例は報告されておらず、中間西井坪遺跡が本埴の埴輪生産遺跡であったという指摘（大久保 1996）と矛盾しない。また、本埴輪が実際に古墳で使用されていたことを実証する点でも重要であろう。具体的な使用方法是不明で、今後の調査により原位置を保つ資料の出土に期待したい。213 は、緩やかに外反して開く形状より、本器種に含め図示したが、幅広の矩形の透孔を穿つ例は中間西井坪遺跡にはなく、他の器種となる可能性も考えられる。



第 33 図 今岡古墳出土盾形埴輪 2



第 34 図 今岡古墳出土蓋形埴輪 1



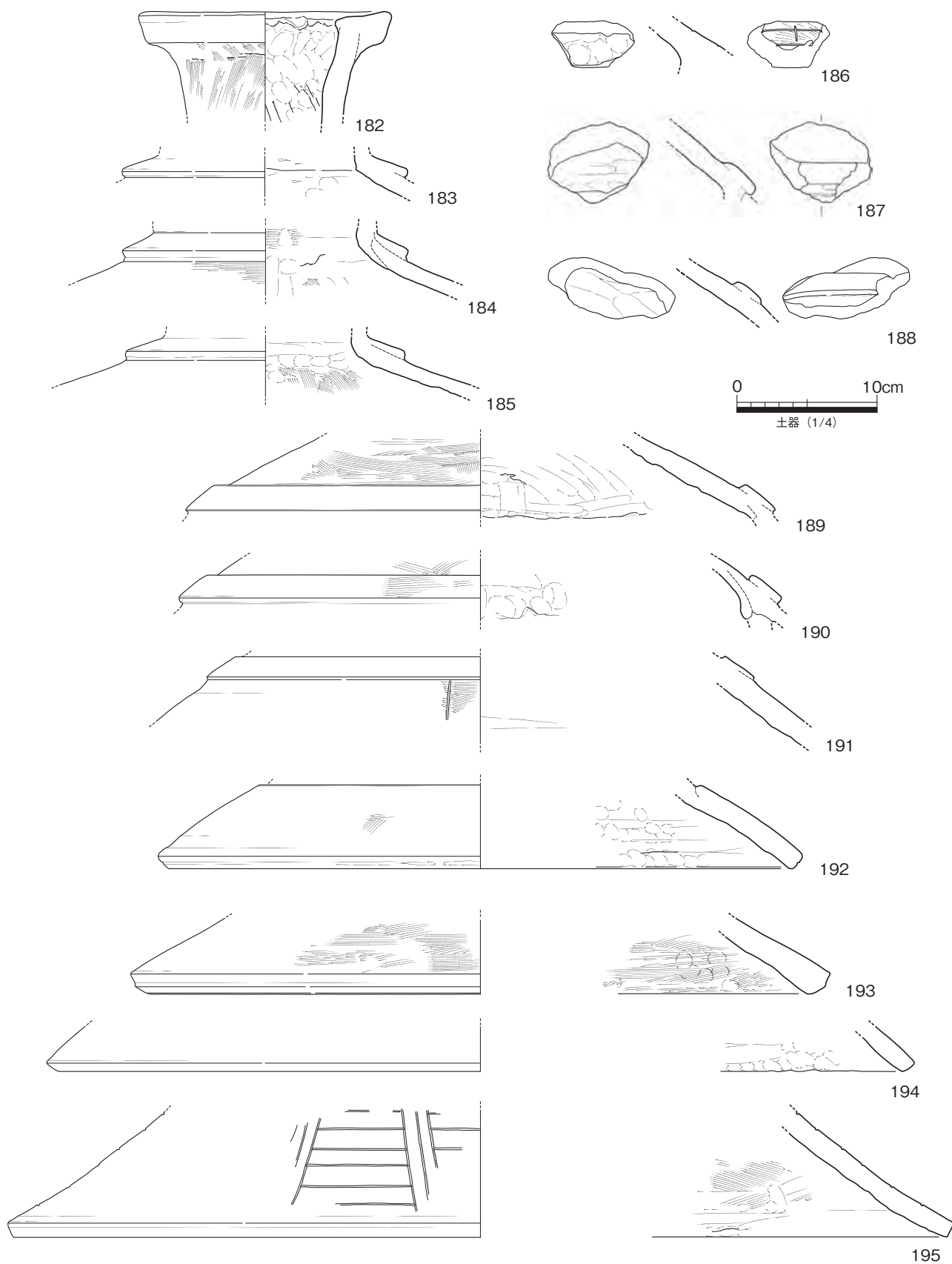
第35図 今岡古墳出土蓋形埴輪2

217 は、鳥形埴輪の脚部片で、長径 6.5cm、短径 6.2cm の円筒形の止まり木に掴まった右脚部の小片である。第 2～4 趾は止まり木前面に板状の粘土を被せて、3 条の線刻により表現し、第 1 趾は裏面に柱状の粘土を貼付する。第 2 趾は、第 3・4 趾と比べて幅が狭く表現される。宮内庁所蔵の大阪府太田茶臼山古墳出土の鶏形埴輪にみられるように、幅の広く表現された第 3・4 趾より、水掻きの可能性も考えられるが、断定はできない。鶏の可能性も考慮して、鳥形埴輪として報告しておく。今後の調査により頭部等が出土すれば、判断できると考える。なお止まり木下端には、円筒部に貼付された幅約 2cm の突帯の一部が残存する。なお残存する突帯より、円筒部は径 39cm 前後に復元

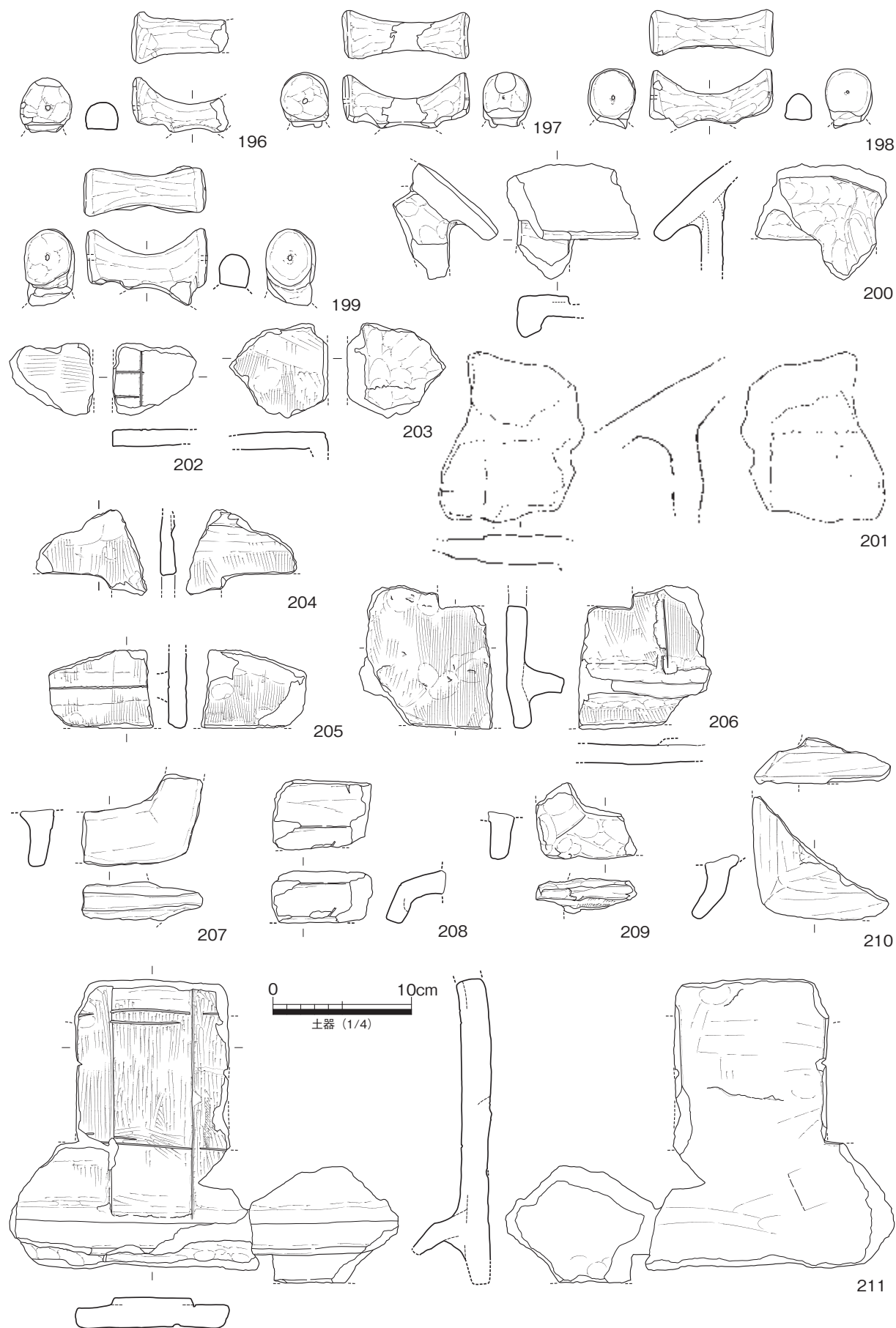
される。

一方奈良県纏向遺跡坂田地区出土の鶏形埴輪では、各趾は立体的に表現され、古式の様相を示す。その後、本例のような各趾を線刻で表現するものを経て、趾の表現を欠くものや、脚部全体を線刻で表現するものへと、大きくは変遷するとみられる。

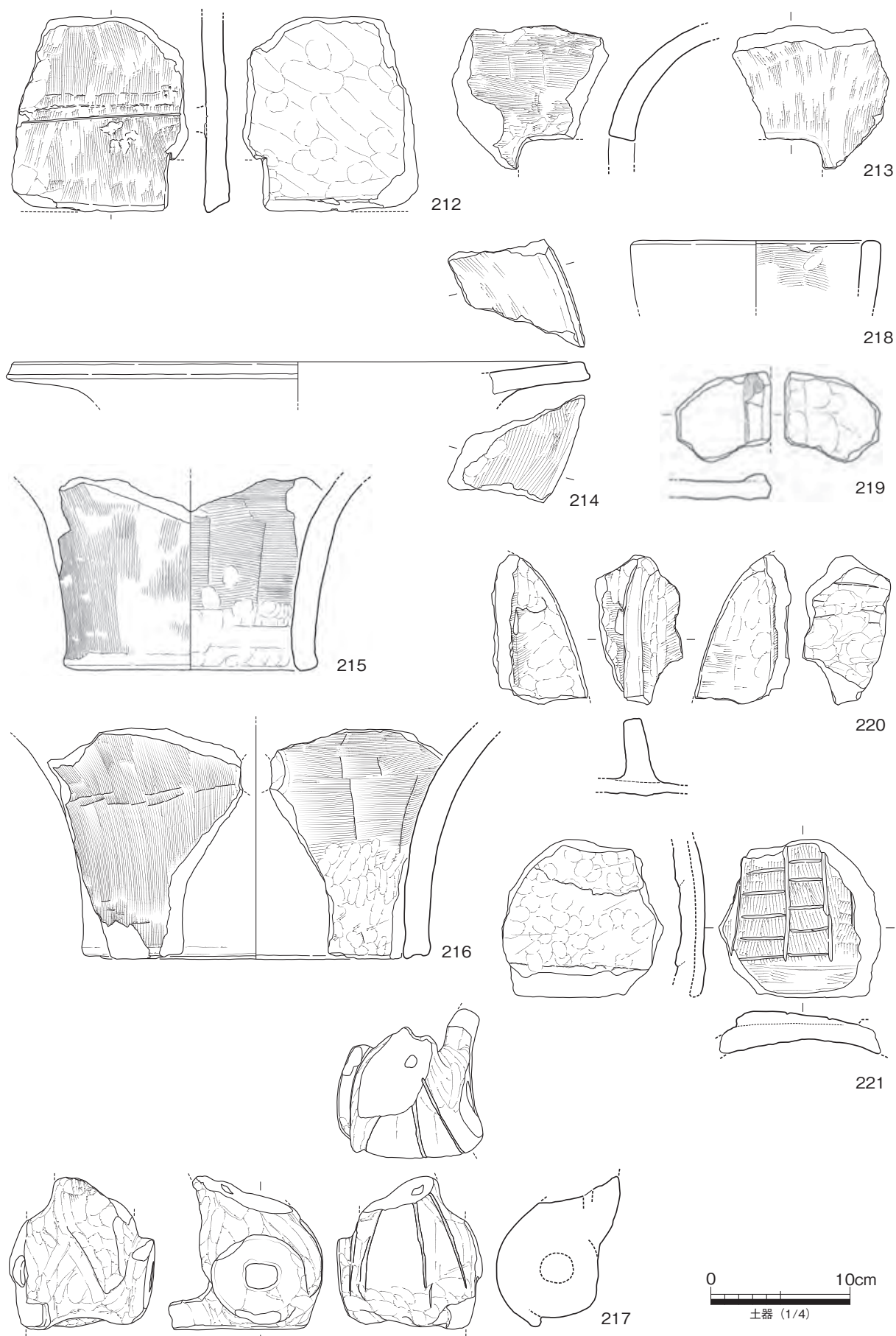
218～221 は、器種不詳の形象埴輪である。221 は、幅 3cm 程の粘土紐を積み上げて半球状の器体を成形し、その外面側に厚さ 1cm ほどの粘土板を貼付する。外面はハケ調整により基面を整えた後、単線による沈線で方格を刻み、右図下端に低い矩形の突帯を配し、右端にも同様の突帯で区画していた可能性がある。粘土板は器体全面を覆うわけではなく、図左端は矩形に



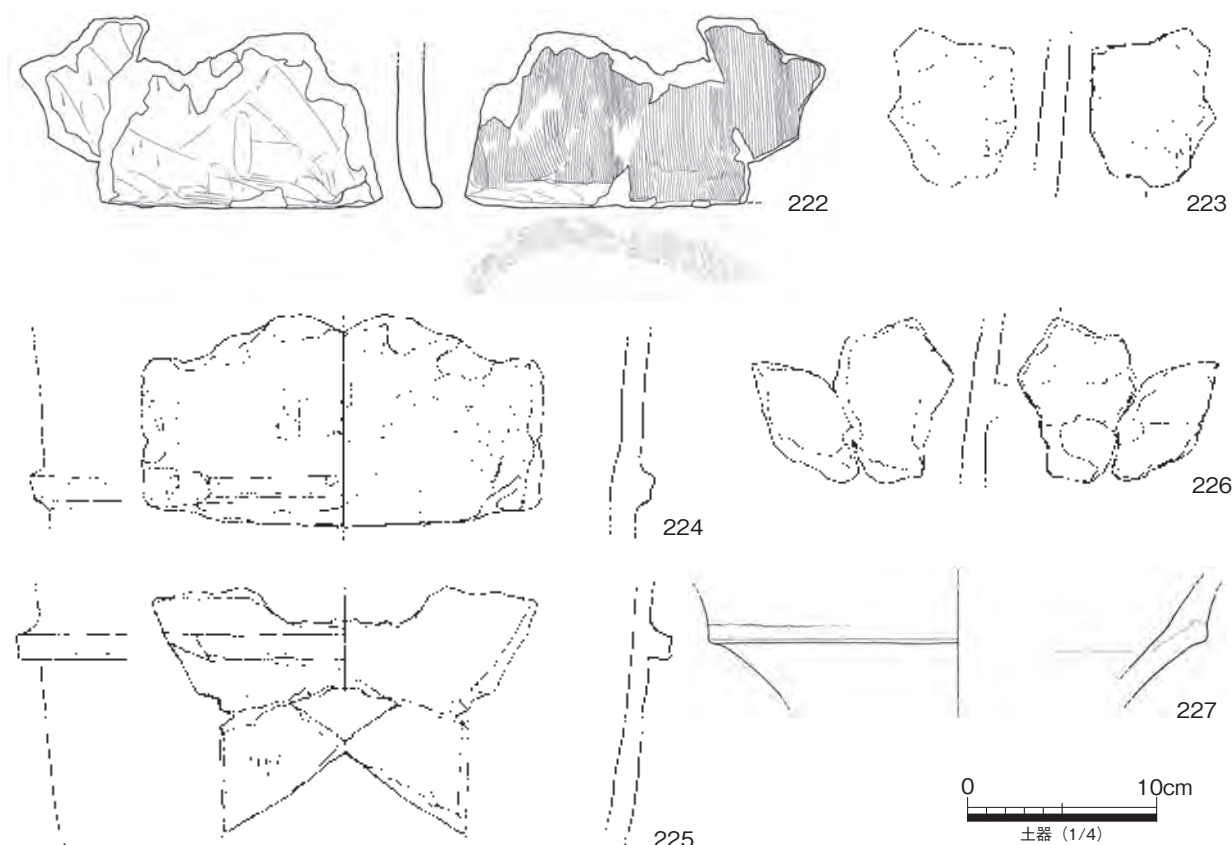
第 36 図 今岡古墳出土蓋形埴輪 3・甲冑形埴輪



第 37 図 今岡古墳出土家形埴輪 1



第 38 図 今岡古墳出土家形埴輪 2・半裁器台形埴輪・鳥形埴輪・不明形象埴輪



第39図 出土地不明の円筒埴輪・朝顔形埴輪

切り離して、器体とは面を違えるように立体的に成形される。甲冑形埴輪の可能性も考えたが、小片のため部位を特定できず、不明埴輪として報告しておく。

第37図は、当センター所蔵資料のうち、古墳時代前半期に位置付けることが可能な埴輪資料を図示した。222は、御盥山古墳出土資料とされる円筒埴輪の底部片である。胎土中に角閃石や雲母細粒を一定量含み、同種胎土を有する埴輪は、本地域では石清尾山古墳群と横立山経塚古墳等、高松平野中・西部の古墳からしか出土が知られていない。本資料も、これら地域の出土資料が混在した可能性が考えられる。224は岩崎山4号墳出土とされる円筒埴輪である。突帯が剥離した胴部には、方形刺突痕が認められ、内外面の調整や突帯形状からも、岩崎山4号墳出土資料と考えて矛盾はない。225は出土古墳不明資料であるが、胎土は222と近似しており、高松平野中・西部の古墳出土資料と考えられる。223は赤山古墳出土とされる円筒埴輪の小片である。226は三ツ池出土とされる円筒埴輪胴部片である。突帯剥離跡には、凹線技法が確認される。227は、津頭東古墳出土とされる壺形埴輪の口縁部の小片である。

3. 四国地域における前半期古墳の埴輪編年

以下では、四国地域における古墳時代前半期の円筒埴輪を中心に、その編年上の検討を行うこととした^(註3)。今回検討する資料は、有黒斑の円筒埴輪であり、川西編年1～3期を中心とし、一部4期の埴輪も含む(川西1988)。

当該時期の円筒埴輪については、近年の調査により資料が増加してきたが、全体形状が判明する資料はごく一部に限られる。したがって、以下に検討した編年の位置関係は、今後の良好な資料の出土により、変更される可能性があり、今後の課題としておきたい。また、各期各段階の編年の指標は、埴輪検討会による畿内編年(埴輪検討会2003)を援用することとし、可能な限り両地域の埴輪の属性をすり合わせることで、併行関係の追究に配慮したものである。方法論として課題のあることは承知しているが、埴輪の製作や加飾に係る技術的な手法が、畿内において生み出され、地方に専ら拡散していくものであることを考えれば、試論として提出することは許容されるのではないかと思う。

I期1～2段階

本期には、器台系埴輪は本地域には導入されず、壺形埴輪単独による墳丘儀礼がなされた段階である。本地域の壺形埴輪については、かつて考えをまとめたことがあり(蔵本2004・2008)、その後、柴田昌司(2015)や栗林誠治(栗林2015)、信里芳紀(信里2014)、松本和彦(松本2010・2015)等により、研究が進められている^(註4)。壺形埴輪については、それら研究を参照されたい。ここでは、器台系埴輪の導入が、畿内や播磨、備前、備中地域と比して大きく遅れ、そこに相対的な階層表現の可能性が潜在することを指摘しておきたい。

I 期 3 段階

前段階以来の壺形埴輪単独による墳丘祭祀は継続される^(註5)一方、本期においてはじめて、器台系埴輪が墳長約 45 m のやや特異な積石塚前方後円墳である香川県船岡山古墳（高松市教育委員会 2009・2010・2013）において導入される。大きな画期を本段階に設定することができる。

船岡山古墳の埴輪については、報告書が未刊のため、詳細は明らかではない。破片資料で全形が復元されたものはないようであり、3 条突帯で、突帯間隔 17cm 前後、底部高 23.5cm 前後のものがある。外面はタテハケ、内面はケズリ調整され、巴形の透孔が確認される。

船岡山古墳の埴輪については、その形態的特徴から、次段階の高松市茶臼山古墳へ系譜が継続することが指摘されてきた（松本 2010・大久保 2013・信里 2014）。私もこの考えを支持したい。ここで問題となるのが、この系譜がどこに辿れるかなのだが、筆者は以前、後出する高松市茶臼山古墳の埴輪を整理した際に、大阪府將軍山古墳の器台系埴輪に求めうると想定した。しかし、これについては口縁部下半の形態に相違が大きく、撤回したい。突帯間隔の設定に刺突技法が用いられていることや、何より器台形状を呈することから、その系譜が畿内地域に求められることは間違いないだろう。

船岡山古墳資料では、受口状口縁部の下半、最上位突帯との間は、ふくらみを有しつつも内傾した、高さ 4 cm 程の立ち上がり部を認める。この部分の内外面の調整は、胴部と同様にハケとケズリが施され、最上位突帯より上位にあることから口縁部に含め考えたが、ヨコナデ調整がなされる口縁部とは別の部位として製作されたことは明らかであろう。結論から示せば、この部分は朝顔形埴輪の体部を意識したものであると思われる。頸基部が強く括れることも、矛盾するものではない。しかし一方で、頸基部の突帯を欠き、明確な頸部も造作しない点で、器台系埴輪との親縁性も認められる。

つまり、船岡山古墳の埴輪は、器台系埴輪に朝顔形埴輪の要素を付加して成立したものと評価したい。頸基部突帯の欠落は、在地系譜の二重口縁壺をモチーフとした可能性に求められよう。奈良県東殿塚古墳や同鴨都波古墳群埴輪棺にみられる器台系埴輪と朝顔形埴輪を、一定度の製作技術を習熟した工人が、一体としてアレンジして成立したのが、本埴輪ではなかろうかと想像する。現状では畿内地域に直接的な系譜関係は見出し得ず、モチーフや製作技術は畿内地域に淵源を求められるものの、それらに精通した在地の工人による製作の可能性が想定される。

I 期 4 段階

器台系埴輪は、これまで明らかにされてきたように高松市茶臼山古墳（蔵本 2007、香川県教育委員会 2014）のみが知られ、壺形埴輪単独による儀礼も継続^(註6)する。調査の進展による資料の増加の可能性はあるものの、こうした状況が大きく変化するとは思われない。

高松市茶臼山古墳は、小片のみで全体形状は不詳ながら、受口状口縁を有する朝顔形埴輪が前方部を中心に複数個体供献さ

れていた（蔵本 2007、香川県教育委員会 2014）。既述したように、前段階の船岡山古墳の埴輪の系譜に直接繋がり、継続して在地での受容が確認されたことは重要であろう。しかし、同種の埴輪は現状では 2 基のみで、後続はせず、周辺の同時期の埴輪儀礼に影響を及ぼした可能性は認めがたい。

I 期 5 段階

本期に至り、ようやく定型化した円筒埴輪が本地域に導入される。つまり、快天山古墳（綾歌町教育委員会 2002・2004）と赤山古墳（さぬき市教育委員会 2013）出土埴輪がそれであり、本地域の埴輪祭祀の大きな画期を、本段階に求めよう。快天山古墳にみられる 3 段築のテラス面の整備は、こうした円筒埴輪導入の前提となるものと考ええる。また、愛媛県相の谷古墳出土資料（愛媛県歴史文化博物館 2007）も、本時期に位置付けられる可能性がある。こうした跛行的な分布（第 20 図）には、特殊な事情があった可能性が予想される。

上記 3 基の古墳は、いずれも前方後円墳で、とくに快天山古墳は墳長約 100 m の当該期としては四国最大規模墳である。また、快天山古墳の埋葬施設には、鷲ノ山産の削り抜き式石棺が、赤山古墳には火山産の石棺がそれぞれ用いられ、前者は大阪府玉手山古墳群周辺に、後者は奈良県佐紀陵山古墳への石棺や石材の搬出が確認され、そうした石棺等の搬出を通じた畿内勢力との関係において、埴輪が導入された経緯が説明されてきた。

また、快天山古墳では在地系譜の壺形埴輪が出土し、新たに導入された円筒埴輪祭祀に、在地系譜の壺形埴輪祭祀が併存していることが確認される。一方で、壺形埴輪祭祀のみを執り行った古墳も存在^(註7)し、円筒埴輪供献の有無による階層化がより一層顕在化する。そうした在地での階層化の背景には、円筒埴輪祭祀を介した畿内地域の集団との連携といった、政治的な関係として理解される可能性をもつ。

快天山古墳の円筒埴輪は、大阪府御旅山古墳や同玉手山 1 号墳の円筒埴輪と、形態的特徴が類似することが指摘され（廣瀬 2010・松本 2010）てきた。この点は重要で、おそらくは畿内の埴輪工人が直接、同墳の埴輪生産に関与した可能性を考える根拠となる。また、上記した 3 基の古墳の埴輪の内容はそれぞれ相違し、畿内の形象埴輪を含めた埴輪の様式がパッケージ化されて各地へと伝播したのではなく、それぞれの古墳の被葬者と畿内の集団との個別の結びつきのなかで、各々個別に埴輪が導入されたことを示していよう。

しかし、そうした埴輪の系譜関係を、直接時間的關係に置き換えることは困難なようである。今回、快天山古墳出土資料を詳細に観察した結果、後述するように御旅山古墳や玉手山 1 号墳よりやや後出する可能性が考えられるに至り、当該期の資料として位置付けられると考えた。しかし、全形が判明する資料はなく、公表された資料も一部にとどまるため、今後資料の整理が進めば、時期が遡る可能性も否定できず、今後の課題としておきたい。

快天山古墳の円筒埴輪は、口径 32 ～ 45cm、底径 24 ～ 42cm をそれぞれ測り、底径からは L 型の資料も含まれる可能性はあ

るが、小片からの復元値でもあり、断定はできない。M型の資料が大半を占めると考える。口縁部はほぼⅡa類に限られ、端部形状に若干の個体差を認める。突帯は1・2a・3a類があり、突帯高は1.0cmを超える高いものが多い。突帯間隔の設定には、刺突技法が確認される。外面調整はタテハケで、口縁部にヨコナデを加えるものが多い。内面調整は、口縁部にヨコハケを、胴部はケズリ調整が卓越し、ナデやハケ調整を施すものもある。底部は、ハケやナデ調整がやや多数を占める可能性がある。透孔は、口縁部と底部を除く胴部各段に穿たれている可能性が高く、方形が主体を占めるようであり、三角形や円ないし半円形を認める。各段の穿孔数は、4孔を基本として5孔も一定数認める（松本2010）。

各部位の割付は、口縁部高は4.0cm前後、5.2cm前後、6.4cm前後、7.2cm前後、8.0cm前後、9.2cm前後とややばらつき、個体数が乏しいため、現状ではこの中から一定のまとまりを設定することが困難である。突帯間隔は12.5cm前後と、14.5cm前後、16.0cmの概ね3規格にまとまるようである。底部高は19.2cmのものが1点のみみられる。口縁部高が4cmの個体は、胴部最上段の突帯間隔が、14.5～15.0cmの間に納まる可能性が高く、その和は18.5～19.0cmと、口縁部高9.2cm前後の2倍で、底部高19.2cmに近い。このことは鐘方氏が、「Ⅱ期の割付方式との関連性を看取できる」とする（鐘方2003）奈良県新山古墳周辺埴輪棺例に倣ったものである可能性があり、この点を重視して本段階に位置付ける。透孔に円形ないしは半円形が含まれることも、その可能性を示唆するものと思われる。

赤山古墳は、円筒埴輪のみ出土している。いずれも小片のため、全形、口縁部高、突帯間隔等は不明である。底径は22.4cmのS型と、胴部径34.6cmのM型の2規格があるが、小片のため規格の不明な資料が大半を占める。突帯は、突帯高1.1～1.6cmの2a類が主体を占め、1類が少数含まれる。突帯間隔の設定には、方形刺突が採用される。透孔は、方形、三角形、凸形が認められ、円形は含まれない可能性が高い。小片のため、三角形なのか方形なのか判断できない資料が多い。外面調整は、タテハケが主体を占め、1点のみA種ヨコハケ調整を認める。内面は、ケズリ調整が主体で、ハケ調整が少数含まれる。

資料の内容から、断定的なことは避けたいが、Ca種ヨコハケの不在、突帯間隔の設定での凹線技法の不在、突帯が後述する岩崎山4号墳資料と比してやや古相を呈すること、透孔に円形のものが認められないことより、岩崎山4号墳資料よりは先行する可能性が高く、本期に位置付けた。今後の資料の増加を待って、検証する必要がある。また、報告書でも触れられているように、両古墳間には凸形透孔の共有等、埴輪生産に同一系譜の工人集団が関与した可能性が高く、おそらくは畿内集団が、津田湾周辺の古墳の築造に際して、継続的に技術的支援を行っていた可能性が高いと考えられる。

相の谷1号墳は、円筒埴輪と朝顔形埴輪が出土している。快天山古墳同様、口縁部高4～5cmの短小口縁のものを認める。突帯間隔、底部高は不明。突帯は1類ないし3a類があり、突

出度の高いものが多い。外面調整は、タテ・ナナメハケとヨコハケがあり、後者の頻度が高い点にやや後出する要素を認める。内面調整は、ハケとケズリ調整がある。透孔は方形に限られるようだ。また、胴部外面に鋸歯文等の線刻を有するものも多く認める。

朝顔形埴輪は、壺体部と円筒部の接合部の突帯が受口状を呈するとみられ、奈良県東殿塚古墳出土例との系譜が想定されている（山内2007b）。時期的にややギャップがあり、直接的な系譜は想定できないだろう。本墳の朝顔形埴輪については、兵庫県龍子三ツ塚1号墳や東四国系壺形埴輪、大分県亀塚古墳との関係についてかつて指摘した（蔵本2012b）。

相の谷1号墳出土資料は、朝顔形埴輪に古相を認めるものの、内外面の調整手法より、本期でもより新しい傾向を有するものと考えたい。

また、これら古墳のほかに、香川県御盥山古墳（香川県教育委員会1989・大久保1996）や同鴨部不明墳（大久保1996）出土の円筒埴輪は、資料数が限られるものの、内面にケズリ調整が施される点から、当該期か、次段階の可能性はある。これらの古墳については、資料の増加を待って判断したい。

上記したように、当該期を含めた前半期の器台系埴輪の導入は、個別単発的で跛行的である。津田湾沿岸部の古墳群等一部を除いて、同一地域に継続して導入されないという大きな特徴を認めることができる。おそらくは当該時期までの前方後円墳を中心とした被葬者が、個別に畿内地域の集団と関係を有していたことを反映するものと考えたい。

Ⅱ期1段階

有黒斑の野焼き焼成で、外面調整に後にB種ヨコハケへと発展する、ストロークが長く静止痕のない連続的なヨコハケ（以下、Ca種ヨコハケと呼称。鐘方1997）の出現を指標とする。香川県岩崎山4号墳（さぬき市教育委員会2013）を標識資料とし、徳島県愛宕山古墳（北條2003）や愛媛県久保山古墳（正岡2003）も本期の可能性を考える。

岩崎山4号墳は、円筒埴輪、朝顔形埴輪のほかに、形象埴輪として家形埴輪や盾もしくは甲冑形埴輪がある。円筒埴輪の口径の計測値には、大きなバラツキが認められる。すべて破片資料であり、計測誤差も含まれようが、概ねM型（口径31cm前後と同36cm前後、底径24cm前後）、L型（口径45cm前後）の2規格3類に分類可能と思われる。口縁部高は、L型の1点に10.8cm前後と高いものがあるが、それ以外は6.0cm前後と6.7cm前後の2規格が主体を占めるようである。突帯間隔は、胴部最上段の1点のみ19.4cmを計測する。これは胴部最上段の突帯間隔を高く設定する奈良県新山古墳等の系譜に連なるもので、おそらくこの高さで各段が割り付けられていたのではないと思われる。したがって突帯間隔は不明で、底部高もまた不明であり、全体的な割付方式は復元できない。

口縁部はⅡa類のみが認められ、端部調整に若干の相違をみせる。突帯は2類ないし3類が主体を占め、突帯高は0.8～1.4cmと一定の高さを維持している。突帯間隔の設定には、刺突技法とともに凹線技法が認められ、前者が主体となるものの、凹

線技法が本期には導入されていることを示している。透孔は、方形、三角形、凸形、円形ないし半円形が確認され、三角形が主体となるようである。個数は残存部から判断して、口縁部と底部を除く各段にそれぞれ 2 孔が穿たれていたと考えられる。外面調整は、タテハケ調整が一定数認められるものの、C a 種ヨコハケの出現率も高い。一定度の定着をみていると評価してよいだろう。内面は、ケズリ調整が卓越し、口縁部や胴部最上段付近はハケやナデ調整によりケズリ痕が消される。なお少数だが、Ⅱ類の鰭付埴輪や楕円筒埴輪を伴う。鰭幅は 8cm 以上を測り、本期の特徴を示す。

愛宕山古墳は、平成 5・13 年度に北條芳隆により、墳丘測量と石室実測調査が実施され、その際に少量の円筒埴輪と朝顔形埴輪、壺形埴輪とみられる小片が採集されている（北條 2003）。円筒埴輪は、口縁部と胴部の小片のみで、全形は不明。口径 32cm 前後、口縁部高 6.0cm 前後の M 型 1 点が確認される。口縁部は、受口状に内湾する単口縁形態のもの 1 点がある。突帯は、2 a 類と 3 b 類があり、前者が多数を占めるようである。突帯間隔の設定技法は不明。透孔は、確認される数点はいずれも方形とみられる。外面調整は、口縁部はナデ調整され、胴部はタテハケのものと、連続的なヨコハケを加えるものの 2 者があり、前者がやや多い。また、外面に赤彩や線刻を施す例もみられる。内面は、口縁部はヨコハケ、胴部はナデとケズリ調整が認められ、やや前者が多いとみられる。なお、壺形埴輪の胴部片とみられる小片には、結晶片岩粒が確認された。

突帯間隔や底部高等不明な点が多数あり、時期的な位置付けは苦慮するが、内外面の調整や突帯、透孔の形状より、本段階か次段階の資料の可能性を想定しておく。

Ⅱ期 2 段階

本段階も良好な資料を欠き、断片的ながら横立山経塚古墳（高松市教育委員会 1991・2000）、奥谷 1 号墳^{（註 8）}を標識古墳として、香川県田尾茶臼山古墳^{（註 9）}と愛媛県桜山古墳（山内 2007 a）は、本期かⅢ期 1 段階に下る可能性を考える。後述するように、B 種ヨコハケを欠落すること、内面はナデ調整が卓越すること、透孔が円形に統一されていないこと、突帯形状等を指標に、本段階の時期設定の根拠とした。

横立山経塚古墳資料は、小片が多く、全形は不明である。口径約 40cm、底径約 30cm の M 型のみ認める。突帯間隔は 1 点のみ約 18cm を測る。底部高、口縁部高は不明。口縁部はⅡ a 類のみがあり、端部形状に若干の差を認める。突帯は 3 b 類が主体を占め、2 b 類を少数認める。突帯高は、0.7～1.2cm を測る。外面調整はタテハケが主体を占め、一部に C a 種ヨコハケないし A 種ヨコハケを認める。また少数ヨコナデ調整により 1 次調整を消すもの（高松市教育委員会 2000 報告資料 11・14）があり、次段階の今岡古墳資料に盛行する。本資料では、ヨコハケの出現頻度は低調で、この点で本資料の時期的な位置付けに躊躇するが、後述するように内面調整にナデ調整が卓越するなどの点で、本段階に位置付けておきたい。内面調整は一部にヨコハケ

やケズリ調整を認める^{（註 10）}が、ナデ調整が卓越する。少数ながらケズリ調整が残存することで、やや古い様相とみることもできよう。透孔は方形と三角形^{（註 11）}のみで、円形は認めない。

奥谷 1 号墳は、3 条突帯の朝顔形埴輪 1 点はほぼ完形に復元されるが、円筒埴輪は底部片のみが 5 個体程度出土しているのみで、全形は不明。いずれも底径 26～29cm 前後の M 型である。また、調査が墳丘部のトレンチ調査のみであるため、資料数は限られており、出土資料が本墳の埴輪の全体的傾向を示すかどうかは不明である。

口縁部は、Ⅰ a 類とⅡ a 類があり、ややⅠ a 類が多い。口縁部高は不明。胴部は、朝顔形埴輪より、突帯間隔 15.1～15.3cm が知られる。外面調整は、連続的な C a 種ヨコハケを基調に、部分的に A 種ヨコハケで補う。これは後述する底部外面調整も同様である。内面はナデ調整とみられるが、マメツや剥離により断定が困難な資料が多い。突帯は 2 a 類と 3 a 類があり、3 a 類が多い。いずれも突帯高 1cm 前後と一定の高さを保っている。突帯間隔の設定には、方形刺突が確認される。透孔は確認されるものは方形のみで、各段に 2 孔が 90°ずらせて配置される。

底部高は、18.5～19.5cm で、内面はタテ・ナナメハケを施すものと、ナデ調整のみの 2 者があるが、後者はマメツや剥離が顕著でハケ調整がなされていた可能性も残る。底部に透孔を穿ったものは認められない。

口縁部高が不明なため、全体の割付方式は推測するしかない。底部高は 19cm 前後と低く、突帯間隔は底部高とは異なる規格で割り付けられており、可能性として口縁部高が底部高の 1/2 規格で割り付けられた割付 3 式（鐘方 2003）を想定したい。

田尾茶臼山古墳資料は、底径 18cm 前後の S 型があり、底部高 21.4cm 前後とやや高い。口縁部高、突帯間隔は不明である。外面調整はタテハケを主体に、横立山経塚古墳同様、ヨコナデ調整により 1 次調整を消すものがある。内面はナデ調整のみを認める。突帯は 2 b ないし 3 b 類で、突帯高は 1.0cm 前後を測る。透孔は、方形のものを数点認める。突帯設定には凹線技法が採用されている。外面ヨコハケ調整が主体とならない点は、S 型であることとともに、資料数の制約による点も大きいと考える。現状では、上述した内容から本段階に位置付けられると考えるが、資料数の増加を待って再考したい。なお、円筒埴輪以外に、家形埴輪が出土している。

Ⅲ期 1 段階

本期では、外面調整として B 種ヨコハケの導入や、それによる規格の縮小化を指標とする。B 種ヨコハケの出現頻度は本段階ではやや低く、断片的な資料では時期を特定できない場合が多い。香川県中間西井坪遺跡焼成土坑等出土資料（香川県教育委員会 1996）、及び既述した今岡古墳と、徳島県大代古墳（徳島県教育委員会 2005）、同宝幢寺古墳（鳴門市教育委員会 2011）出土資料を標識資料とし、香川県龍王山古墳（さぬき市教育委員会 2013）と徳島県国高山古墳（阿南市 1987）、同曾我

氏神社 1・2 号墳（天羽・岡山 1982）、愛媛県桜山古墳（山内 2007 a）は、本期の可能性を考えたい。なお、今岡古墳や龍王山古墳、曾我氏神社 1・2 号墳では壺形埴輪が出土しており、円筒埴輪とともに壺形埴輪の供献も継続していることが確認される。

また、これまで円筒埴輪の樹立は、前方後円墳に限定されてきたが、本期に至り円墳等（龍王山古墳・桜山古墳・曾我氏神社 1・2 号墳）にも導入が図られる^{（註 12）}。こうした円墳等への円筒埴輪祭祀の導入については、その裾野の拡大といった評価はふさわしくなく^{（註 13）}、前方後円墳築造数、つまりは同墳被葬者の絶対数の減少により、見かけの上で同祭祀が広い階層へと拡大した可能性を想定したい。つまりは、同一時期における円筒埴輪祭祀の許容数にさほど大きな変化は認められないのである。

中間西井坪遺跡では、焼成土坑、大形竪穴建物、谷 3、1 号墳周溝から当該期の資料が出土している。円筒埴輪、朝顔形埴輪とともに、家形・蓋形・盾形・船形の各形象埴輪と、土製棺がある。円筒埴輪は、口径 35～44cm、底径 24～32cm の M 型のみが認められ、報告者である大久保徹也により、出土遺構や埴輪の諸属性より、1・2 a・2 b の 3 類に分類され、1 類は中間西井坪遺跡での埴輪生産に先行して外部より持ち込まれ、1 号墳に樹立された埴輪、2 類は遺跡で生産された埴輪で、2 a 類が先行し、2 b 類は今岡古墳に供給されたものとされた。しかし、2 a 類と 2 b 類については、外面調整や透孔等、近似する内容も多く、口縁部や突帯形状の差が、両者の時期を区分する指標となっている。しかし、出土した埴輪の量的な問題と情報の欠落は決定的で、両者に時期差を伴うかどうかは私には判断ができない。以下では、資料的に内容がある程度判明する 2 a 類について、検討をおこなうこととする。

各部の計測値は、口縁部高 8.0cm のものと、口縁部高 10.2cm、突帯間隔 14.4cm のもの、口縁部高 12.0cm のもの、突帯間隔 15.5～16.0cm のもの、底部高 20.8cm のものがある。計測値より 2 a 類は、底部高が突帯間隔より高く、口縁部高が突帯間隔より低い B 類 2 型に分類される。また割付方式は、全形が不明なため直接復元することはできないが、あえて口縁部高を基準に、いくつかの組み合わせから有効な数値を求めると、口縁部高 8.0cm は、突帯間隔 15.5～16.0cm の半分、同様に口縁部高 10.2cm は、底部高 20.8cm の半分であり、口縁部高と突帯間隔の和はいずれも底部高に近似しないことから、割付 3 式が適用された可能性が高いと考えられる。

口縁部形態は、II a 類とともに III 類に近いものが認められ、新しい様相といえる。割付 2 式の導入以降、口縁部高も一定度規格化される過程で、外反度の強い口縁部形態では、安定した口縁部高を維持することが困難であり、III 類への指向性を強めたと考えられる。透孔は、長方形が多数を占め、1 段あたりの孔数は 4～5 孔と、多孔傾向にある点は特異である。形態的規格性に影響を与えない部分での、独自性が持ち込まれた好例と評価したい。突帯形状は 2・3 類があり、突帯高 1cm 前後と一定の高さを維持している。また突帯間隔の設定には、刺突技法

が用いられている。外面調整はタテハケで、ヨコハケは認められない。内面は一部ハケ調整を認めるが、基本的にナデ調整で仕上げられる。

上記したように、中間西井坪遺跡 2 a 類埴輪には、明確な B 種ヨコハケは認められないものの、割付 3 式が適用されている可能性が高いため、本段階に位置付けられると考えた^{（註 14）}。また、同埴輪にみられる諸属性（口縁部形態、突帯形状、突帯設定技法、外面調整、透孔等）は、既述した今岡古墳出土の埴輪とも多く共通する。今岡古墳出土資料は、小片が多く、突帯間隔や底部高等の規格が不明なため、断定は困難だが、2 b 類と共に 2 a 類埴輪も今岡古墳へ供給された可能性は高いのではないかと考える。

なお、今岡古墳の円筒埴輪の外面調整には、出現頻度は低いものの、連続的なヨコハケやヨコ方向のナデ・板ナデ調整が施されている。静止痕が不明瞭で、B 種ヨコハケとは断定できないものの、その可能性は高い。口縁部に III 類が含まれることから、本段階の資料と位置付ける。

大代古墳では、円筒埴輪、朝顔形埴輪のほかに、形象埴輪として家、冢形、盾、蓋等がある。円筒埴輪は、口径 23～30cm、底径 16～25cm の S 型と M 型が出土している。一部を除いて小片からの復元値であり確証に乏しいが、おそらくは M 型が主体を占めると考えられる。また、一部の埴輪の素地粘土に結晶片岩粒が含まれており、吉野川流域の沖積粘土を使用したか、意図的に混入した可能性が考えられる。いずれにしろ、在地で製作されたことは確実であろう。

円筒埴輪は、すべて破片資料であり、全体形状は不明^{（註 15）}。各部の計測値は、口縁部高 12.2cm、底部高 10.9cm のもの各 1 点を確認され、突帯間隔は不明である。底部高 10.9cm は、円筒埴輪の底部としては著しく低く、形象埴輪の基底部等の可能性が考えられる。いずれにせよ、割付方式を復元することはできない。口縁部は、I a・I b 類が主体的で、その他に II a 類がある^{（註 16）}。突帯は 2 類もしくは 3 類が主体で、突帯高 0.8～1.3cm の一定度の高さを有するものが多数を占める。突帯間隔の設定は、明確に凹線技法が確認される一方で、突帯剥離面にそれが確認できない資料もあり、刺突技法に依るものが含まれている可能性も考えられる。外面調整は、タテハケのみのもの以外に、2 次調整として C a 種ヨコハケ、B b 種ヨコハケがある。ヨコハケの出現率は高いが、多数の占めるのは C a 種ヨコハケである。なお、底部は 2 次調整を欠くものが多い。内面は、胴部はナデ調整が卓越し、口縁部にヨコハケが加えられている。なお、ケズリ調整は認めない。透孔は、残存部より円形とみられるものが一定数出土しているようだが、方形の可能性のあるものもあり、完全には円形に統一されているわけではない。孔数は、胴部径の 1/4 周が残存しているものに透孔が認められないものがあり、断定はできないが 1 段 2 孔であった可能性が高い。なお、現状で口縁部と底部に透孔は穿たれていないようである。

宝幢寺古墳では、円筒埴輪と朝顔形埴輪が出土している。トレンチ調査のため、出土量は乏しい。円筒埴輪の口縁部を中心

に赤彩を認める。円筒埴輪は、口径30～34cm、底径20～23cmのM型が確認される。口縁部高や突帯間隔等の数値は不明である。

口縁部はI a類のみ。突帯は高さ0.6～0.8cmとやや低く、3 b類が主体を占める。突帯間隔の設定は、1点のみ円形刺突が確認される。外面調整には、1次調整後にB種ヨコハケと同様な明瞭な静止痕を残すものの、いわゆるハケ条痕は不明瞭で、B b種ヨコハケを意識した板ナデ調整が施され、他にあまり例をみない。ハケ条痕が表出しない工具をあえて選択した可能性が高く、意図的なものであったと考えられ、この点で大代古墳と大きく異なる。本墳の埴輪が大代古墳に先行する可能性も考えられるが、墳丘規模や埋葬施設、形象埴輪の有無等を考慮するならば、大代古墳の被葬者との階層差が、こうした差異を表出している可能性も考慮する必要がある。内面調整は、口縁部でヨコナデ及び板ナデが確認され、胴～底部は基本的にナデ調整とみられる。ケズリ調整は認めない。透孔は、確認されるものはすべて円形で、突帯の上下で90°ずらせて穿たれている資料より、各段2孔を千鳥式に配していた可能性が高い。なお小片のため断定はできないが、口縁部と底部に透孔が穿たれた資料は出土していない。

国高山古墳では、円筒埴輪と朝顔形埴輪の小片30点程度が出土しているが、未報告資料のため詳細な出土位置や出土状況は不明である。円筒埴輪は、口径30cm以下のS型のみ認める。口縁部高や突帯間隔等は不明。口縁部は1点I a類のみ認める。突帯は、高さ0.6～1.1cmの3 b類が主体を占める。突帯間隔の設定技法は不明。外面調整はタテハケ、内面調整はナデ調整のみ認める。透孔の形状は不明で、底部に透孔が穿たれた資料が1点出土している。

国高山古墳資料については、本期に属する可能性は高いが断定はできない。今後の調査により、良好な資料の出土を待って、再度考えたい。

曾我氏神社1・2号墳資料も、小片の資料が多く、全体形状は不明である。口縁部II a類、突帯形状2 a・2 b・3 b類があり、3 b類が主体を占めるようである。突帯間隔の設定は、方形刺突による。方形透孔を数点確認した。外面調整はC a種ヨコハケが主体を占め、ごく少数A種ヨコハケとともに、B b種ヨコハケが出土している。B種ヨコハケの出現頻度は非常に低い。内面調整は、ハケとナデ調整を確認した。また、二重口縁形態の壺形埴輪や形象埴輪を伴う。

以上の検討により、中間西井坪遺跡出土2類埴輪は割付3式の採用をもって、大代古墳と宝幢寺古墳はB種ヨコハケの導入をもって本期に位置付けた。異なる属性で、同時期の資料として位置付けたわけだが、割付3式の普及が、形態的な規格性とB種ヨコハケによる調整手法の画一化をもたらしたとの指摘(鍾方2003)に従えば、大代古墳や法幢寺古墳も割付3式により製作された可能性は高い。本期の課題は、今岡古墳における明確なB種ヨコハケの不在である。中間西井坪遺跡での様相か

らも、今岡古墳におけるB種ヨコハケの出現頻度は、大代古墳には遠く及ばない可能性が高い。これを時期差とみるか系統差とみるかで評価は大きく異なるが、今岡古墳、大代古墳ともに資料上の制約により、速断することは困難であろう。今後の課題としたい。

また、大代古墳と宝幢寺古墳では、外面2次調整に使用された工具に、明瞭な差異が認められた。おそらくは工人集団の系統差を反映している可能性があり、もし仮にそうだとすれば、今岡古墳における明確なB種ヨコハケの不在も、系統差として理解できる可能性がある。

こうしたB種ヨコハケにみられる多様性を、どのように評価すればよいか。こうした地方色とでも表現すべき多様性は、IV期の香川県大塚山古墳にも認められる(蔵本2016)。そしてそれは、B種ヨコハケという埴輪に特化した調整技法と深く結びついて、顕在化している。前稿でも指摘したように、地方での恒常的な埴輪製作が完結しておらず、専門的な工人集団の編成が遅れたことがその要因と考えられよう。

次に、龍王山古墳資料について検討を加える。本古墳資料は、小片のみで、復元された胴部径よりM型ないしS型の規格が認められる。口縁部高、突帯間隔、底部高は不明。口縁部は2点のみだがI a類を認める。突帯は2・3類があり、突帯高は0.9～1.3cmと前段階と大差はない。外面調整は不明なものが多く、タテハケ調整とC a種とみられるヨコハケ調整を認める。内面調整も不明瞭だが、ナデ調整が主体的とみられる。透孔は円形とみられるものが1点あり、底部にも透孔が穿たれた資料がある(註17)。龍王山古墳については、情報量が乏しく、位置付けには苦慮するものの、口縁部形態や円形透孔の存在から、本期に位置付けられると考える。

また、本墳から出土した壺形埴輪の底部穿孔方法は、筆者がかつて開放技法としたものである(蔵本2008)。本地域においては、前期後葉に新たに導入された技法で、けば山古墳例のようなすばまった底部に穿孔するものが古く、円筒形に大きく開口する本墳例が新しく位置付けられる可能性がある。

Ⅲ期2段階

有黒斑の野焼き焼成で、外面調整としてB種ヨコハケの定着・普及を本期の特徴とする。香川県富田茶臼山古墳2号陪塚を標識資料とし、愛媛県観音山古墳(山内2007 a)は本期かIV期1段階に下る可能性を考える。

富田茶臼山古墳2号陪塚資料は、円筒埴輪と少数の形象埴輪がある。円筒埴輪はいずれも小片で、全体形状は不明。口径20～34cm、底径19～27cmをそれぞれ計測し、M型とS型を認める。底部高のみ判明する資料が数点あり、17～18cm前後と前段階よりも縮小するものの、同時期の畿内地域の資料と比較すると一定の高さを維持している。口縁部はI aないしI b類のみを認める。外面調整は、底部を中心にタテハケのみのものを認めるが、B b種ヨコハケの出現頻度は高い。内面調整は、口縁部はハケやヨコナデにより丁寧な整えられているが、底～胴部はナデ調整が主体となるものとみられる。透孔は円形のみ認める。

2号陪塚出土資料については、B b種ヨコハケの高い出現頻度、底部高の減少という点より、本期に位置付けられるものと考えられる。課題となるのは、主墳である富田茶臼山古墳との関係であろう。富田茶臼山古墳出土資料は、全体に焼成があまく、外面調整や各部の規格が不明なため、2号陪塚出土資料と比較が困難で、編年上の位置付けも課題が多い。突帯形状からの判断だが、既述した今岡古墳出土資料よりも突出度がやや低いものが多く、後出する可能性が指摘できる。突帯形状のみで速断は控えたいが、本期の築造を否定する根拠とはならないだろう。

Ⅳ期1段階

徳島市渋野丸山古墳は、有黒斑の資料であることから、これまで川西編年Ⅲ期の資料として位置付けられてきた。前稿でも、それを踏襲し、Ⅳ期の資料には含めなかったが、今回資料を詳細に観察することができ、後述するようにB c種ヨコハケの採用により、Ⅳ期に下る可能性が想定されたため、Ⅳ期1段階の資料として位置付ける。古墳は、平成11～17年度に徳島市教育委員会により6次に及ぶ発掘調査がなされ、報告書が刊行された（徳島市教育委員会2006）。報告書刊行以後も、同市教委による調査は継続しているが、今回検討する資料は、報告書掲載資料を中心としたものに限る。

規格として、口径が33～37cmのM型と、30cm以下のS型の大きく2者がある。M型は、口縁部や底部の破片資料が数個体報告されているのみで、突帯条数を含め全形は不明である。おそらくは後円部墳頂部等の限られた場所に供献されていたと考えられる。一方S型は円筒埴輪の多数を占めており、各段テラス面に圍繞供献されていたと考えられる。S型には、器高50cmのもの（S1）と、同45cmのもの（S2）の2タイプがある。S1は、3条突帯と2条突帯のものがあり、S2は2条突帯のみに限られる。

各部数値は、M型は口縁部高が13～14cm前後のものと、16cm前後のもの大きく2タイプがあり、底部高は13cm前後のもの1点を認める。一方、S型はバリエーションに富むが、概ね底部高を基準に割り付けられていると考えられる。底部高は、13～14cm前後、16cm前後、20cm前後、22cm前後の4規格があり、S1型3条突帯は、M型と同じ13～14cm前後の底部高を、S1型2条突帯は、16cm前後と22cm前後の2つの底部高をそれぞれ採用し、口縁部と突帯間隔を3等分ないし2等分する。一方で、S2型2条突帯は、16cm前後と20cm前後の底部高を採用し、後者は口縁部高と突帯間隔を等分するが、前者は突帯間隔を底部高と同じとし、口縁部高を14cm前後とする。この口縁部高は、S1型2条突帯の底部高22cm前後の規格と同じ高さを意図したものと考えられる。つまりS型は、器高の1/3ないし1/4ないし2/5の底部高を基準に、口縁部高と突帯間隔を等分することを基本に、割り付けられていると考えられることができる。

口縁部は、I a・I b・II a・Ⅲ類がある。II b類がやや多数を占めるが、限られた資料なので断定はできない。また、上記規格と口縁部形態は整合的ではない。外面調整は、ヨコハケとタテ・ナナメハケがあり、前者が多い。ヨコハケには、ストロークの長く連続的なC a種ヨコハケが多用される。B種ヨコハケはB b種とB c種があるが、いずれも静止痕の出現頻度は

一定せず、装飾的效果に乏しいものが多い。また、口縁部にC a種ヨコハケを施した後、ナナメハケを連続的に施すものがある。これはⅢ期の大代古墳にも同様な調整を認め、大代古墳の埴輪製作に携わった工人集団が本墳の埴輪の製作にも関与した可能性を示している。内面調整は、口縁部にヨコ・ナナメハケを、体～底部はナデ調整をそれぞれ施す。突帯は、2 a類と3 b類があり、前者が多い。透孔は円形に統一され、M型は胴部最上段に2孔を穿つものがあるが、それ以下は不明、S型は2条突帯の場合は胴部に、3条突帯の場合は3段目にそれぞれ2孔施す。3条突帯胴部2段目には透孔は穿たれず、地域色とみることができよう。また、S型2条突帯の底部に透孔を穿つ例があるが、それが上記した細別タイプのどれに相当するかは不明である。

以上、本地域における器台系埴輪の導入からB種ヨコハケの定着までを、3期6段階に区分してみた。近年の調査の進展により、資料数は増加したものの、多くの古墳で、限られた破片資料を操作して、時期決定をせざるを得ず、恣意的な編年案となってしまったことは否めない。今後の課題としたい。

4 津田湾周辺古墳群の評価

本地域の円筒埴輪は、基本的には前方後円墳を中心にその導入が図られている。また、埴輪の供献を欠落する古墳を最下層に、円筒埴輪の有無や形象埴輪等の質量によって、本地域に限らず、埴輪祭祀の本質は、相対的で重層的な階層差の演出にあったと評価したい。以下では、調査の進んだ香川県津田湾周辺の古墳を対象に、古墳祭祀における埴輪のありかたを見ていくこととする。

本地域の埴輪は、既述したように、赤山古墳がⅠ期5段階に、岩崎山4号墳がⅡ期1段階に、龍王山古墳がⅢ期1段階に、富田茶臼山古墳がⅢ期2段階に、それぞれ位置付けられると考える。このほか壺形埴輪や副葬品の内容より、奥14号墳と鵜の部山古墳がⅠ期1～2段階に、奥3号墳と川東古墳がⅠ期2～3段階に、古枝古墳がⅠ期4段階に、一つ山古墳がⅠ期5段階ないしⅡ期1段階に、けぼ山古墳がⅡ期2段階に、岩崎山1号墳がⅢ期1段階に、それぞれ位置付けられよう。本地域では、Ⅰ期1～2段階よりⅢ期2段階にかけて前方後円墳の築造が継続する。

Ⅰ期1～4段階にかけて築造された前方後円墳は、墳長30～37mとほぼ一定するのに対し、Ⅰ期5段階の赤山古墳において墳長50m前後と伸長し、埋葬施設に刳拔式石棺が搬入され、墳丘には円筒埴輪が圍繞供献される。それ以前の諸墳と比して、大きな飛躍が認められ、その背後に畿内地域の集団からの、祭祀儀礼に対する積極的な援助があった可能性が想定される。ここに本地域の集団の大きな画期を認めることができよう。

それまで、鵜の部山以下東部の集団と、奥14号以下西部の集団が、同時期にそれぞれ前方後円墳の被葬者を輩出してきたが、本期に至り赤山古墳1基に集約される。同時に、畿内の集団との関係がより強く表現されるようになったことは、それが畿内側からの関与や主導といった状況を想定させるものとも考

えられる。

こうした傾向は、Ⅱ期 1 段階に継続する。岩崎山 4 号墳は墳長約 62 m と規模を拡大し、刳拔式石棺には驚の山系石棺製作工人の関与の可能性が指摘（蔵本 2012 a）でき、火山系石棺のなかでは特殊な位置を占める。墳丘には、壺形埴輪と円筒埴輪以外に、家・盾・草摺等の形象埴輪や、鱗付円筒埴輪等の多彩な埴輪が供献され、佐紀盾列古墳群との関係も想定されてきた。また、近接して径 10 m 前後の小規模な円墳と考えらえる岩崎山 5 号墳があり、箱式石棺に仿製鏡や玉類等の副葬品を有する。同一古墳群内で従属墳を伴った階層関係を表示する。

また、径約 25 m の円墳の一つ山古墳は、埋葬施設に刳拔式石棺を搬入するものの、在地系の壺形埴輪を圍繞供献するのみで、円筒埴輪の有無による階層差を、岩崎山 4 号墳との間に顕在化させる。円墳への石棺の搬入は、本地域では現在確認されている唯一の例であり、前方後円墳被葬者以外への石棺の搬入例として特殊な位置を占める。より広範な階層へ石棺使用が拡大した可能性があり、上位階層の重層化が指摘できよう。

Ⅱ期 2 段階のけぼ山古墳では、前方後円墳の築造や刳拔式石棺への埋葬は継続するものの、墳長約 55 m と規模が縮小し、円筒埴輪の供献は限定され、壺形埴輪の圍繞供献が主体となる。岩崎山 4 号墳と比して、相対的な凋落傾向を読み取ることができよう。

次のⅢ期 1 段階には、前方後円墳の築造は停止し^{（註 18）}、径約 25 m の龍王山古墳や、同約 19 m の岩崎山 1 号墳の円墳のみが築造される。両墳への刳拔式石棺の搬入は停止された可能性があり、壺形埴輪と円筒埴輪、家形埴輪等の形象埴輪の供献が復活する。しかし、岩崎山 4 号墳にみられた多彩な形象埴輪はそこにはなく、さらにけぼ山古墳同様、円筒埴輪に対して壺形埴輪優位の供献は継続する。岩崎山 1 号墳で長方板革綴短甲等が副葬されるものの、より一層の凋落傾向をみることができる。

以上、津田湾周辺古墳群の動態は、Ⅰ期 5 段階の赤山古墳に画期を認め、Ⅱ期 1 段階の岩崎山 4 号墳をピークに、時期ごとに連続して墳丘規模を縮小し、壺形埴輪主体の圍繞供献へのシフト、形象埴輪の質量の低下、刳拔式石棺への埋葬の放棄、果ては前方後円墳築造の終焉といった、一貫した凋落傾向を認めることができる。

一方で、赤山古墳、岩崎山 4 号墳、龍王山古墳等、各々の時期にふさわしい埴輪が導入されているのであり、畿内地域の集団との連携は継続していたことは間違いない。しかし、そうした中で、Ⅲ期 1 ～ 2 段階に墳長約 140 m の富田茶臼山が築造される。多量の円筒埴輪の圍繞供献や、家・盾等の多彩な形象埴輪の樹立が確認され、盾形周濠（溝）の周囲に、少なくとも 3 基の陪塚を従える。本墳の築造を、上述した津田湾周辺古墳群の延長上^{（註 19）}に位置付けるべきではないであろう。Ⅲ期 1 段階までの津田湾周辺古墳群の築造とは明らかに断絶した位置に、富田茶臼山古墳は成立すると考える。

謝辞

小稿を執筆するにあたり、一瀬和夫、鐘方正樹、山内英樹の

各氏からは、ご教示・ご指導を頂戴した。また、資料実験に際し、岡本治代、亀井英希、亀岡史曉、下田智隆、高上拓、西本沙織、藤川智之、松田朝由、三好亮太、村田昌也、山本一伸、阿南市教育委員会、愛媛県教育委員会、公益財団法人鎌田共済会郷土博物館、坂出市教育委員会、さぬき市教育委員会、高松市埋蔵文化財センター、徳島県立博物館、徳島県立埋蔵文化財センター、徳島市教育委員会、鳴門市教育委員会、松山市役所の各氏・各機関には、多大なるご高配を賜った。記して感謝いたします。

（順不同・敬称略）

小稿では、紙幅の都合上、既出の埴輪資料の図面については、掲載しなかった。したがって読者には、非常にわかりづらい内容となったことは否めない。当該期の埴輪資料については、中国四国前方後円墳研究会 2010 や同 2011 にまとめられており、参照されたい。

（2016 年 8 月 31 日稿了）

補註

註 1 口径や底径等の計測値から求められる規格や、後述する口縁部や突帯の形態分類は、いずれも十河良和氏の分類案（十河 2003）を用いる。

註 2 報告書（徳島県教育委員会 2005）ではⅡ字形の盾面分割の可能性を指摘するが、掲載された資料のみからそれを断定することは困難であろう。

註 3 今回取り上げることができなかったが、本地域では香川県石船塚古墳・姫塚古墳・稲荷山姫塚古墳、愛媛県櫛玉比売神社古墳より、古墳時代前半期の器台系埴輪が出土している。

註 4 以前発表した壺形埴輪の編年（蔵本 2004）については、その後の研究の深化により、訂正すべき箇所が多い。修正案については、機会があれば公表したい。

註 5 例えば、香川県川東古墳があげられる。

註 6 例えば、香川県野田院古墳や国分寺六ツ目古墳があげられる。

註 7 例えば、香川県吉岡神社古墳があげられる。

註 8 奥谷 1 号墳資料は、発掘調査報告書が未刊であるが、徳島市教育委員会のご高配により、資料の実見が許された。記載は、その際の熟覧記録をもととする。

註 9 採集資料だが、坂出市教育委員会と鎌田郷土博物館に所蔵され、今回、両機関のご高配により、資料の実見が許された。記載は、その際の熟覧記録をもととする。

註 10 平成 12 年度高松市教育委員会調査時出土資料に、ケズリ調整が施されたものはない。下笠居小学校保管資料に 1 点認められる（高松市教育委員会 1991）ようだが、実見しておらず不詳である。

註 11 平成 12 年度高松市教育委員会調査時出土資料には方形透孔のみが確認され、下笠居小学校保管資料に三角形のものとされる。

註 12 国高山古墳は、前方後円墳か円墳か墳形について議論がある。正式な調査報告書が未刊のため、ここでは言及は避けたい。

註 13 小規模墳への普遍的な円筒埴輪祭祀の拡散は、Ⅳ期 2 段階か 3 段階に下り、その段階で在地での埴輪生産のための工人集団の編成がなされた可能性がある（蔵本 2016）。

註 14 なお、1 号墳出土の 1 類についても、口縁部高 13cm 前後、突帯間隔 14.0 ～ 14.8cm のものと、口縁部高 8.4cm 前後、同 12.4cm 前

- 後のものがあり、底部高が不明ながら、割付3式で規格された可能性があり、本期に属する可能性は高い。
- 註15 藤川智之は3条突帯4段構成の規格を提示する（藤川2008）。その可能性は否定しないが、突帯間隔も不明な小片ばかりであり、断定することは困難と考え、ここでは全形不明の埴輪としておく。
- 註16 報告書掲載の資料には、Ⅲ類として図示されているものがあるが、端部が欠損しているか、口縁部以外の資料の誤認である。その他報告書掲載図には、天地を逆に図化しているものや、傾きに難のあるものなど、その多くに誤認がある。
- 註17 報告では壺形埴輪の底部としている（21・22）が、透孔を伴うことや壺形埴輪とすると復元径が大きくなることから、円筒埴輪の底部と考える。
- 註18 早くに破壊され、実態が不明な北羽立峠古墳を除く。
- 註19 例えば、「外部地域とのネットワークを形成した津田古墳群の到達点」といった評価（松田2015）とは異なる位置付けがなされるべきだと考える。

引用・参考文献

- 青柳泰介 1995 「冢形埴輪の製作技法について」『日本の美術 第348号冢形はにわ』至文堂
- 天羽利夫・岡山真知子 1982 「曾我氏神社古墳群調査報告」『徳島県博物館紀要』第13集、徳島県博物館
- 大久保徹也 1996 「円筒埴輪」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第25冊 中間西井坪遺跡Ⅰ』、香川県教育委員会・日本道路公団
- 小栗明彦 2007 「蓋形埴輪編年論」『埴輪論考Ⅰ－円筒埴輪を読み解く－』、大阪大谷大学博物館
- 鐘方正樹 1997 「中期古墳の円筒埴輪」『史跡大安寺旧境内Ⅰ－杉山古墳地区の発掘調査・整備事業報告－』、奈良市教育委員会
- 鐘方正樹 2003 「古墳時代前期における円筒埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』第4号、埴輪検討会
- 川西宏幸 1988 「円筒埴輪総論」『古墳時代政治史序説』、塙書房
- 蔵本晋司 1999 「讃岐における古墳出現の背景－東四国系土器群の提唱とその背景についての若干の考察－」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第32冊 中間西井坪遺跡Ⅱ』、香川県教育委員会・日本道路公団
- 蔵本晋司 2004 「丸亀市吉岡神社古墳の再検討－供献土器のありかたを中心として－」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』Ⅺ
- 蔵本晋司 2007 「高松市茶臼山古墳の基礎的研究Ⅰ－円筒埴輪の整理から－」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要』Ⅲ
- 蔵本晋司 2008 「土器供献の系譜－古墳時代前期壺形埴輪の底部穿孔方法について－」『古代学研究』第180号、古代学研究会
- 蔵本晋司 2012 a 「讃岐産刷式石棺の成立とその背景」『ミニシンポジウム 海からみた四国の古墳時代』、公益財団法人徳島県埋蔵文化財センター
- 蔵本晋司 2012 b 「四国」『古墳時代の考古学2 古墳出現と展開の地域相』、同成社
- 蔵本晋司 2016 「出土埴輪の編年の位置関係」『国道11号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 仲戸東遺跡』、香川県教育委員会・国道交通省四国地方整備局
- 栗林誠治 2015 「四国東北部（徳島県）」『前期古墳編年を再考するⅡ－古墳出土土器をめぐって－』、中国四国前方後円墳研究会
- 柴田昌司 2015 「四国北西部における後期弥生土器と古式土師器、そして前期古墳」『前期古墳編年を再考するⅡ－古墳出土土器をめぐって－』、中国四国前方後円墳研究会
- 十河良和 2003 「和泉の円筒埴輪編年概観」『埴輪論叢』第5号、埴輪検討会
- 高橋克壽 1988 「器財埴輪の編年と古墳祭祀」『史林』第71巻第2号、史学研究会
- 高橋邦彦 1958 「銅鈴・古墳」『文化財協会報』特別号第3集、香川県文化財保護協会
- 信里芳紀 2014 「出土遺物の特徴と年代」『高松市茶臼山古墳』、香川県教育委員会
- 埴輪検討会 2003 「埴輪論叢」第4号・第5号
- 廣瀬寛 2010 「近畿における前期古墳の埴輪－西日本への展開を視野に－」『中四国前方後円墳研究会第13回研究会 円筒埴輪の導入とその画期』、中国四国前方後円墳研究会
- 藤川智之 2008 「阿波における埴輪の受容－大代古墳形象埴輪の復元成果から－」『真朱』第8号、財団法人徳島県埋蔵文化財センター
- 北條芳隆 2003 「東四国地域における前方後円墳成立過程の解明」、平成12～14年度科学研究費補助金基盤研究（C）（2）研究成果報告書
- 正岡睦夫 2003 「今治市久保山古墳について」『遺跡』第39号、遺跡発行会
- 松田朝由 2013 「土器・埴輪の検討」『津田古墳群調査報告書 第二分冊考察篇』さぬき市教育委員会
- 松田朝由 2015 「津田古墳群と富田茶臼山古墳をあるく」、さぬき市教育委員会
- 松本和彦 2010 「四国北東部の埴輪の様相－讃岐を中心に－」『中四国前方後円墳研究会第13回研究会 円筒埴輪の導入とその画期』、中国四国前方後円墳研究会
- 松本和彦 2015 「四国北東部（香川県）」『前期古墳編年を再考するⅡ－古墳出土土器をめぐって－』、中国四国前方後円墳研究会

- 森下浩行 1983 「高松市鬼無町今岡古墳とその組合式陶棺」『香川考古』創刊号、香川考古刊行会
- 山内英樹 2003 「愛媛県出土埴輪の基礎的研究（3）－北条市浅海出土の埴輪について－」『紀要愛媛』第3号、財愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 山内英樹 2007 a 「愛媛県出土埴輪の基礎的研究（7）－松山平野における中期古墳の埴輪について－」『紀要愛媛』第7号、財愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 山内英樹 2007 b 「相の谷1号墳出土埴輪についての諸問題」『今治市相の谷1号墳出土遺物』、愛媛県歴史文化博物館
- 渡部明夫 1976 「今岡古墳採集の円筒埴輪」『香川県文化財協会報』第69号、香川県文化財保護協会

報告書等

- 阿南市 1987 「阿南市史」第1巻
- 綾歌町教育委員会 2002 「快天山古墳発掘調査報告書」
- 綾歌町教育委員会 2004 「快天山古墳発掘調査報告書」
- 愛媛県歴史文化博物館 2007 「今治市相の谷1号墳出土遺物」
- 大川町教育委員会 1990 「富田茶臼山古墳発掘調査報告書」
- 大川町教育委員会 1998 「個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 富田茶臼山古墳階塚群」
- 香川県教育委員会 1989 「香川県埋蔵文化財調査年報」昭和63年度
- 香川県教育委員会・日本道路公団 1996 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第25冊 中間西井坪遺跡Ⅰ」
- 香川県教育委員会 1999 「香川県埋蔵文化財調査年報」平成9年度
- 香川県教育委員会 2014 「高松市茶臼山古墳」
- さぬき市教育委員会 2013 「津田古墳群調査報告書」
- 高松市教育委員会 1991 「横立山東麓1号墳発掘調査報告」
- 高松市教育委員会 2000 「高松市内遺跡発掘調査概報－平成11年度国庫補助事業－」
- 高松市教育委員会 2009 「高松市内遺跡発掘調査概報－平成20年度国庫補助事業－」
- 高松市教育委員会 2010 「高松市内遺跡発掘調査概報－平成21年度国庫補助事業－」
- 高松市教育委員会 2013 「高松市内遺跡発掘調査概報－平成24年度国庫補助事業－」
- 中国四国前方後円墳研究会 2010 【第13回研究会 「円筒埴輪の導入とその画期」】
- 中国四国前方後円墳研究会 2011 【第14回研究会 埴輪から見た中期古墳の展開】
- 津田町教育委員会 2002 「岩崎山第4号古墳発掘調査報告書」
- 徳島県教育委員会 2005 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 大代古墳」
- 徳島市教育委員会 2006 「淡野丸山古墳発掘調査報告書」
- 田原本町教育委員会 2007 「田原本の遺跡5 田原本の埴輪」
- 鳴門市教育委員会 2011 「天河別神社古墳群発掘調査報告書－鳴門市内遺跡調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」

報文 番号	古墳名	出土位置	種類	器種	調整		色調	胎土				計測値 (cm)		残存率	備考	備品番号
					外面	内面		石英・長石	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径		
1	今岡古墳		古式土師器	小型壺	頸部：ヨコナデ？ 体部：ミガキ	頸部：ヨコナデ？体 部：指オサエ・ナデ	7.5YR6/4 に ぶい橙	細・少						1/8		K268
2	今岡古墳		弥生土器	小型甕	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	7.5YR6/4 に ぶい橙	細・少	細・並			10.4		1/8 未満	香東川下流域産 土器	K268
3	今岡古墳		古式土師器	小型甕	体部：ヨコナデ？マメツ	頸部：ヨコハケ、体 部：シボリ目・指 オサエ・ナデ	7.5YR5/6 明褐 ぶい褐	中・少						1/8 未満		K284
4	今岡古墳		古式土師器	高杯	杯部：ナデ、脚 部：ミガキ	杯部：ミガキ？脚 部：シボリ目・ナデ	5YR5/6 明赤褐	細・並	細・少					8/8		K284
5	今岡古墳		壺形埴輪		口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ	5YR5/6 明赤褐	中・並				26.8		1/8 未満		K257

第 20 表 土器・壺形埴輪観察表

編文 番号	古墳名	出土位置	器種	部位	調整		口縁部 形態	突起形状	色調		胎土		計測値 (cm)					残存率	備考	備品番号	
					外面	内面			外面	内面	石英・ 長石	角閃石	雲母	口径	底径	胴部 径	口縁 部高				突起 幅
6	今岡古墳		円筒	口縁部	ナナメハケ後ナ デ？	ナデ			5YR5/4 にぶい 赤褐	5YR5/4 にぶい 赤褐	中・並						1/8 未満		K256		
7	今岡古墳		円筒	口縁部	ヨコナデ・マメ ツ	ヨコハケ・マメ ツ	I b 類		10YR7/4 にぶ い橙	5YR6/4 にぶい 橙	中・並						1/8 未満	口縁部 I c 類？	K275		
8	今岡古墳		円筒	口縁部	ヨコハケ後ヨコ ナデ	ナデ・マメツ	Ⅲ 類		7.5YR5/4 にぶ い橙	10YR7/4 にぶい 黄橙	中・並						1/8 未満		K275		
9	今岡古墳		円筒	口縁部	タテハケ・マメ ツ	タテハケ後ナ デ・マメツ	Ⅱ a 類		5YR6/4 にぶい 橙	5YR6/4 にぶい 橙	中・並						1/8 未満		K277		
10	今岡古墳		円筒	口縁部	タテハケ後ヨコ ナデ	ヨコハケ後ヨコ ナデ	Ⅱ a 類		7.5YR6/4 にぶ い橙	10YR6/4 にぶい 黄橙	中・並						1/8 未満		K277		
11	今岡古墳		円筒	口縁部	タテハケ後ヨコ ナデ	ヨコハケ後ヨコ ナデ	Ⅱ a 類		7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	中・並						1/8 未満		K277		
12	今岡古墳		円筒	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ			7.5YR5/4 にぶ い橙	7.5YR5/6 明褐	中・少			32.6			1/8 未満	黒斑	138182		
13	今岡古墳		円筒	口縁部	ヨコナデ	ヨコ・ナナメハ ケ	I a 類		5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	中・並			39.0			1/8	口縁部 I a 類	K268		
14	今岡古墳		円筒	口縁部	ヨコナデ・ヨコ 板ナデ	ヨコナデ・ヨコ 板ナデ	Ⅱ a 類		2.5Y5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明 赤 褐	中・並			33.0			1/8	外面赤彩	136139		
15	今岡古墳		円筒？	口縁部	タテ・ナナメハ ケ・マメツ	ヨコハケ・マメ ツ	不明		7.5YR5/6 明褐	7.5YR5/6 明褐	中・並			18.0			1/8 未満	蓋受部？	K281		
16	今岡古墳		円筒？	口縁部	タテハケ後ヨコ ナデ	ヨコ板ナデ・マ メツ	Ⅲ 類		5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	中・並			30.6			1/8 未満		138213		
17	今岡古墳		円筒	口縁部	横ナデ・マメツ	指オサエ・ナデ・ 横ナデ	Ⅱ a 類	2 a 類	5YR5/8 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	中・並			34.1		13.6	2.1	1.6	1/8 未満	K281	
18	今岡古墳		円筒	胴部	ナナメハケ・マ メツ	タテ・ナナメハ ケ後ナデ		3 a 類	10YR7/4 にぶ い黄橙	7.5YR6/6 橙	中・並			29.8		29.8	2.6	1.3	1/8	K275・ K277	
19	今岡古墳		円筒	胴部	タテ・ナナメハ ケ	指オサエ後タ テ・ナナメ板ナ デ・ナデ			2.5YR5/6 明 赤 褐	2.5YR6/6 橙	中・並			29.4					1/8	突起認定技法 A 手法	138213
20	今岡古墳	後円部東側	円筒	胴部	マメツ	指オサエ・マメ ツ	2 a 類		7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	中・並						2.1	1.5	1/8 未満	K265	
21	今岡古墳		円筒	胴部	タテハケ	ナデ？	2 a 類		5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	中・並						2.5	1.2	1/8 未満	K256	
22	今岡古墳		円筒	胴部	タテハケ？	指オサエ・ナデ	2 a 類		7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	中・並						1.7	1.2	1/8 未満	方形透孔	K249
23	今岡古墳	後円部東側	円筒	胴部	マメツ	指オサエ・ナデ	2 a 類		7.5Y6/6 橙	7.5Y6/6 橙	中・並						2.1	1.4	1/8 未満	K265	
24	今岡古墳		円筒	胴部	タテハケ・マメ ツ	ナナメハケ後ナ デ	3 a 類		5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	中・並						2.1	1.1	1/8 未満	K249	

第 21 表 円筒埴輪観察表 1

報文 番号	古墳名	出土位置	器種	部位	調整		口縁部 形態	突帯形状	色調		胎土			計測値 (cm)					残存率	備考	備品番号	
					外面	内面			外面	内面	石英・ 長石	角四石	雲母	口径	底径	胴部 径	口縁 部高	突帯 幅				突帯 高
25	今岡古墳	前方部～後 円部南側	円筒	胴部	ヨコハケ	指オサエ・マメ ツ		3 a 類	5YR5/6 明赤褐	5YR6/6 橙	中・並							20	1.1	1/8 未満		K266
26	今岡古墳		円筒	胴部	タテハケ	ナナメハケ後ナ デ		2 b 類	10YR6/6 明 褐	10YR6/6 明黄褐	中・並							22	0.9	1/8 未満	矩形透孔	K277
27	今岡古墳		円筒	胴部	タテハケ	板ナデ・指オサ エ		3 a 類	7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	中・並							26	1.4	1/8 未満	外面赤彩	K279
28	今岡古墳	前方部～後 円部南側	円筒	胴部	ナデ	指オサエ・ナデ		2 a 類	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	中・並							19	1.4	1/8 未満		K266
29	今岡古墳		円筒	胴部	ヨコハケ	タテハケ後ナデ		3 a 類	7.5YR5/6 明褐	5YR5/6 明赤褐	中・並							20	1.1	1/8 未満		K277
30	今岡古墳		円筒	胴部	ヨコハケ	ナナメハケ後ナ デ?		2 a 類	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	中・並							18	1.1	1/8 未満		K249
31	今岡古墳	前方部斜 面?	円筒	胴部	ナデ? マメツ	板ナデ? マメツ			5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	中・並							22	28	破片		K246
32	今岡古墳		円筒	胴部	マメツ	板ナデ後指オサ エ・ナデ		2 a 類	10YR6/4 にぶ い黄褐	7.5YR6/4 にぶ い橙	中・並							20	1.1	1/8 未満		K279
33	今岡古墳		円筒	胴部	ハケ? マメツ	指オサエ・ナデ・ マメツ		2 a 類	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	中・並							26	1.1	1/8 未満		K277
34	今岡古墳		円筒	胴部	マメツ	タテ・ナナメハ ケ後ナデ		3 a 類	7.5YR6/4 にぶ い橙	5YR6/4 にぶ い橙	中・並							22	1.1	1/8 未満		K277
35	今岡古墳		円筒	胴部	ナデ	ナデ・マメツ		2 a 類	5YR5/4 にぶ い赤褐	5YR5/4 にぶ い赤褐	中・並							31	1.5	1/8 未満		138213
36	今岡古墳		円筒	胴部	マメツ	指オサエ・ナデ・ マメツ		2 a 類	7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	中・並							22	1.3	1/8 未満		K280
37	今岡古墳		円筒	胴部	ナナメハケ	ハケ後ナデ・マ メツ		2 a 類	2.5Y7/6 明黄褐	10YR6/6 明黄褐	中・並							25	1.2	1/8 未満		K275
38	今岡古墳	前方部～後 円部南側	円筒	胴部	ヨコナデ	マメツ・ハクリ		2 b 類	10YR6/4 にぶ い黄橙	5YR5/6 明赤褐	中・並							14	0.9	1/8 未満		K266
39	今岡古墳		円筒	胴部	ナナメハケ	タテ・ナナメハ ケ後ナデ		3 a 類	10YR7/4 にぶ い黄橙	7.5YR7/4 にぶ い橙	中・並							28	1.3	1/8 未満	有黒斑	K275
40	今岡古墳		円筒	胴部	ナデ? マメツ	板ナデ? マメツ		2 a 類	5YR5/4 にぶ い赤褐	5YR5/4 にぶ い赤褐	中・並							25	1.4	1/8 未満		138182
41	今岡古墳		円筒	胴部	マメツ	ナデ? マメツ		3 a 類	5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	中・並							27	1.1	1/8 未満	有黒斑	K277
42	今岡古墳		円筒	胴部	タテハケ	指オサエ・ナデ・ マメツ		2 c 類	10YR7/6 明 褐	5YR6/6 橙	中・少							13	0.5	1/8 未満	黒斑	K262
43	今岡古墳		円筒	胴部	マメツ	板ナデ? マメツ		2 a 類	7.5YR5/6 明褐	7.5YR5/6 明褐	中・並							24	1.1	1/8 未満		K249
44	今岡古墳		円筒	胴部	ヨコナデ	板ナデ・ナデ			7.5YR6/4 にぶ い橙	7.5YR6/4 にぶ い橙	中・並									1/8 未満	突帯設定技法 A 手法	K275
45	今岡古墳		円筒	胴部	マメツ	マメツ		2 b 類	10YR6/4 にぶ い黄橙	5YR6/6 橙	中・並							19	1.3	1/8 未満		K275
46	今岡古墳		円筒	胴部	マメツ	ナデ? マメツ		2 a 類	2.5YR5/4 にぶ い赤褐	5YR5/4 にぶ い赤褐	中・並							26	1.6	1/8 未満		K256
47	今岡古墳		円筒	胴部	タテ・ナナメハ ケ	タテハケ後ナデ		3 a 類	10YR6/4 にぶ い黄橙	10YR6/3 にぶ い黄橙	中・並							23	1.3	1/8 未満		K277
48	今岡古墳		円筒	胴部	マメツ	指オサエ・ナデ・ マメツ		2 a 類	10YR7/4 にぶ い黄橙	7.5YR6/4 にぶ い橙	中・並							25	1.1	1/8 未満		K277
49	今岡古墳		円筒	胴部	ハケ? 後ナデ	指オサエ・ナデ		2 a 類	7.5YR6/8 橙	5YR6/6 橙	中・並							16	1.1	1/8 未満		136139
50	今岡古墳		円筒?	胴部	ヨコハケ? マメ ツ	マメツ		2 c 類	5YR5/6 明赤褐	7.5YR6/6 橙	中・並							13	0.7	1/8 未満		138213
51	今岡古墳		円筒	胴部	マメツ	ナデ・マメツ		3 a 類	10YR6/4 にぶ い黄橙	7.5YR6/4 にぶ い橙	中・並							24	1.2	1/8 未満		K277
52	今岡古墳		円筒	胴部	タテハケ・マメ ツ	ナデ・マメツ		3 a 類	10YR6/6 明 黄褐	5YR5/6 明赤褐	中・並							25	1.5	1/8 未満		K249

第 22 表 円筒埴輪観察表 2

縄文 番号	古墳名	出土位置	器種	部位	調整		口縁部 形態	突帯形状	色調			胎土			計測値 (cm)					残存率	備考	備品番号	
					外面	内面			外面	内面	石英・ 長石	角閃石	雲母	口径	底径	胴部 径	口縁 部高	突帯 幅	突帯 高				その他
53	今岡古墳		円筒	胴部	タテ・ナナメハケ	ナナメハケ後ナデ		3 a 類	5YR5/6明赤褐	7.5YR6/4 にぶい橙	中・並							27	1.3		1/8 未満	矩形透孔	K277
54	今岡古墳		円筒	胴部	タテ・ナナメハケ・マメツ	タテハケ・マメツ		2 a 類	5YR5/6明赤褐	5YR6/6 橙	中・並							18	1.3		1/8 未満		K275
55	今岡古墳		円筒	胴部	タテハケ	指オサエ・マメツ		2 a 類	5YR5/6明赤褐	5YR6/6 橙	中・多							28	1.6		1/8 未満		138213
56	今岡古墳		円筒・	胴部	マメツ	指オサエ・マメツ		2 c 類	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	中・並							15	0.9		1/8 未満		138213
57	今岡古墳		円筒?	胴部	ナナメハケ	ナナメ・ヨコハケ		2 a 類	7.5YR5/6明褐	5YR5/6明赤褐	中・並							30	1.5		1/8 未満	外面赤彩、陶棺か?	K281
58	今岡古墳		円筒	胴部	マメツ	指オサエ・ナデ・マメツ		3 a 類	5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	中・並							25	1.6		1/8 未満		K 275・K277
59	今岡古墳	前方部一後円部南側	円筒	胴部	タテハケ	指オサエ・ナデ			7.5YR6/6 橙	5YR5/6明赤褐	中・少										1/8 未満	長方形透孔	K266
60	今岡古墳	前方部南斜面	円筒	胴部	タテハケ	タテハケ			5YR4/6 赤褐	5YR4/6 赤褐	中・少										1/8 未満	矩形透孔	K244
61	今岡古墳		円筒	胴部	マメツ	指オサエ・マメツ		2 b 類	5YR5/6明赤褐	7.5YR6/6 橙	中・並							25	1.1		1/8 未満	方形透孔	K281
62	今岡古墳		円筒	胴部	タテハケ後ナデ	ナデ・指オサエ		3 b 類	7.5YR5/6明褐	5YR5/6明赤褐	中・並			20.8				16	0.9		1/8	方形透孔	K281
63	今岡古墳		円筒	胴部	タテハケ・マメツ	板ナデ? マメツ		4 b 類	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/6明赤褐	中・少							14	0.7		1/8		138182
64	今岡古墳		円筒	胴部	マメツ	マメツ		2 b 類	7.5YR6/6 橙	5YR5/6明赤褐	中・並							22	0.8		1/8		K256
65	今岡古墳		円筒	胴部	マメツ	タテ・ナナメハケ後ナデ		3 a 類	7.5YR6/6 橙	5YR5/6明赤褐	中・並							19	1.2		1/8		K275
66	今岡古墳		円筒	胴部	マメツ	指オサエ・板ナデ? マメツ		2 a 類	7.5YR6/6 橙	5YR5/4 にぶい赤褐	中・並							27	1.0		1/8	方形透孔	K256
67	今岡古墳		円筒	胴部	タテハケ	ナデ・指オサエ		2 a 類	5YR4/6 赤褐	5YR5/6明赤褐	中・並							18	1.2		2/8		K261
68	今岡古墳	後円部東側	円筒	胴部	マメツ	指オサエ・マメツ		2 a 類	5YR5/6明赤褐	7.5YR6/6 橙	中・並							13	1.3		1/8 未満		K265
69	今岡古墳		円筒	胴部	タテハケ	ヨコハケ		2 c 類	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	中・少							14	0.6		1/8		K281
70	今岡古墳	後円部東側	円筒	胴部	タテハケ	ナナメハケ後ナデ		2 b 類	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR5/6明赤褐	中・並							11	0.5		1/8		K265
71	今岡古墳		円筒	胴部	ヨコナデ	指オサエ・ナデ		3 a 類	2.5YR5/6 明赤褐	5YR5/6明赤褐	中・並							21	1.5		1/8		K256
72	今岡古墳		円筒	胴部	マメツ	マメツ		3 a 類	10YR6/6 明黄褐	7.5YR6/6 橙	中・並							25	1.0		1/8 未満		K279
73	今岡古墳		円筒	胴部	タテハケ	板ナデ? マメツ		2 c 類	7.5Y6/6 橙	2.5YR5/6 明赤褐	中・多							16	0.5		1/8		K249
74	今岡古墳		円筒	胴部	ナナメハケ	指オサエ・マメツ		3 a 類	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	中・並							15	1.1		1/8	方形透孔	K281
75	今岡古墳		円筒	胴部	タテ・ナナメハケ	指オサエ・ナデ? マメツ		3 a 類	5YR5/6明赤褐	7.5YR6/4 にぶい橙	中・並							22	1.4		1/8		K277
76	今岡古墳		円筒	胴部	マメツ	タテハケ後ナデ		2 b 類	10YR7/3 にぶい黄橙	5YR5/4 にぶい赤褐	中・並							22	0.9		1/8	矩形透孔	K275
77	今岡古墳		円筒?	胴部	タテハケ後ヨコ板ナデ・ナデ	ナデ・ハケ? マメツ		2 c 類	5YR5/6明赤褐	5YR6/6 橙	中・少							29.4			1/8	形象埴輪基底部?	K268
78	今岡古墳		円筒	胴部	マメツ	板ナデ・指オサエ・マメツ		2 b 類	10YR6/6 明黄褐	5YR6/6 橙	中・並							31	0.8		1/8 未満		K279
79	今岡古墳		円筒	胴部	ヨコ板ナデ・ナデ	指オサエ後ヨコハケ・ナデ		2 a 類	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	中・少							16	1.3		1/8	外面赤彩	136139
80	今岡古墳		円筒	胴部	タテハケ? マメツ	タテハケ後ナデ		2 b 類	10YR7/4 にぶい黄橙	5YR6/6 橙	中・並							32	1.9		1/8		K277
81	今岡古墳		円筒	胴部	マメツ	ハケ後ナデ・マメツ		2 a 類	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/4 にぶい褐	中・並							24	1.1		1/8		K275

第 23 表 円筒埴輪観察表 3

報文 番号	古墳名	出土位置	器種	部位	調整		口縁部 形態	突帯形状	色調		石英・ 長石	胎土			計測値 (cm)				残存率	備考	備品番号
					外面	内面			外面	内面		角四石	雲母	口徑	底徑	胴部 往	口縁 部高	突帯 幅	突帯 高	その他	
82	今岡古墳		円筒	胴部	マメツ	ヨコ・ナナメハ ケ・マメツ		2 a 類	25YR5/6 明赤 褐	25YR5/6 明赤 褐	中・並							22	13	1/8 未満	K256
83	今岡古墳		円筒	胴部	タテ・ナナメハ ケ	タテハケ後ナ デ?		2 a 類	5YR5/6 明赤褐	5YR4/4 にぶい 褐	中・並				28.2			25	15	1/8	方形透孔 138182
84	今岡古墳		円筒	胴部	マメツ	マメツ		2 b 類	5YR6/6 橙	10YR7/4 にぶい 黄橙	中・並				27.8			13	07	1/8	K275
85	今岡古墳		円筒	胴部	マメツ	タテハケ・板ナ デ? マメツ		2 b 類	75YR6/6 橙	5YR6/6 橙	中・並				30.2			22	10	1/8 未満	K280
86	今岡古墳		円筒	胴部	マメツ	板ナデ? マメツ		3 a 類	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	中・並				31.4			23	11	1/8 未満	K249
87	今岡古墳		円筒	胴部	タテハケ後ヨコ ハケ	マメツ		2 a 類	75YR5/4 にぶ い褐	10YR6/4 にぶい 黄橙	中・並				30.7			17	13	1/8	突帯設定技法 A 手法 K277
88	今岡古墳		円筒	胴部	マメツ	マメツ		2 a 類	75YR6/4 にぶ い橙	5YR6/6 橙	中・並				32.8			27	11	1/8 未満	K277
89	今岡古墳		円筒	胴部	タテハケ・マメ ツ	ナナメハケ後ナ デ		2 b 類	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	中・並				31.8			20	14	1/8	有黒斑 K277
90	今岡古墳		円筒	胴部	ナナメハケ・マ メツ	タテ・ナナメハ ケ後ナデ		3 a 類	75YR6/6 橙	5YR5/6 明赤褐	中・並				32.1			22	13	1/8 未満	外面赤彩 K275
91	今岡古墳		円筒	胴部	ナナメハケ・マ メツ	タテハケ後ナ デ		3 a 類	5YR5/6 明赤褐	7.5YR6/6 橙	中・多				29.8			22	11	1/8	K277
92	今岡古墳		円筒	胴部	マメツ	タテ・ナナメハ ケ後ナデ・マメ ツ		2 a 類	5YR5/6 明赤褐	10YR6/4 にぶい 黄橙	中・並				32.1			22	14	1/8	有黒斑 K277
93	今岡古墳		円筒	胴部	マメツ	タテハケ後ナ デ		2 a 類	25YR6/6 橙	7.5YR4/3 褐	中・少				33.0			26	12	1/8	K277
94	今岡古墳		円筒	胴部	マメツ	ナデ・マメツ		2 a 類	10YR6/4 にぶ い黄橙	7.5YR5/6 明褐	中・並				32.7			17	12	1/8	K 275・ K277
95	今岡古墳		円筒	胴部	マメツ	タテハケ・マメ ツ		2 c 類	5YR5/6 明赤褐	5YR6/6 橙	中・多			32.0				13	05	1/8 未満	K277
96	今岡古墳		円筒	胴部	タテハケ後ナ デ	ナデ・指オサエ ツ		3 a 類	75YR6/6 橙	10YR7/4 にぶい 黄橙	中・並				32.4			25	15	2/8	K261
97	今岡古墳		円筒	胴部	タテハケ・マメ ツ	タテハケ後ナ デ		3 b 類	5YR5/4 にぶい 赤褐	5YR5/4 にぶい 赤褐	中・並							26	10	1/8	K256
98	今岡古墳		円筒	胴部	ヨコ板ナデ後ナ デ	ナデ? マメツ		3 a 類	5YR5/6 明赤褐	7.5YR6/6 橙	中・並				33.8			18	14	1/8	矩形透孔・突 帯設定技法 A 手法 K 249・ K277
99	今岡古墳		円筒	胴部	ナナメハケ・マ メツ	板ナデ? マメツ		3 a 類	75YR5/4 にぶ い褐	5YR5/6 明赤褐	中・並				35.2			25	13	1/8 未満	K249
100	今岡古墳	前方部南斜 面	円筒	胴部	タテハケ? マメ ツ	指オサエ・ナデ・ マメツ		2 a 類	75YR6/6 橙	5YR5/6 明赤褐	中・多		細・少		35.8			17	13	1/8 未満	K244
101	今岡古墳		円筒	胴部	マメツ	タテハケ後ナ デ・マメツ		2 c 類	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	中・並				36.2			12	05	1/8 未満	K279
102	今岡古墳		円筒	胴部	タテハケ・マメ ツ	指オサエ後ナ デ		2 a 類	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	中・並				34.5			23	14	1/8	円形透孔? K281
103	今岡古墳	後円部東側	円筒	胴部	タテハケ	ナナメハケ後ナ デ		2 b 類	75YR5/4 にぶ い褐	5YR5/4 にぶい 赤褐	中・並				34.4			30	11	1/8	長方形透孔 K265
104	今岡古墳		円筒	胴部	ナナメハケ・マ メツ	タテハケ後ナ デ		3 a 類	75YR6/6 橙	5YR6/6 橙	中・並				38.2			30	13	1/8	矩形透孔 K 275・ K277
105	今岡古墳		円筒	底部	タテハケ	ヨコハケ			5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	中・並									1/8 未満	138213
106	今岡古墳		円筒	底部	指オサエ・マメ ツ	ナデ・板ナデ? マメツ			5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	中・並									1/8 未満	K275
107	今岡古墳		円筒	底部	タテハケ・マメ ツ	タテハケ後指オ サエ・ナデ・マ メツ			5YR5/4 にぶい 赤褐	5YR5/4 にぶい 赤褐	中・並									1/8 未満	K277
108	今岡古墳		円筒	底部	タテハケ・マメ ツ	タテハケ後・部 ナデ・マメツ			75YR5/6 明褐	7.5YR5/6 明褐	中・並									1/8 未満	K 275・ K277

第 24 表 円筒埴輪観察表 4

観文 番号	古墳名	出土位置	器種	部位	調整		口縁部 形態	突帯形状	色調			胎土			計測値 (cm)					残存率	備考	備品番号
					外面	内面			外面	内面	石英・ 長石	角閃石	雲母	口径	底径	胴部 径	口縁 部高	突帯 幅	突帯 高			
109	今岡古墳		円筒	底部	タテハケ?マメツ	タテハケ後指オサエ・ナデ		5YR6/4 にぶい橙		中・並									1/8	黒斑・歪み顕著、楕円筒?	K277	
110	今岡古墳	前方部・後円部南側	円筒	底部	指オサエ・マメツ	板ナデ・指オサエ・ナデ		75YR6/6 橙		中・並									1/8 未満		K266	
111	今岡古墳		円筒	底部	タテ・ナナメハケ	ナナメハケ後ナデ・マメツ		5YR5/6 明赤褐		中・並			22.0						1/8	円形透孔	K286	
112	今岡古墳		円筒	底部	タテ・ナナメハケ後一部ナデ	タテハケ後一部ナデ		5YR5/6 明赤褐		中・並			21.3						1/8		K277	
113	今岡古墳		円筒	底部	タテハケ・マメツ	タテ・ナナメハケ後指オサエ		10YR6/4 にぶい黄橙		中・並			25.6						1/8 未満		K277	
114	今岡古墳		円筒	底部	タテハケ	タテハケ後一部ナデ		5YR5/6 明赤褐		中・並			31.8						1/8 未満		K277	
115	今岡古墳		円筒?	底部	板ナデ・ナデ	板ナデ?ナデ		75YR5/6 明褐		中・並			21.6						1/8	円形透孔、形象基底部?	K281	
116	今岡古墳		円筒	底部	タテハケ・マメツ	指オサエ・マメツ		75YR5/6 明褐		中・並			22.8						1/8 未満		K281	
117	今岡古墳		円筒	底部	タテハケ	ナナメハケ後ナデ		5YR4/6 赤褐		中・並			22.4						1/8 未満		138213	
118	今岡古墳		円筒	底部	ナナメ板ナデ?マメツ	指オサエ・ナデ・マメツ		25Y5/2 暗灰黄		中・並			25.8						1/8		K277	
119	今岡古墳	前方部	円筒	底部	タテハケ・マメツ	タテハケ後指オサエ		75YR6/6 橙		中・並			28.2						1/8 未満		K247	
120	今岡古墳		円筒	底部	タテハケ・マメツ	指オサエ・ナデ後ハケ・マメツ		25YR5/6 明赤褐		中・並			25.4						1/8 未満		K275	
121	今岡古墳		円筒	底部	タテハケ・マメツ	ナナメ・ヨコハケ		5YR5/6 明赤褐		中・並			25.7						1/8 未満		K281	
122	今岡古墳		円筒	底部	ナデ?マメツ	板ナデ・ナデ・マメツ		75YR6/4 にぶい橙		中・並			26.2						1/8		138182	
123	今岡古墳		円筒	底部	タテハケ・ハケリ	タテハケ後ナデ・指オサエ		25YR5/6 明赤褐		中・並			24.4						1/8		K281	
124	今岡古墳		円筒	底部	タテハケ・マメツ	タテ・ナナメハケ後ナデ		75YR5/6 明褐		中・並			27.6						2/8	歪み顕著	K277	
125	今岡古墳		円筒	底部	タテ・ナナメハケ・マメツ	タテハケ・指オサエ		75YR5/6 明褐		中・並			30.6						1/8 未満		K277	
126	今岡古墳		円筒	底部	タテハケ後ナデ	タテハケ後ナデ		10YR6/4 にぶい黄橙		中・並			27.3						2/8	有黒斑	K277	
127	今岡古墳		円筒	底部	タテハケ・マメツ	指オサエ・ナデ後タテハケ		5YR5/6 明赤褐		中・並			28.8						1/8	黒斑・円形?透孔	K275・K277	
128	今岡古墳		円筒	底部	タテハケ・マメツ	タテハケ		75YR6/4 にぶい橙		中・並			30.1						1/8	円形透孔	K277	
129	今岡古墳	後円部東側	朝顔?	口縁部	ハケ後指オサエ・ヨコナデ	ヨコナデ・マメツ		75YR6/6 橙		中・並	細・少							1/8 未満			K265	
130	今岡古墳		朝顔	口縁部	マメツ	指オサエ・ナデ?マメツ		75YR6/6 橙		中・並					2.6	0.9			1/8 未満		K277	
131	今岡古墳		朝顔	口縁部	ヨコ・ナナメハケ・マメツ	ヨコ・ナナメハケ・マメツ		75YR6/6 橙		中・少									1/8 未満		K268	
132	今岡古墳		朝顔	口縁部	タテハケ後ヨコハケ	ヨコハケ後ナナメハケ		10YR7/4 にぶい黄橙		中・並									1/8		K258	
133	今岡古墳		朝顔	口縁部	ハケ・マメツ	ナナメハケ後ナデ・マメツ		75YR6/6 橙		中・並									1/8		K277	
134	今岡古墳		朝顔	口縁部	ナデ?マメツ	ナデ?マメツ		5YR6/6 橙		中・並									1/8		K277	
135	今岡古墳		朝顔	頸部	ヨコナデ?マメツ	頸部：ヨコナデ?マメツ、肩部：ヨコハケ		10YR6/6 明黄褐		中・並									1/8 未満		K276	

第 25 表 円筒埴輪観察表 5・朝顔形埴輪観察表 1

報文 番号	古墳名	出土位置	器種	部位	調整		口縁部 形態	色調		胎土			計測値 (cm)					残存率	備考	備品 番号
					外面	内面		外面	内面	石英・ 長石	雲母	口徑	底徑	胴部 径	口縁 高さ	突帯 幅	突帯 高	その他		
136	今岡古墳		朝顔	頸部	頸部：タテハケ、 肩部：ヨコハケ	頸部：ヨコハケ、 肩部：指オサエ・ ナデ		2.5Y7/4 浅黄	2.5Y7/4 浅黄	中・少								1/8		K272
137	今岡古墳		朝顔	肩部	マメツ	ヨコハケ・マメ ツ	2 a 類	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	中・並				27.4		1.8	1.5		1/8	K249
222	ミタライ山	表採	円筒	底部	タテ・ナナメハ ケ	ケズリ後板ナ デ・ナデ		7.5YR5/4 にぶ い褐	5YR6/6 明赤褐	中・少	細・並							1/8 未満	楕円筒？	
223	赤山古墳	表採	円筒	胴部	タテハケ・ハ ケ	ナデ・ハクリ		10YR6/3 にぶ い黄橙	10YR6/3 にぶい 黄橙	中・少	細・並							1/8 未満	弥生土器の可 能性あり	
224	岩崎山 4 号墳	表採	円筒	胴部	タテハケ	ヨコ・ナナメハ ケ後・部ナデ	2 b 類	2.5Y6/3 にぶい 黄	2.5Y7/3 浅黄	中・少			32.6			2.6	1.1	1/8	方形側突	
225	不明	表採	円筒	胴部	タテハケ	オナメハケ？後 指オサエ・ナデ	3 a 類	7.5YR4/4 褐	7.5YR4/4 褐	細・少	細・並			32.6		2.3	1.3	1/8	長方形透孔	
226	三ツ池	表採	円筒	胴部	タテハケ	指オサエ・後ナ デ・マメツ		10YR7/6 明黄 褐	10YR7/6 明黄褐	中・少						2.3		1/8 未満	凹線技法	
227	津頭東古墳	表採	壺形 埴輪？	口縁部	マメツ	マメツ		10YR7/4 にぶ い黄橙	10YR6/6 明黄褐	中・少								1/8 未満		

第 26 表 円筒埴輪観察表 6・朝顔形埴輪観察表 2

報文 番号	古墳名	出土位置	種類	器種	調整		内面	色調		胎土		計測値 (cm)			残存 率	備考	備品 番号
					外面	内面		外面	内面	石英・長石	角閃石	雲母	口径	器高			
138	今岡古墳		形象埴輪	線刻・マメツ	指オサエ・ナデ・マメツ		10YR5/2 灰黄褐 褐	2.5YR5/6 明赤 褐	中・並					1.6		破片	1028-1
139	今岡古墳		形象埴輪	線刻・マメツ	指オサエ・ナデ・マメツ		7.5YR6/8 橙 褐	2.5YR5/8 明赤 褐	中・並					1.6		破片	1028-1
140	今岡古墳		形象埴輪	線刻・マメツ	指オサエ・ナデ・マメツ		2.5YR5/8 明赤 褐	2.5YR5/8 明赤 褐	中・並					1.4		破片	1028-1
141	今岡古墳	前方部南面	形象埴輪	ハケ後線刻	ナデ		5YR5/4 にぶい 赤褐	5YR5/4 にぶい 赤褐	中・多					1.5		破片	K244
142	今岡古墳		形象埴輪	線刻・マメツ	ハケ後ナデ		5YR6/8 橙	5YR6/6 橙	中・並					1.7		破片	497-13
143	今岡古墳		形象埴輪	線刻・マメツ	ハケ・指オサエ		7.5YR5/8 明褐	2.5YR5/8 明赤 褐	中・並					1.5		破片	1246-1
144	今岡古墳		形象埴輪	ハケ後ナデ・線刻	ハケ後ナデ		2.5YR5/6 明赤 褐	2.5YR5/8 明赤 褐	中・少					1.4		破片	497-11
145	今岡古墳		形象埴輪	ハケ後線刻・マメツ	ナデ?マメツ		2.5YR5/8 明赤 褐	2.5YR6/8 橙	中・並					1.3		破片	1028-1
146	今岡古墳		形象埴輪	ハケ・ナデ後線刻・マメツ	指オサエ・ナデ・マメツ		5Y5/1 灰	2.5YR4/8 赤褐	中・並					1.4		破片	1028-1
147	今岡古墳		形象埴輪	線刻・マメツ	指オサエ・マメツ		5YR6/8 橙	2.5YR5/8 明赤 褐	中・並					1.2		破片	1028-1
148	今岡古墳		形象埴輪	ハケ後線刻	指オサエ・ナデ・マメツ		7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	中・並					1.8		破片	1028-1
149	今岡古墳		形象埴輪	ナデ後線刻	ハケ後指オサエ・ナデ		2.5Y5/1 黄灰	5YR5/8 明赤褐	中・並					1.8		破片	1028-1
150	今岡古墳		形象埴輪	ハケ後線刻	ハケ後指オサエ・ナデ		7.5YR6/8 橙	2.5YR5/8 明赤 褐	中・並					1.3		破片	1028-1
151	今岡古墳		形象埴輪	ハケ後ナデ・線刻	指オサエ・ナデ後ハケ		7.5YR6/8 橙	2.5YR4/8 赤褐	中・並					1.2		破片	1028-1
152	今岡古墳		形象埴輪	ハケ後ナデ・線刻	形象部：指オサエ・ナデ、円筒部： ヨコハケ後指オサエ・ナデ		2.5YR5/8 明赤 褐	5YR5/8 明赤褐	中・並					1.3		破片	475-1・ 1028-1
153	今岡古墳		形象埴輪	ハケ後ナデ・線刻	指オサエ・ナデ後ハケ		5YR5/8 明赤褐	2.5YR5/8 明赤 褐	中・並					1.2		破片	K282
154	今岡古墳		形象埴輪	ハケ後ナデ・線刻・マメツ	ナデ・ハケ・マメツ		5YR5/8 明赤褐	7.5YR5/6 明褐	中・並					1.9		破片	K285

第 27 表 形象埴輪観察表 1

報文 番号	古墳名	出土位置	種類	器種	調整		色調		胎土	口径	計測値 (cm)		残存 率	備考	備品 番号
					外面	内面	外面	内面			器高	器壁厚			
155	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	ハケ後線刻		75YR6/6 橙		中・並			1.3	破片	飾り板部小片	498-2
156	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	線刻・マメツ		75YR5/6 明褐		中・並			1.3	破片	飾り板部破片	1077-1
157	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	ハケ後線刻		75YR6/6 橙		中・少				破片	飾り板部小片	491-2
158	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	線刻・マメツ		75YR6/6 橙		中・並			1.7	破片	飾り板部小片	499-1
159	今岡古墳	前方部	形象埴輪	蓋形埴輪	ハケ・線刻		5YR5/6 明赤褐		中・並	細・少		1.2	破片	飾り板部小片	257-10
160	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	ハケ後線刻		25YR4/8 赤褐		中・並			1.5	破片	飾り板部小片	491-2
161	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	ハケ後線刻・マメツ		5YR7/8 橙		中・少			1.6	破片	飾り板部破片	485-1
162	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	ハケ後線刻・マメツ		5YR5/6 明赤褐		中・並			1.8	破片	飾り板部破片	1246-1
163	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	ハケ後線刻・マメツ		75YR6/8 橙		中・並			1.5	破片	飾り板部破片	1246-1
164	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	線刻・マメツ	ハケ・マメツ	75YR5/6 明褐	75YR5/6 明褐	中・並			1.5	破片	外面赤彩	1246-1
165	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	ハケ後線刻・マメツ		5YR6/6 橙		中・並			1.3	破片	飾り板部破片	1246-1
166	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	ハケ後線刻		5YR6/8 橙		中・少			1.3	破片	飾り板部小片	491-2
167	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	線刻・マメツ		5YR5/6 明赤褐		中・並			1.3	破片	飾り板部破片	1246-1
168	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	ハケ後ナデ・線刻		25YR5/8 明 赤 褐		中・少			1.3	破片	飾り板部破片	491-2
169	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	ハケ後ナデ・線刻		25YR4/8 赤褐		中・並			1.7	破片	飾り板部破片・ 赤彩	1364-2
170	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	ハケ後線刻	線刻・マメツ	75YR6/6 橙		中・並			1.4	破片	飾り板部小片	1246-1
171	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	ハケ・線刻		75YR7/6 橙		中・少			1.3	破片	飾り板部小片・ 赤彩	491-2
172	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	ハケ・線刻・マメツ	ナデ?マメツ	5YR5/6 明赤褐		中・並			1.5	破片	飾り板部破片	1077-1
173	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	ハケ後ナデ・線刻		5YR6/6 橙		中・並			1.4	破片	飾り板部小片・ 赤彩	1073-2
174	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	ハケ後線刻		5YR6/6 橙		中・少			1.6	破片	飾り板部小片	491-2
175	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	ハケ後線刻		10YR6/6 明黄褐		中・少			1.4	破片	飾り板部小片	491-2
176	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	ハケ後線刻		10YR4/3 にぶい 黄褐		中・少			1.5	破片	飾り板部小片	491-2
177	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	ハケ・ナデ後線刻		5YR5/6 明赤褐		中・並			1.6	破片	飾り板部破片	498-2
178	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	線刻・マメツ		75YR6/6 橙		中・少			1.5	破片	飾り板部破片・ 方形透孔	491-2
179	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	ハケ後線刻		75YR6/6 橙		中・並			1.3	破片	飾り板部小片	491-2
180	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	飾り板：ハケ・ナデ後線刻、軸部： ハケ・ヨコナデ	軸部：ハケ後ナデ	75YR5/8 明褐	25YR4/8 赤褐	中・並		133	1.2	破片	軸部完存	138214
181	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	飾り板：ハケ・ナデ後線刻、軸部： ハケ	軸部：ハケ後ナデ	5YR6/8 橙	75YR4/4 褐	中・並		108	1.4	破片	軸部完存	K274
182	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	ナナメハケ	板ナデ後指オサエ・ナデ	75YR6/6 橙	75YR6/6 橙	中・並	171			1/8	軸部破片	491-2
183	今岡古墳	前方部斜面?	形象埴輪	蓋形埴輪	笠部：突帯貼付	笠部：轆ケズリ後ナデ	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	中・並				破片	笠部上半	257-2
184	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	笠部：突帯貼付・ヨコハケ・マメ ツ	軸受部：ヨコハケ、笠部：ハケ 後ナデ	5YR6/4 にぶい 橙	5YR7/4 にぶい 橙	中・並				破片	笠部上半・外面 赤彩	498-2
185	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	マメツ	ハケ後指オサエ・ナデ	25YR6/6 橙	5YR6/4 にぶい 橙	中・並				1/8	笠部上端	498-2
186	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	ハケ後線刻	指オサエ・ナデ	5YR6/4 にぶい 橙	5YR6/4 にぶい 橙	中・並				破片	笠部小片・外面 赤彩	491-2
187	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	マメツ	ナデ?マメツ	75YR6/4 にぶ い橙	25YR6/6 橙	中・並				破片	笠部小片	499-1
188	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	マメツ・突帯貼付	指オサエ・マメツ	5YR5/6 明赤褐	25YR5/6 明 赤 褐	中・並				破片	軸受け部小片	1077-1
189	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	笠部：タテハケ後ヨコハケ・突帯 貼付	笠部：ナデ・指オサエ	5YR6/6 橙	25Y5/6 明赤褐	中・並				1/8	笠部上半	K258
190	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	ハケ・突帯貼付	指オサエ・ナデ	75YR6/4 にぶ い橙	5YR5/6 明赤褐	中・並				破片	笠部小片	1073-2
191	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	笠部：ハケ後線刻	笠部：マメツ	75YR6/4 にぶ い橙	5YR6/4 にぶい 橙	中・並				破片	笠部下半	498-2

第 28 表 形象埴輪観察表 2

報告 番号	古墳名	出土位置	種類	器種	調整	色調	粘土	口径	器高	底径	器壁厚	その他	残存 率	備考	備品 番号
192	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	ハケ・マメツ	外面	内面					446	破片	埴輪小片	1077-1
193	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	指オサエ・ナデ	75YR6/4 に ぶい	5YR5/6 明赤褐						破片	埴輪小片	1246-1
194	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	ヨコハケ・マメツ	75YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐					604	1/8 未 満	埴輪下部	498-2
195	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	笠部：マメツ	10R6/6 赤褐	5YR6/4 にぶい					666	1/8 未 満	埴輪下部	475-1
196	今岡古墳	後口部重部？	形象埴輪	蓋形埴輪	線刻・マメツ	5YR5/4 にぶい 赤褐	5YR5/6 明赤褐							埴輪小片	475-1
197	今岡古墳	後口部重部？	形象埴輪	蓋形埴輪	指オサエ・ナデ	75YR6/6 橙		7.0 (長) 3.7 (幅)	3.9 (高)				破片	埴輪小片	475-1
198	今岡古墳	後口部重部？	形象埴輪	蓋形埴輪	指オサエ・ナデ	5YR6/6 橙		9.2 (長) 3.5 (幅)	4.0 (高)				破片	埴輪小片	475-1
199	今岡古墳	後口部重部？	形象埴輪	蓋形埴輪	指オサエ・ナデ	75YR6/6 橙		8.8 (長) 3.6 (幅)	5.6 (高)				破片	埴輪小片	475-1
200	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	ナデ？マメツ	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐				1.5		破片	埴輪小片	1077-1
201	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	ハケ後ナデ・マメツ	25Y5/8 明赤褐	25Y5/8 明赤褐				1.5		破片	埴輪小片	K258
202	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	線刻・マメツ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙				1.2		破片	埴輪小片	1073-2
203	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	指オサエ・ナデ	25YR5/6 明 赤 褐	25YR5/6 明 赤 褐				1.2		破片	埴輪小片	1077-1
204	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	ハケ・ナデ	75YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐				1.1		破片	埴輪小片	1246-1
205	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	タテハケ後ナデ	25YR4/8 赤褐	5YR5/6 明赤褐				1.3		破片	埴輪小片	1246-1
206	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	タテハケ・マメツ	25YR4/8 赤褐	25YR4/8 赤褐				1.4		破片	埴輪小片	1246-1
207	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	ナデ？マメツ	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐						破片	埴輪小片	1077-1
208	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	指オサエ・ナデ	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐						破片	埴輪小片	1246-1
209	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	指オサエ・ナデ	25YR5/6 明 赤 褐	25YR5/6 明 赤 褐						破片	埴輪小片	1246-1
210	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	ナデ？マメツ	10YR5/6 明赤褐	10YR5/6 明赤褐						破片	埴輪小片	1077-1
211	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	ナナメハケ後ミガキ・マメツ	25YR4/6 赤褐	5YR5/6 明赤褐				1.7		破片	埴輪小片	1077-1
212	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	タテハケ	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐				1.4		破片	埴輪小片	1077-1
213	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	タテハケ・マメツ	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐						破片	埴輪小片	499-1
214	今岡古墳	後口部東側	形象埴輪	蓋形埴輪	ハケ・マメツ	5YR5/6 明赤褐	7.5YR6/6 橙				1.4		破片	埴輪小片	483-4
215	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	タテハケ後ナデ・マメツ	5YR5/6 明赤褐	10YR7/3 にぶい 黄褐				15.6		2/8	埴輪小片	4 9 8 - 1498-1
216	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	タテハケ・ヨコナデ	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐				21.7		1/8 未 満	埴輪小片	485-1・ K263
217	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	指オサエ・ナデ・マメツ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙						破片	埴輪小片	491-2
218	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	マメツ	10YR6/6 明赤褐	5YR6/6 橙	17.5					1/8	埴輪小片	1077-1
219	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	ハケ後突帯貼付・マメツ	5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶ い				1.3		破片	埴輪小片	499-1
220	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	ハケ・ナデ・マメツ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙						破片	埴輪小片	1077-1
221	今岡古墳		形象埴輪	蓋形埴輪	ハケ・ナデ後線刻	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙				1.9		破片	埴輪小片	1028-1

第 29 表 形象埴輪観察表 3

香川県埋蔵文化財センター年報

平成 27 年度

平成 29 年 2 月 28 日 発行

編集・発行 香川県埋蔵文化財センター

〒 762-0024

香川県坂出市府中町南谷 5001 番地 4

電 話 (0 8 7 7) 4 8 - 2 1 9 1

F A X (0 8 7 7) 4 8 - 3 2 4 9

印 刷 ワールド印刷株式会社